昭和八年九月五日印刷納本　每月一回一日發行
昭和八年九月十日發行

精神分析

昭和八年九月

第五號

兒童心理研究號

――（裏面へ續く）――

東京精神分析學研究所出版部

兒童心理に關するフロイドの文献

（最後のを除いて全部邦譯あり）

一、『**快不快原則を越えて**』――第二章に子供の遊びに就いての研究がある。

一、『**强迫神經症の一例**』――內に『小兒の性感』と題する一節がある。

一、『**性說に關する三論文**』――この內第二論文全體が『幼兒性感』論である。

一、『**レオナルド・ダ・ギンチの幼兒期記憶**』――禿鷹の尾が唇にふれたとの記憶をダ・ギンチが持つてゐた。その乳兒期記憶と彼のモナ・リーザの微笑との關係を細かく論じたもの。

一、『**ゲーテの幼兒期記憶**』――ゲーテが幼時に窓から瀨戶物を投げ出して惡戯をした、その心理を分析したもの。

一、『**氣味惡さ**』――內にホフマンの『砂男』を論じ、その作者の幼兒的去勢恐怖を論じてゐる。

一、『**夢と童話**』――幼時に聽いた童話の成人後に及ぼす意義を論じたもの。

一、『**トーテムとタブー**』――第四章は『幼兒に於いて復活するトーテミズム』と題し、兒童の動物恐怖心理を論ず。高島平三郎氏の本誌論文參照。

一、『**子供の噓二つ**』――躾けのよい子供が噓をつくのには、特別の意味があるから、無暗に叱らずによくその動機を調べて見ねばならぬとて、具體的な例に就いて論じてゐる。

一、『**精神分析入門**』――第八章に『子供の夢』と題して、種々の例が擧げてある。

一、『**五歲男兒の恐怖症の分析**』――ハンスと云ふ少年の分析治癒經過報告。

フロイド氏と兒童心理を語る

高島平三郎

私は大正十五年（一九二六年）八月、國際少年團の大會がシワイツのカンデルステッグに開かれし際、我が國よりのデレゲーツの一人として出席し、會議の終了と共に、歐洲の各國を歷訪し、十月二日、ヴィンにジグムンド・フロイド氏を訪うた。豫て電話で打合せて置いたので、約束の午後二時頃刺を通ずると、直ちに診察室に通されたが、待つ間も無く、氏は丈高き老軀を元氣よく現はし、手を伸べて握手し初對面の挨拶が濟むと、日本人にして自分の住家に尋ねて呉れたのは君が初めてゞあると云うて、喜んで呉れた。氏は當時舌癌の手術した後であると聞いて居たが、多少談話が流暢を缺く位でなか〳〵元氣であつた。

私は往年催眠術を研究した際、此の學說のパリー派ナンシー派の區別等より、かねてジャン・マルタン・シャルコーJean Martin Charcot（1825—1893）の事を調べて居り、フロイド氏が、シャルコーに就いた事のあるを知つて居つたので、その事を話し、日本にも、今なほ健在せる三浦謹之助といふ醫學博士があり、君と同門であると話したが、フロイドは三浦氏を知らぬ樣子であつた。多分年代も異り、互に會つた事も無かつたのであらう。この話をしたら、氏は起つて書齋に入り、一葉の古き寫眞を持つて來て見せて呉れた。これは、氏がパリーのサルペトピエールに在る時、

シャルコーその他の人と寫したものである。

之に因つて、私は更に先年フロイドが、米國マッサセッツ州クラーク大學の廿年紀念祭の時招かれて同校にゆき、專門の精神分析の講義をなした事を思ひ出し、當時同校總長スタンリー・ホール G. S. Hall.（1846—1924）初め、米國の學者がフロイドの學說に興味を有し、氏はこの講義のみならず、歸途なほ他の大學に於て講演を依賴せられし事をペダコヂカル・セミナリーその他の雜誌で讀んだことを話し、クラークの聽講者の中には、日本人も二三人居た筈であると附け加へたら、氏は急に輝いた顏に笑を含み、私等を案內して、書齋に通して吳れた。

氏の書齋は素朴であるが、なか〳〵廣く、正面及び左側の壁面には、廣大な書棚が作り付けになつて居り、幾千とも數知れぬ典籍が、ぎつしり詰つて居る、なほ氏は、自己の學說との關係からでもあらうが、歷史以前の人類學的硏究に興味があると見えて、多くのエヂプト、希臘、北歐のものとも思はれる古陶磁その他の古物をなか〳〵多く蒐集して居るのを見た。机は我國の疊二枚以上の廣さあらうと思はれる大きなもので、劇で見るファウストの机を聯想せしめた。この上にも、古器物や書籍やペン、インク、用紙などが、亂雜に排べられて居た。こんな混雜して居る机上にも、一朶の花が瓶に挿して置いてあつた。大分あせて居たけれども、歸りがけに、私と一しよに往つた小山秀子といふ大阪幼稚園の中老婦人に、その花を手づから折つて、襟に挿してやつた。氏は當時日本流の數へ年にすると、七十二歲であつたらうが、婦人を尊敬することを忘れなかつたのである。

私は筆の序に書き過ぎて了つたが、フロイドが診察室から自ら起つて、私等を書齋に案內した目的は、クラークに於ける寫眞を見せる爲めであつたのである故、氏は書齋の左側の奧に掲げてある大きな寫眞の下に、私等を導き、自ら指示して吳れた。この寫眞には、氏を中心にホールその他の敎授や、各地から來會した多數の學者が一緖に寫つて居り、中に日本人も二人ほど目に着いたが、その誰であるかはよく分らなかつた。氏の話の樣子では、當時の思ひ出

は餘程愉快らしかつた。

それから書き落したが、氏の机上正面に、日本の銅佛の一呎ばかりの像が飾つてあつた。私は、どうして手に入れたかと尋ねたら、先年日本人から贈られたといふたやうに記憶して居る。氏はかういふ物にも、趣味を有して居るとも見える。かくて書齋のあちこちを見ながら、いろ／＼話し、再び診察室兼應接間に歸り、次の話をした。

それは、私は心理學特に兒童心理學に興味を有して、多年研究して居るのであるが、兒童は勿論、青年壯年に及んだ者でも、つまらぬ動物その他の物を恐れる事があるのを調査して、第一印象（エルステル・アインドルック）の說を立てた。それは、兒童が幼弱の頃、何か初めての動物その他の物の印象を受くるに際し、驚怖を感ずると、それが永く無意識に痕跡を留め、成長の後にも同じ印象を受ければ、驚怖するのであると說くのである。それは、全く君のリビドーの說などに無關心の頃、考へついたのであるが、後に君の分析說を讀んで、非常に愉快に思つたと話したら、氏は非常に喜び、どうぞ私の子供の恐れに就いて記した物を讀んで吳れと話した。私は之を承諾し、氏の寫眞を乞ひ得て手を分つたのであつた。氏は入口まで送つて來て、アウフ・ヴィーダー・ゼーヘン（左樣なら）の堅い握手を交換したのであつた。當時小山女史の外に、ヴィン大學に留學して居た河原明醫學士も一緒に往き、通譯の勞もこの人が取つて吳れたのであるが、爾後兩氏とも杳として音信を斷つて居るが、今どうして居るか。この文を認めつゝ、當時を囘想して、非常に懷しく思うて居る。

かくて昭和二年一月、米國を經て歸朝以來、既に六年以上を經過したが、私はフロイドが讀んで吳れといふた著書を繙かうともせなんだ。これは、私が他の事に忙しい爲めでもあるが、私はどうもフロイドの學說が、餘りに詩的空想的のやうに思はれて、私の研究的興味を惹かなかつたのも、その主なる理由であつた。併し、頃日我が國に、フロイドの學說の研究や應用の會の出來て來た事は、嬉しく思つた。それは、私個人の興味は兎に角、苟も世界の研究問

題となつて居る精神分析學を、日本の學界で風馬牛である可きでないからである。それで、私は勸められるまゝに、この研究所の客員となり、又この度請はるゝまゝに、以上述べた如くに、私がフロイドを尋ねた時の話をすることにしたのである。

それに就いては、かねてフロイドとの約束を果して置かねばならぬと思ひ、同氏の一九一二年に出版した『トーテム・ウント・タブウ』の中にある子供の動物嫌惡に關する氏の說を讀んで見た。その大要は次の通りである。

『動物に對する子供の關係は、未開人によく似てゐる。つまり兩者とも、動物と同類關係にあるやうに、同感を有するものである。併し、之を裏切るやうな障碍が往々現はれる。それは所謂動物恐怖(チーア・フォビー)である。通常子供が强く興味を有する馬、犬、猫、稀には鳥や南京蟲、蝶の如き動物が、その對象となることがある。」

「かくの如く、恐怖の對象となる動物の異常なる選擇は、どうして起るかといふことを知るのは、極めて困難である。余はそれが爲めに、カール・アブラハム Karl Abraham が、或る子供が胡蜂(はち)の胴題の色彩及び線條に依つて、虎を思ひ起したことにより、胡蜂を恐怖するやうになつたといふ說明を與へたことを感謝して居る。」

「子供の動物恐怖症は、極めて價値ある研究對象であるにも拘はらず、從來注意深い分析的研究の對象となつて居なかつた。幼い子供を精神分析の對象とすることの困難が、恐らくは閑却の動機であつたらう。それ故この病症の一般的意味が判つて居ると主張することは出來ぬ。且つ余は之を單一のものとして說明し得るものでは無いと考へる。併し、比較的大きな動物を對象とする恐怖症の一が、分析的研究を容れる餘地あることを示し、その秘密を研究者に漏すに至つた。」

といふて、この恐怖も、つまりエロチズムスに基くエディプス・コムプレクスから起つて居ると說いて居る。即ちこの恐怖嫌惡も、畢竟父を目標として居るものであつて、それが動物に移されたに過ぎぬといふのである。氏は之に

就いて、いろ〳〵例を擧げて居るが、私はこれは餘りにすべてを自說に引き着けんとする點より、無理があると思ふ。成る程、大きい動物を恐れる者の中には、かういふ場合も時としてあるかも知れぬが、それにしても、すべてがかうとは決して斷言出來ぬと思ふ。氏自らいうて居るやうに「單一のものとして說明することは出來ぬ」と思ふ。大きい動物は、先づそれとしても小さな動物又はつまらぬ無生物などを恐れるのは、どうして說明するか、これは氏も困つて居るやうである。

私は前に述べたやうに、之を第一印象で說明せんとするのである。すべて、恐怖はその初本能で、初めての經驗に於いては、必ず多少之を感ずるのであるが、その特に刺激の異樣で、非常に驚き恐れた物は、深き印象を留め、假令日常活動して居る意識からは脫落して居ても、何かの機會に、之が下層意識から擡頭して來るのである。私は之は多くの成人に就いても質し、又子供に就いても實驗して、今日でもこの說を信じて居る。私がフロイドに面會した時、フロイドのこの說をよく讀んで居たら、もつと突込んで話して見たかつたのに、殘念なことをした。一體フロイドがリビドーを性的に限るのは、面白い說であるけれども、少し無理がありはせぬか。それよりもアドラーの慾望說や、更にユングの自己發達や、自己適應說の方が、一層現實の事實に適切ではないかと思ふ。併し私は前に述べたやうに、まだよく硏鑽して居らぬのである故、この會に贊成したのを機會に、今後注意して、この說に認識を進めたいと思ふ。

それに就いても、會員諸君の贊助指導を仰ぎたいものである。恰も本號は私の多年專攻せる子供の心理に關する特別號であるといふ事であるのに、私がフロイドと話した事が、丁度子供の恐怖に關して居たので、先日の會で話した事に基いて、特に本號の爲めにこの一小文を認めた次第である。

兒童の供述と聯想診斷

塚原政次

兒童は純眞でエンゲルのやうであるとか、又は無邪氣で正直で決して虚言を云はないとかいふことは一般に人の唱へる所であり、又人々の確信する所である。詩歌や小說や劇や畫題などに於ても大抵兒童の此方面を採つて居るやうである。しかしこれは兒童の唯一方面のみを觀て他の方面を全然忘却せるものである。兒童は却つて衆言者であるといふことが正當に考へられる場合が決して少くない。しかし茲に謂ふ虚言者とは普通に謂ふ虚言者とは大に其の趣を異にして居る。概言すれば、虚言者とは自から自分の述べることが虚僞であることを認識しつゝ陳べるのであるが、兒童を特に虚言者といふ場合は兒童自からは眞實のことを述べて居るつもりであるに實はそれが全然虚僞であることがあるのである。かやうな虚言者は之を眞の虚言者と區別する爲めに自然的虚言者といふことになつて居る。チョット斷つて置くが、兒童は何時でも自然的の虚言者であるといふ意味ではない、固より兒童でも一時を糊塗する爲めに眞の虚言者たることも多いことを忘れてはならない。私は茲には特に兒童の供述に虚言の多いことを述べて其の理由を研究して見たいのである。

供述とは申す迄もなく獨逸語の「アウスザーゲ」の譯語で、法廷又は警察などに於て原告又は被告又は證人が宣誓

を爲して事實を陳述することをいふのであるが、兒童の供述に就いてはこれを擴充して廣く兒童が事實として述べることを指すのである。私は兒童期を誕生から十四五歳（破瓜期）迄として居るのであるが、この兒童の供述は輕々しく信用することは出來ない、又この供述を以て直ちに眞實となしこれを證據として物事を斷定することは出來ないと主張するのである。しかし兒童の虛言は必ずしも青年などの虛言とは異つて直ちに彼を虛言者と爲し卽ち不良少年と爲すことも出來ないと考へて居る。加ふるに、兒童の自然的虛言は敎育に依つて漸次にこれを矯正することも可能と信じて居る。

私はこれから兒童の自然的虛言の原因に就いて硏究して見ようと思ふ。

(一)兒童は實際知覺した事と知覺した際に合せて想像した事とを多く混同し易い。もつと大まかに云ふと、想像と事實とを區別しないことが多い。是れは野蠻人に於ても亦同樣である。私はかの神話といふやうなものは多くは野蠻時代に想像したことを事實の如く後世に傳へたものでないかと考へて居る。しかし私は特に神話を精しく硏究した譯ではないから敢てそうだと斷言はしない。

例へば、昨夜臺所の戸棚の中へ饅頭十個を納れて置いたが、翌朝になるとそれが八個しかない。これはどうした譯であらうか、鼠でも引いたのではなからうかと詮議して居ると、本年十歳になる子供が夕べ女中が臺所で饅頭をソツと食べて居たと證明するが如きことがある。これが事實ならば固より論はないが、多くは鼠などに引かれて無くなつたのを、子供の供述を信ずることになる。子供は別に女中をこまらしてやらうとか、又實際それを目擊した譯ではなく、單に想像したことか、又は饅頭から想像したことを事實のやうに考へて陳述するから虛言となるのである。

(二)兒童は一般に被暗示性に富むからして幼少なほど他から暗示を受け易い、隨つて虛言が多いことゝなる。例へば私は日曜日などに友人を訪問せんとし、その宅の門前に往くと友人の子供が遊んで居るからその子供に向つて「お

父さんは留守ですか」と尋ねると「エー」と答へたからして、私は友人はよく日曜日には天氣がよいと釣に出かけるから多分その日は釣に出かけたのではないかといふ考から「お父さんは留守ですか」と尋ねたら果して「エー」と答へたからその日はその儘友人の宅へは這入らないで他の家を訪問した。然るに翌月曜日に友人に逢つたので「君は昨日訪ねたが留守であつた」と云ふと友人は「イヤ朝から來客があつて釣にも行かず終日宅に居つた」といふ答で喫驚したことが往々あつた。これなどは友人の子供が私の暗示（留守）によつて、父は殆んど日々晝は留守であるから實際の事柄をよく考へないで只「エー」と答へた譯であらう。又或る時は友人を訪問せんと門前にて「お父さんはお內ですか」と尋ねると友人の女兒が「エー」と答へたから、その宅に這入つてみるとその友人は一週間ほど前から出張して留守であつたことがある。これなども私が「お父さんはお內ですか」と尋ねた暗示をうけてそうだと思つて「エー」と答へたものであらう。

此の如く暗示を受け易い上になほ兒童には模倣性が旺盛であるから、一層虛言を爲し易くなるものである。今その一例を擧げて見よう。小學校などで受持の訓導がその學級の兒童に向ひ「これから運動場へ出るから皆帽子をかぶつて出でなさい」と命令した。然るに一兒童は大變遲れて運動場に來り而も帽子をかぶつて居ないからどうしたと訓導が聞いたら、朝學校へは帽子を着て來たのにいくらさがしてもどうしてもないと答へたので、訓導は朝同伴して來た級友に「某は朝帽子をかぶつて來たか」と問ふと級友の一人は「エー」と答へた。そこで他の級友にもう一度念の爲めに聞くと矢張り「エー」と答へ、なほその他の級友に聞くと何れも異口同音に「某は帽子をかぶつて來た」と答へた。そこで訓導はその日生徒の盡く歸り去つた後にも教室は勿論その他の場所をも捜がしたがとう〳〵帽子は見當らなかつた。然るに翌朝その生徒は平常の通、帽子をかぶつて學校へやつて來たので訓導は「君は帽子はどうした」と尋ねると「內にありました」と平氣であつた。これなどは數名の級友の供述は全然虛僞であつたことゝなる。これは

確に兒童の被暗示性と模倣性とが原因となつて多數の虚言者を作つたことゝなつた譯である。

(三)兒童の言語が未だ不十分であることも亦虚言の原因となる。幼少なる兒童では人から何か尋ねられると、答は必ずや「エー」か「イイエ」かである。即ち中間の「でありましよう」「そうでないかも知れません」といふやうな答は出來ない。丁度これは外國語の未熟者の言語とよく似て居て「イエス」と「ノー」との外に中間のデリケートな返事が出來ないやうなものである。兒童の言語の不十分なところからして十分に自分の意志を發表することが出來ないで不徹底な言語を用ふるので、誤謬を惹起し又虚言をも爲すことゝなり易い。此原因が多分に兒童の虚言を助けることゝなるから、十分彼等に同情して彼等の言語の意義を考へてやる必要がある。

(四)兒童の記憶は良好であるといふ說もあるが、言語的記憶は相當よきも論理的記憶は到底青年や又壯年には及ばない。殊に幼少な兒童は記憶が薄弱でその上に記憶交錯が起り易いので、是等が亦兒童の虚言の原因となり易い。幼少な兒童は時間の觀念が殊に薄弱で容易に信用し難いが、況や時間に關する記憶に至つては不正確である。その上に記憶交錯即ち未だ嘗て經驗したことのないものを恰も已に一度經驗したかの如く考へて想起す場合があつて、これが間違の原因となることがある。成人でも始めて出逢つた人を嘗て出逢つた人のやうに思ふことは決して少くはないが、兒童に於ては此種のことが一層多い譯で、これが虚言の原因となるものである。

(五)兒童の思考は周密でないが、これが亦兒童の供述の信用すべからざる原因となる。兒童が判斷作用をなすに當つて條件とか原因とかに就いて一々精細に亘つて思慮することはなく、只漠然として一二の條件とか原因とかを擧げるに止まることは當然である。隨つて思考がどうしても粗略であることは免れない。かやうにして自然に兒童の供述に虚僞が多くなる傾向が顯著である。

(六)兒童は未だ責任感が發達して居ない爲めに、自分の供述が間違つて居ても夫程に責任を感じないのである。兒

童期に於ては未だ眞の道德的情操が發達して居ないので、彼等の道德的行爲は權威、模倣及び習慣によつて爲すので、衷心からして已むにやまられぬ道德的感情の爲めに善を爲し又惡を憎む譯ではない。兒童は自分が輕卒な供述を爲した爲めに他人に非常に大きな迷惑をかけるとは少しも考へても居ないし又假令大きな迷惑をかけても何とも感じない狀態である。かやうな點からして兒童の不良行爲に關しても刑法上之を罰すべきではないといふ意見も强く現はれ、現今にては彼等を處罰する意味は全く無くなつたやうである。兒童に對しては靑年や壯年の如く其行爲に對して十分の責任を問はないことゝなつて居る。固より敎育上からは彼等にも自分の行動に對して責任を感ぜしめるやうに次第に習慣をつけるやうに努めることは申す迄もないことである。家庭に於ても又學校に於ても兒童に修身上の訓話を爲し種々の良習慣を與へることを努め、惡い行動に就いては之を嚴禁することを努めて居る。

以上私は、兒童の自然的虛言者たる原因を探求する爲めに種々の事例を擧げて之を立證したのであるが、單に是等の實例のみを觀ると兒童は如何にも虛言者であり又無責任であるやうに見えるであらうが、特に玆にはその方面のみを硏究したのであるからそのつもりで讀んでもらひたい。

終りに兒童の供述の眞僞を檢査するには固より種々の方法があるが、所謂聯想診斷 Association-Diagnosis なるものはその方法として頗る適當であり、又精神分析と密接な關係がある。聯想診斷の方法は元は犯罪心理學上の一方法として犯罪者が其の罪を自白せざるも他の種々の證據からして其犯罪を肯定し得るも、未だ犯罪者本人の告白なきが爲めに犯罪を確定することの出來ない場合に彼自分は意識せざるも聯想からして遂に其の犯罪を自白せざるを得ざるに至らしめるものである。そしてその聯想によつて自然に精神分析が出來るのである。これは普通に心理學に於て聯想の法則又は事實を發見する爲めに用ふる聯想實驗法に二種あつて單純聯想と反應聯想とあり、單純聯想とは一個の原觀念からして一定の時間順次に聯想し來る觀念を記錄せしめる方法で、反應聯想とは一個の觀念につきて一個の觀念

を聯想せしめ、しかも原觀念を多數引き續きて與へて直ちに反應的に聯想せしめる方法である。そして聯想診斷にはこの後者を用ふるのである。例へば家庭又は學校などに於て失せ物などありて、大體之を盜みたる兒童がわかつても本人が自白しない場合に、その本人に對して聯想診斷を用ふるときには多數の原觀念の間に時々その失せ物に關係する言葉を挾みて反應的に聯想せしめるときは、兒童の突飛なる聯想を爲すか、又はその語に限つて長い聯想時間を要することなどありて遂に兒童をして自白せしめるに至るものである。只此際注意すべきことは、假りに此聯想診斷によつて疑惑を增すもこれ丈にて直ちに犯罪を斷定することは危險である。必ず他に種々の證據があつてしかも聯想診斷によつても亦確實であるといふ場合に限るのである。

かやうに考へ來ると兒童には虛言が多い傾向が顯著であるが、兒童の虛言に就きては無暗に叱責せず、十分に同情してよく訓戒し、自分が確に間違のないことで無ければ供述せずといふ習慣を與へることに努力すべきである。兒童の虛言は幼少なれど虛言たることを認識して述べるのではなく、不知不識虛言を述べることをよく諒解して、彼等の訓育には甚大な同情と忍耐とを要するのである。隨つて彼等の虛言に就きてはあまり當初から失望しないやうに願ひたいのである。（完）

變態心理の兒童

長谷川誠也

「三歳兒の魂百まで」といふ諺は、誰でも知つてゐるが、その魂を、絶え間なく、詳密に研究してゐる人は、割合に少いやうだ。實際、幼年期の心理が、大人となつた時の性格の核心となるのだから、これを研究し、かつ善導することは、父母、教育家、心理學者、醫者、あるひは社會學者の重大任務である。もちろん、昔から、前記それ〴〵の位置にあつた者は、これを自覺してゐた。だから、この諺も作られたのだ。しかし、そのために、どれほど兒童を理解したかと言へば、その程度は、今日に至るまで、甚しく淺薄でもあり、また空想的でもある。あるひは tabula rasa 説を無批判的に受取つたり、あるひは神性の權化は兒童であるといふやうな詩人的觀念を尊崇したりするのがそれだ。さうして兒童心理學は、幾多篤實な研究家によつて、最近、大いに發達はしたが、その研究は、なほ明晰な意識の現象に限られてゐる傾きがある。この間において、精神分析の研究者が、無意識の方面から、兒童心理に探檢を試みつゝあることは、確かに新局面を開拓したものであると言はなければならぬ。なほ、見方によつては、精神分析といふものは、兒童心理の解剖を核心とすると言へるほどであるから、かりにも兒童の心理を研究の對象とするならば、是非ともこの心理學を顧みなければなるまい。

孔子の言に、「予（名人）の不仁なるや。子、生まれて三年、然る後、父母の懐を免がる。夫れ三年の喪は天下の通喪なり。予や、三年の愛、其父母にあるか」（論語の『陽貨』）といふのがある。これは三年の喪に服する孝子の性格を築き上げられる根元を説いたもので、心理學的に見れば、かなりおもしろい解釋を立てることができる。しかし、そのことは他日に讓るとして、今は、父母の懐にある三年といふものが、人の一生の心理が、重大な影響を及ぼすものだ、といふ意味が、この數語に含まれてゐることに注意してもらへば宜しいのである。この三年といふ數は、幼兒の家庭生活期（假りに誕生から就學年齡まで）を煎じつめたもの、言ひ換へれば、人の性質の核心が構成される時期の最も大切なものである。家庭生活とは、言ふまでもなく、父母、兄弟、姉妹の關係から成り立つてゐるもので、それらの相互關係が、兒童の心理に、深刻な影響を及ぼすのだから、研究者は、兒童を直接の研究對象とする同時に、その家庭生活を顧慮しなければならぬ。

精神分析の立ち場から、兒童を研究したものは、最近、歐米において續々出版されつゝあるが、その大躰の研究方針を說くと共に、他の學問の具躰的研究をも取入れて、研究原則を說明したものは、一九二一年初版、一九二六年再版のフリューゲル著『家庭の精神分析的研究』（"The Psycho-Analytic Study of the Family." Dr. J.C. Flügel.）であらう。この書は、世界大戰後の社會改造に貢献する目的をもつて書かれたものである。今日の社會改造には、生物學、生理學、醫學、衞生學、經濟學、政治學、法律、教育等、各方面から寄與しなければならぬが、改造のためにはなんと言つても、先づ人間を優等に成さなければならぬ。さうして、そのためには、人心の研究が必要であり、人心善導のためには、家庭生活の研究が必要である。殊に、幼兒の心理發展のさまを考究して、これを善導することが肝要である。これが著者の趣旨である。われ〳〵が少年時代に讀まされた『大學』にある有名な文章、卽ち「其國を治めんと欲する者は、先づ其家を齊ふ。其家を齊へんと欲する者は、先づ其身を脩む。其身を脩めんと欲する者は、先

づ其心を正しうす。其心を正しうせんと欲する者は、先づ其意を誠にす」といふ語は、かなり漠然たる意味で、殊に「心」と「意」との使ひ分けを領解することは、甚だ難儀であるが、しかも、その主旨が、フリューゲルの考へと一致してゐることは明白である。あるひは言ふ人もあらう、今さらこんな文句を引張りだすには及ぶまいと。しかし、先哲のこの教訓は、傳來の支那倫理思想をもつて解説すればこそ、なんとなく今の時世に合はないやうに思はれるが、これを改めて心理學的に解釋するならば、新らしい生命を發揮するだらう。

私は、今後、機會あるごとに、フリューゲル説を參考にしながら、本誌上において、兒童心理の發展を考究して見ようと思ふが、それについては、先づ除外例のことを述べて置かなければならぬ。それは變態心理の兒童のことである。言ふまでもなく、家庭生活の不整調は、さま〴〵な變態心理の者を社會へ送り出すことになるのだが、生まれながらにして變質者となる傾向をもつてゐる幼兒もあるのだ。だから、父母としては、幼兒の心理を善導するために、深く考へなければならぬと同時に、その兒が變質者となる性向をもつてゐはせぬか、といふことを、常に念頭に置かなければならぬ。また小學教師としても、このことを鑑別するだけの用意がなくてはならぬ。そこで、この鑑別については、ユングの教育論中に、參考にすべきことが述べてあるから、その要旨を紹介して置かう。斷つて置く。多少私見を加へた處もあるが、これがために、ユングの主旨を曲げてゐないつもりである。

常態の子供の心理を知ることは困難でないけれども、變態心理の子供を理解することは、非常にむづかしいばかりでなく、時には誤解することがある。言ふまでもなく、變態心理の兒童には、特別の教育を施さねばならぬのだが、この誤解のために、せつかくの教育が、却つて惡い結果を生ずることもある。例へば、輕微な心理不整調の兒を、變質者扱ひにするために、正軌道に歸り得べき傾向あるものが、却つて不整調を甚しくするやうな場合がそれである。

ユングは變態心理の兒童を五類に區別してゐる。(一)心理發達の停滯してゐるもの、(二)道德的に缺陷あるもの、

(三)癲癇患者となるもの、(四)神經症のもの、(五)早發性癡呆となるもの、以上の五類である。

第一類。この類に屬するもので、極めて明瞭なタイプは白癡、または低能兒である。ところが、低能兒のやうであつて、しかも全くの癡呆でないものがある。これは、心理發達の停滯してゐるもので、その行動は、低能兒と頗る好く似てゐるけれども、どこか異なつてゐる所もあるから、その差別を識別することが、父母、教師、または精神病學者の責任である。

ユングの取扱つた例がある。六歳の男兒で、何に不足なく養育されたが、激怒し易く、疑り深く、意地悪く、强情で、我意が强い上に、物言ふことを拒む性質であつた。彼の激怒は猛烈で、玩具を破壞し、時には父母や娛姆すらも危險を感ずるほどであつた。そうしてその心理の發達は、年齢に比して遲れてゐた。だから、低能兒と判然しても差支へないほどであつたが、その行動は神經症的であり、また、物を言ひ得ないと言ふほどの白癡でもなく、その無言は、殊更に發言を拒むのであつた。既に兒童に、神經症的徵候が現れてゐるならば、保護者は、その兒の無意識の働きに注意を向けなければならぬ。さうしてそのためには、その兒の母をはじめとして、周圍の事情を、詳細に研究する必要がある。なぜなれば、兒童の神經症の原因——少くともその要素——となるものは、どんな場合にも、間違ひなく父母であるからだ。ユングは、この方針に據つて、この兒の家庭を調査したところ、この兒は數女兒中の唯一の男兒であり、母親は我意强く、野心に滿ちた女性であつた。この母は、曾つて醫師から、この兒の不健全なことを聞かされたが、それは醫師の觀察違ひであると思ひなし、子供の心理停滯は、單に我儘からであると解釋して、殆んど何等特別の教育法をも試みなかつた。いや、殆んど教育らしい教育を授けなかつたのである。もちろん低能兒の類に屬する兒ではあつたが、若し母親に相當の理解さへあつたならば、これほどまでに心理發達が停滯することはなかつたらう。この母親は、その兒の心理誘導を考慮せずに、たゞ自身の我意强さと野心とを傳へただけであつた。ユング

はなほ他にも、同樣な境遇における、同樣な男兒を知つてゐると言つてゐる。この兒は、激怒の際×遂に斧をもつて繼父を殺すに至つたさうだ。

心理發達の停滯してゐる兒童の例は、最初の子供、並びに心理上の調和を缺いてゐる兩親の子供のうちに多いと。かう言はれて見ると、「總領の甚六」といふ諺を思ひ出さゞるを得ない。なほユングは附言してゐる。姙娠中の母親の病氣、過度の勞働、出産時における異常な出血及び腦壓迫は、心理停滯の原因となることもあらう。なほ、全くの低能兒でない限り、心理發達の遲鈍な兒童は、教育上の促成法によらず、適宜に誘導すれば、普通の者よりも遲れるとしても、長い間には、完全な心理機能を有するに至るものだと。

第二類。 道德心の發達しない者は、概して先天的に心理に缺陷がある。外傷または病氣のために、腦の一部に故障ある者もまた道德的に低劣である。

道德心の發達の停滯してゐる兒童がある。これは、先天的に道德心を缺いてゐる者に似てゐるけれども、訓育が適切であれば、或程度まで、常態に近づけることができる。かやうな兒童の特徵は、奇怪な自我主義、性活動の早發、自己遂情、不誠實などで、概して人間的感情と愛とを全く缺いてゐる。

かやうな兒童の例は、庶子または養子のうちに多い。彼等は實の兩親の愛撫を受けないから、自然に不健全になるのであらう。兒童の身體は、生存上極めて必要である何物かを要求する。この何物のなんであるかを、能く知る者は實の兩親であるが、庶子や養子の境遇では、この滿足を得ることのできないことが多い。ことに彼等の無意識的活動、卽ち自己の力によりて、必要な物を獲得しようといふ慾望が動くのだ。旣に道德心の芽ざしてゐる者にあつては、自力によつて慾望を滿たさうといふ心理が有害となるわけは無いけれども、その萠芽もなく、あるひはその根すら無い者にあつては、これが不健全な自我主義の核となるのである。斷つておく、庶子や養子の大部分が變質者になるとい

ふのではない。彼等の大多數は、その境遇に適應して、立派な成人となるのだ。また、實の父母の膝下に育つ者でも、兩親の無理解のために、本來劣弱な道德心を、一そう低級ならしめることもあるのだ。ユングの知つてゐる例に、七歳の時に、四歳の妹に暴行を加へ、九歳の時に、父を殺さうとし、十八歳に達して、道德上、多少の缺陷あるにしても、とにかく人間並になつた者があると。おもふに、精神敎育が宜しきを得たからであつたらう。だから、幼兒の保護者としては、その道德心停滯の徵候に氣付いた時に、深甚な考慮をめぐらすことが必要である。改善の見込みがないと、早計に判斷するのは、薰育によつて常態に近づけ得る者を、慘刻に排除するに等しいことである。

第三類。 後年、癲癇患者となるものでも、その幼年期においては、その徵候の明白なものを表はさない例がある。しかし、經驗ある研究家ならば、兒童の癇癖、兇暴性、貪慾、感傷性、病的に强烈な正義感、自我主義、感興性の劣弱などの徵候中に、この恐るべき病症の芽を認めるだらう。かやうな徵候について、詳しく說明すれば宜しいのであるが、それは容易なことでないから、實例を擧げて、その一端を說かう、とユングは言つてゐる。

ユングの示してゐる例は、七歳の頃から、奇異な行動を表はした男兒である。最初に氣付かれた行動は、彼が突然姿を隱くすことであつた。家內の者が駭いて探がし廻つて見ると、屋根裏の隅、あるひは穴倉に隱れてゐるやうな有樣で、何故にかやうな行動をなしたのかは、少しも分からなかつた。時には、遊戲中、突然駈け出して、母のスカートに顏を埋めることもあつた。かやうな行動は、最初、稀であつたために、重大視されなかつたが彼が、就學後、學校において、突然その席を去つて敎師の傍に走り行くやうなことがあつてから、家族の心痛の種になつた。しかし、誰一人として重症の徵候であるとは思はなかつた。彼は遊戲中、突然これをやめたり、あるひは突然讀み方を中止したりしたが、その何故かを說明しないばかりか、中止したといふことをすら意識しないやうな有樣であつた。その後幾許もなく、激し易い性となり、九歳の時には、妹に鋏を投げつけて、額に重傷を負はせたことすらあつた。しかし、

唯一人として、彼を精神病研究者に見せては、と言ふ者もなく、いづれも單に惡童であると見てゐるだけであつた。ところが、十二歳の時に、初めて癲癇の明白な徵候が現れたのだ。

ユングは、非常な苦心をもつて、この兒の心理狀態を研究したのである。その報告の要點は次ぎのやうである。彼が何んとなく非常な恐ろしさを感じたのは六歳の時で、やがて、その恐ろしいものは、彼が曾つて見たこともない、短身有髯の人となつて現れた。この幻の男は、突然出現して彼に近づいて、或事を要求した。その或事の何んであるかは、容易に分からなかつたが、なだめすかして漸くに得た返答は、恐ろしい罪惡のことであり、その罪惡は殺人といふことであつた。そこで、彼が妹に大怪我をさせた後には、この幻の男の出現は止み、代りに看護婦のやうな尼姿の者が現れるやうになつた。その姿は、最初ヴェールを冠つてゐたが、後には蒼白な死の顏を表はした。この姿は九歳から十二歳までの間に現れ、その間、癇癖は强くなつたが、激怒の行動は止み、その代りに癲癇の發作が始まつたのである。犯罪を象徵する幻の男の姿に代つて、看護婦姿の現れたのは、明白な病症への轉換を意味するものである。なほ、ユングは附言してゐる。かやうな例には、原因が器質的ではなく、心理機能に在るものがあり、それらは、分析的療法によつて、或效果を擧げ得るだらうと。

私も、右に似た例を知つてゐる。これは女兒であつて、癇癖、兇暴、激怒といふやうな徵候はなかつたやうだが、少女の頃から、突然、家内の他所へ逃げ去り、部屋の片隅に潛んで。顏を隱くしてゐる行動が、しば／＼であつた。幼少年の保護者は、その愛する者の行動に、かやうな徵候の現れた時には、早速、醫家あるひは精神病學者に相談するが宜しい。さもなければ、常態に復し得べき者を、見す／＼不幸の淵に沈めることにならう。

第四類。神經症の兒童の徵候については、書き切れないくらゐの材料がある。異常にいたづらな行爲から、明白にヒステリー的であり、また病的發作であるものゝ間に、無數の徵候がある。生理的に現れるものには、ヒステリー

的熱、異常に低い體溫、痙攣、器官不能、苦痛、消化不良などがあり、心理または道德的には、昂奮、沈鬱、虚言、變態性慾、竊盗などがある。

ユングは一例を擧げてゐる。某少女は異常な便秘に惱み、種々の醫療を受けたが、殆んど效果はなかつた。この病症は一歳の時から始まつたのださうだ。ユングはこの患者を見て、多くの醫家が、重要な原因、即ち心理上のものを見落してゐることに氣付き、まづ少女の母親を注視したところ、果してその愛撫が原因であることが明瞭になつた。そこで、少女と母親とを隔離させ、他人を保護者にして見たところ、その翌日から病症は大いに輕減したさうだ。この少女は末子であり、母親は神經質で、片時もこの兒の世話を忘れなかつたのだ。即ち、母親の種々の恐怖症は、そのまゝ少女に移されたので、かやうな狀態は、蠕動機能にとつて、甚しく有害である。だから、少年少女の心理を研究する場合には、常に彼等の兩親、殊に母親の心理と行動とに注意しなければならぬ。これによつて、神經症の傾向を轉回させ得ることもあるのだ。

第五類。この類には、種々の精神病者となる傾向のものを入れるのだが、特に考究を要するのは、早發性癡呆となる者の行動である。この病症の初期は、兒童の不健全な心理狀態に現れることがある。概して言へば、行狀の奇怪な兒童は、後年、この病に犯されるのである。彼等の行爲は不可解であり、感性過敏、引込みがちで、その情緒は異常に無關心的であることもあり、また、些細な事に激しく感動することもある。

ユングは十四歳の少年の例を擧げてゐる。この兒の性慾は、突如として、しかも彼の睡眠と健康とを攪亂するほど不穩な有樣で動き出したのである。この惱みは、或席上において、彼が一少女にダンスを要求して拒絕された時から始まつたのだ。ダンスを拒まれた彼は、大いに怒つて家に歸り、學校の課業を勉强しようと試みたが、恐怖、憤怒、失望などの混合した、名狀し難い情緒のために、何事をも爲し得ず、その情緒は、ますます强烈になるばかりであつ

たから、彼は庭に跳び出し、殆んど無意識の狀態で、地面にころがつた。數時間の後、情緒は靜まつたが、代つて性慾の惱みが始まつたのである。これは早發性癡呆となる者の代表的な例である。なほ、この少年の親族には、數人の同病の例があるさうだ。

ユングは附言してゐる。少年の心理といふものは、容易に分析し難いものであり、これを分析しようと思ふ者は、精神病學や、醫學を十分に研究し、かつ自身が種々の經驗を積まなければならぬ。世間には、どんな初心者にも、心理分析は可能であると思はせる樣な書物もあるが、そんなものを輕々しく信じてはならぬと。心理は非常に複雜であり、一個人の心理は、それ〳〵獨自性をもつてゐるものである。さうして、人の心理を分析する事は、その人の生涯の幸不幸と密接な關係を有するのだから、この道に志す人は、ユングの警告を常に念頭に置かなければならぬ。(完)

『フロイドは、人々の大多數が、そして一般の心理學者たちでさへ信じようとしてゐる程、性一點張りではない。彼れの著作のうちには、その述作の細々したところの中に確かに見失はれてしまつてゐる或る重要な個所がある。精神分析を性的放縱のプロパカンダと同一視しようとする者は、次の言葉を考へ合せて見て、あらゆる抑壓の根强い反對者であると云ふフロイドの評判の眞僞を調べて見るがよい。「人が色情的慾求に對して置く價値と云ふものは、滿足が容易に得られるやうになるや否や、直ちに下落するのである。或る種の妨害と云ふものは、リビドーの潮流を最高度にまで隆起させるためには、是非とも必要である。……この點に於いてはキリスト敎の禁慾主義的傾向は、古代の異敎徒たちが嘗て成し遂げることが出來なかつたほど、戀愛の精神的價値を高めると云ふ效果を持つてゐたと云ふことが出來る。」勿論、今日でも舊い禁斷の果實の物語が多くの國民の諺の内に目立つて存在してゐる。併し上に引用した言葉の中には、殆どフィヒテ的と云つていゝ位な、理想主義の色彩がある。』(エ・エ・ロバツク原著、荒川芳三氏譯『動的性心理學』の内)

幼兒性感論の生物學的吟味

高水力太郎

右は『イマゴー』誌第十九巻（一九三三年）第一册に揭げられたマクス・レヴィ・ズール氏の『人間の早期幼兒性感と哺乳動物の性的成熟との比較』Max Levy-Suhl: Über die frühkindliche Sexualität des Menschen im Vergleich mit der Geschlechtsreife bei Säugetieren, と題する論文を紹介しつゝ、多少の管見を附加したものである。

一

フロイドはその『性説に關する三論文』(一)の第四、五版序文の中で、『斯學と生物學と接觸交涉する部分に就いては、本書中にその根本を述べておいたが、なほ熄むことなき反對を招』いたと云つてゐる。併し爾來この方面にも相當の進步を見、現に少兒科醫の方面ではフリイドユング Friedjung が硏究を續けてゐる。然るに一般の醫者仲間では、今なほこの明白な生物學的事實を認めざらむとする者が——その理由は分析的に判然してはゐるが——多い。殊に最も反對を受けるのは、人間の三歲乃至六歲の幼兒が、成人又は所謂變態者のそれと內容に於いて同樣な本能感情、願望並びに空想を有すると云ふ說に對してである。卽ち幼兒が『多形的倒錯(變態)(二)』であると云ふフロイド說に對してである。

併し精神分析を理解するにも、それを實地に應用するにしても、この生物學的事實を十分に認識してかゝらなければ駄目である。そこでレギ・ズール氏はまだ問題になつてゐない生物學的上の事實を指示して、精神分析の主張をば一層理解易きものたらしめようとしてゐる。幼兒に性感があるなど云ふことは、主觀には愉快な事ではないが、併し學問上からそれが眞實ならば已むを得ぬことで、やはり承認しなければならないのだが、まづそれを承認し得るやうに別の證明を與へなければならない。卽ち種々な動物の性發達史を比較しなければならないが、それに就いては生理や生物學の無數の分野に於いて十分な事實を捕へて來なければならない。

二

フロイド自身はその著書(殊に『講義』)の中で、人々の理解を助けるために屢々種族發達史的な考へ方を用ゐてゐる。人間の性感が幼兒時代に發達し、次いで潛在時代に入り思春期に至つて再開花する經過を、氷河時代が動植物界に與へた大變革に擬してゐる。人類の先行的生物は、化石などの證明する如く、既に遙か大古の第三紀時代に、形は不完全ながら存在してゐた。氷河時代又は沖積層の氷河時代(第一氷河時代は紀元前六十萬年又は五十五萬年とされてゐる)が萬物を一掃する大暴虐を振ひ、動物界には解剖的生理的の大變革を與へた以前には、既に理性を具へてゐた人類ではあつたがその性感は今日のやうに二期に發展せずに、今日の人々の考からすると非常に早期に發展したものであつた。その確證はやがてこれから與へるのであるが、性の成熟はざつと四、五歲頃に完成したものであつた。今日の人類に於いて性感が四、五歲に於いて「第一期開花」を見るのは、右の古代的な、種族發達史的の名殘りである(三)。右のやうに古代的なものが今日の人類に名殘として保たれてゐることは、他の方面に於いても知られてゐることであつて、今日の人類の機能を說明するに古代人の機能を參照することは當然でなければならない。

ところで、そのやうな古代人の機能を現代人が『短縮反覆』"Rekapitulation"すると云ふことの豫想(假定)はう

まく樹たないのだ。ましてや人間の子供の性的發展は、今日の文明社會に於いては、子供が生れた日からして制限と歪曲とを被らざるを得ないからだ。精神分析は人間の早期の性的開花が四、五歳の頃にあると主張するが、まだその本能が眼醒めかゝつたばかりのところで開花と云ふのは、どうも理屈が通りにくいやうである。何となれば、外部的の生殖器關も全體の有機體もまだ十分に發達してゐないのだから……。また性的部分本能も未だ十分に纒まつてゐないし、それを生理的な生殖目的に供することも出來ないのだから……。

三

そこで我々が今や組織的に調べて見たく思ふことは、フロイドの云ふやうに人間の幼兒期に性の『第一開花』があると云ふ說が、他の大きな哺乳動物との比較に依つて果して生理學的に支持出來るかどうかと云ふ事だ。それが理論的に可能と思へるかどうかと云ふ事だ。哺乳動物の發育から云つて、それほどの無暗な早期に性の眼覺めがあるものかどうかと云ふ事だ。

證明のための我々の質問はまづかうである。――種々の哺乳動物に就いて調べて見て、押しなべて見て果して何歳頃に性の眼覺めの徵象が見えるか。もつと判然と云ふならば、何歳位に、性の成熟が、生殖能力が、見られるか、と。それにはまづ各動物の年齡を各別に考へなければならない。さうして生活年數と性的成熟の年齡とを比較しなければならない。人間はまづ聖書に云ふ通り七十歳としておかう。比較的大きな哺乳動物の性成熟の年配と生活年數を確定するためにレギ・ズールの調べて見た動物の數は、さう澤山ではない。併し右に擧げた理論上の疑問を打破しようとの我々の目的のためには、十分である。

まづ我々は哺乳動物の性慾の發達を一般的に論じて見る。その材料には精神分析的先入見があるのぢやないかとの疑ひの懸る餘地のないところから採つて來よう。それはシュマルツの教科書『哺乳家畜動物の性生活』R. Schmaltz:

Das Geschlechtsleben der Haustiere, (3 Aufl. R. Schoetz, Berlin, 1921.) からである。この書に依ると、馬は普通その年齢が三十歳くらゐとなつてゐるが、時には四十又はそれ以上になることもあるのに、既に生後一年を經過すると雌雄ともに性的成熟に達する。まだ乳を呑んでゐる仔馬が勃起を持ち、そのために母馬が困ると云ふことは時々見受けられる。『またフォン・エッティンゲン von Oettingen は乳離れと同時に雌雄の同席は禁物であると强調してゐる。榮養のよい仔馬に於いては六ケ月もするともう未完成の性器を振ひ始めるのが普通だからであると。』『牛に於いては雌雄ともに、生後半年も經つとそろ〳〵性の成熟が見られる。早熟の雌動物に於いては六ケ月乃至九ケ月にして見られるのが屢々である。』或る種の豚に就いて云ふならば、七十日又は八十五日位で仔豚はもう他の仔豚の上に乘つて、性的素振を示す。一年も經つともう子供を作る能力を持つてゐるのが普通である。鹿も生後一年にして性活動は可能となるが、をとなの鹿が獨專權を振つてゐるので仔鹿は大人しくしてゐると、同じ著者は論じてゐる。

哺乳動物の性慾は、概して云ふと、雄の方が屢々非常に夙い。まだ精液の出來たと思はれぬ頃からである。何か性感的な中樞があると考へることに依つて容易に説明がつくやうな行動をなす。

四

次に諸動物の生年數と思春年齢とを表示(三)しておいたが、猿族は生年數も思春年齢も、その種類に依つて實に區々であるから、こゝには擧げないことにした。

	生年數	性的成熟年齢
人間	七〇	五歳
馬	三〇	一歳
驢馬(家畜)	四〇	二歳にて成熟驢馬
牛(家畜)	二〇——三〇	一歳半乃至二歳

豚（野生）………………	二〇――三〇	一歳半
豚（家畜）………………	一八以上	五、六ケ月
犬（家畜）………………	一五――二〇	九、一〇ケ月
河　馬………………	四〇	二歳、遲くも三歳
駱　駝………………	三五位	三歳位
山　羊………………	二〇位	七、九ケ月

たゞこゝに例外なのは象の性的成熟年齡である。象のは人間の思春期と、不思議なほど一致してゐる。卽ち馴れたのも野獸としても象の亭年數は八〇乃至一二〇であるが、雌は一七歲位、雄は二〇歲位である。もつと遲いと云ふ說もある。

それは別問題として、人間の性慾の最初の現れが二歲乃至五歲の間に見られるとフロイドが主張し、さうして種族發達史的に說明される說は、自然が今日多くの大きな哺乳動物に於いて性を成熟せしめ、生殖能力を與へてゐる年齡に徵して見て、正しいと云ふことになつて來る。

五

フロイドの發見は、精神分析とは獨立に、別の新らしい進化史的理論からして、驚くべき確證を受ける。それはオランダの解剖學者ボルク（L. Bolk: Das Problem der Menschwerdung. G. Fischer. Jena 1926）である。ボルクに依れば、『現今の人間の祖先たる原始人類に於いては、五歲にして性的に成熟した』（同書二四頁）と。さうして人間の性的成熟を今日の思春期年齡までに遲らせ、さうしてそれが今日の理性人の特質であると思はれるやうになつたのは、所謂『遲延作用』„Retardierungsvorgang" のためであると云ふ。その證據の一つは、人間に於いては『種』„Germa" と『體』„Soma" との發達に特別に甚だしい相違がある點に存すると云ふ。殊にこれは人間の女に於いて判然と認め

られる。『女の種（チエルマ）は少女が四歳乃至五歳になつた時に、もう實質的に出來上つてゐる。(四)』現に、カイベル、マル Kaibel u. Mall 共著に依れば、卵巣は三週間にして長さ一七ミリメートルとなり、幅五ミリメートルとなり、一年九ケ月にして二〇ミリメートルと七ミリメートルとなり、四年にして二七と十二となり、十四年にして寧ろ小さくなり、二六と一二となると。『このやうに』ボルクの云ふ通り『約五歳にしてそこに休止がある。機能がまだ始まらないからである。肉體の力がこの機能の結果たる姙娠にまだ〱堪えられないからである。この機能に堪えられるだけの力が有機體中に出來上るのを待たなければならない。……』と。

フロイドの幼兒性慾論及びそれに基く性的潜在期論が、右の論に於いて生物學的下部構造を發見することは、何人も否み得ざるところである。

六

最後にもう一つ殘つてゐる問題を片付けなければならぬ。象の思春期が遲くて人間のに近いのは何故かと云ふ事である。この事實は、人間の發達も全體の動物界のに一致するとのボルクの假定に矛盾するものである。ところがこの事實は却つて、フロイドの氷河時代的説明に對して、同時に新たな確證を與へるものである。

何となれば、象は現に今日の動物界に於いて、（ヘック L. Heck の云ふ通り）全然孤立の種類である。今日生存してゐる哺乳動物の中で、少しもそれと近親の種類を持たない動物を擧げようと思ふならば、それは人間ではなくて象である。象の血は他の如何なる動物の血とも試驗管の中で親和反應を示さない。』（ブレーム、五二六頁）象は古生物學的に見てこのやうに特異の動物であるが、これが今日の人類と同樣にその性的成熟が非常に遲れると云ふのは、共通の外的原因に基づくものと結論される。それは明かに兩者を共に自然が適應させようと試みてゐるもので、そのために象と人間とは蕃殖のための成熟を非常に遲らせることになつた。さうして同時に人間の性慾の二期開花性が生ずる

ことになつたのである。象にも氷河時代前からの隔世遺傳的な性感初期開花があるであらうとは考へられない。性慾以外の點ではともかく、性慾の點では（ヘックに依れば）象は獨立的な種類の動物で、氷河時代に滅亡したマンムートの直接的存續であると考へられない。――象と人間とのこの不思議な一致に就いては、自然科學の相當諸學科や古生物學的教養のある分析學者の助力を俟たなければならない。

要するに生物學の方からも『種』と『體』との發達上の矛盾から性的開花に二期ある結果となつてゐることが證明せられたわけになつたが、その生物學的事實と、フロイドの抑壓説に依る性的潜在の事實との關係はどうなるか、偶然の一致か、必然の相互關係があるか、あればどう云ふ機制に依る關係であるかと云ふことが問題となつて來る。

註（一）邦譯フロイド全集第五卷、『性慾論』

（二）フロイドは右の『性慾論』で『幼兒の性生活は大低は三四歳の頃に、觀察に堪へるやうな形となつて表現されるやうである』と云つてゐる。『多形的倒錯（變態）』に就いては、同書九四頁參照。

（三）フロイドは性感が性器に於いて統裁せられる以前の發達を、口唇、尿道、肛門の三段階に分けたが、その高弟アブラハムはこれを種族發達史的に非常に遙かな古代に遡つてそこにそれ等の原型を探ね、その原型の反覆として説明してゐる。フロイドも幼兒には自分等が鷄の如く腸管から生れて來たと云ふ空想（Kloakentheorie）を持つてゐることを論じてゐる。

（四）これに就いてフロイドの『性慾論』の七二頁を參照する必要がある。そこに於いてフロイドはバイエルの發見を紹介し、赤ん坊の內部性器（子宮）はそれより年上の幼兒の子宮よりも概して大きいと云ふことである』と云つてゐる。

A・フロイド孃の兒童分析理論

――,,Zur Theorie der Kinderanalyse," Anna Freud, (1927)――

伊東豐夫譯

皆さん！私どもはこれまで總會に於て、兒童分析に就いての講演は唯一つきり行はない例になつてゐたが、今度は同時に三つお聽きになる筈である。是れは、先年來國際學會の内部に於いて此の主題が如何に重大なものとなつて來たかを示す一つの指標に過ぎないのである。兒童分析が斯かる强度の興味をかち得たのは、三つの働きによると、私は考へてゐる。卽ち、第一に精神分析學は多年に亘つて成人に就いて研究したところから幼兒の精神生活を考へてゐたが、直接に幼兒分析をして見ると、誠に歡迎すべき裏書が得られたこと。第二に兒童分析は――クライン夫人の講演に依つても明かにされた如く――直接の觀察に由つて今まで分らなかつたことが分り、今までの考へ方に對する補說が與へられたこと。そして第三に、兒童分析は一つの應用の領域へと進むで行くものであること。その應用領域は、多くの人々が主張する如く、將來、精神分析學に取つて最も重要なもの、一つとなる筈である、卽ち教育と云ふ領域である。

このやうに兒童分析には三つの效能があるので、それに據つて成人分析とは全く違つたものとして獨立することになつた兒童分析には、別種の技法が必要である。此の要求は兒童分析として當然である。

對象が違へば扱ひの方法も違はなければならないと云ふ事は、最も保守的な者さへもが旣に承認した所である。かくて早期分析のための、メラニエ・クラインの遊戲法が起り、後には私が唱へてをります潛在期分析法が成立することになつたのである。所が、兒童分析者等の多くは――私もその一人だが――それだけに停まつて居ない。彼等は兒童分析の過程が、成人分析のそれと理論的に恒に全く一致するものであるか、又特に此の兩者が分析の目的と意圖に關する限り、完全に一致するものであるか否かを考へ始めたのである。兒童分析家は幼兒の特殊さに應じて、分析上の訓練や心組みの他に、之と並むで他の心組みをも持つべきだと、要求する。卽ち敎育的な心組みが必要だと云ふのである。吾々は此の言葉に驚いたり、二樣の心組みを此のやうに混合する事が、何か分析を冒瀆するものであるかの如く頭から決めてかゝらぬやうにしたいものである。此の要求が是認せらるべきか、否か、或はそんな要求は不法なものとして却下すべきが正當か、これは二三の場合に於て、試驗して見るだけの事はある。

例へば、私は此の目的の爲めの一實例として、十一歲の男兒の分析の一斷片を選ぶ。治療を受けに來た時の患者の性格は、女性的マゾヒスト型で、彼の母親に對する乳兒時代からの對象關係は、母親との同一化となつて完全に保存されてあつた。やがて、自然に男性的攻擊慾が彼に生じて來たが、それもたゞ時々姉妹に向つて憎らしい行爲をしたり、すねた態度をとつたりする位の事で、是れとてもあとでは却つて烈しい自責の念にかられたり、沈鬱狀態に陷つたりするのであつた。私は此處に患者の分析の一時期を取り上げる。此の期間中、彼の死の問題――と云ふよりは寧ろ殺害の問題――に就いていろ〳〵と考へたり、空想したり、夢見たりして居つた。

丁度其の頃、患者の母親の、親友の一婦人が重病であつたが、或る日危篤の電報が來た。患者は此の事を取り上げ

て、更に彼の空想の中にこれを編み込むだのである。彼は又電報で、『死んだ』と知らせて來たと空想する。母親は大層落膽する。其處へ又もや『蘇生す。死は誤報。』との電報が來る。母親はそれを喜ぶ。斯くして、彼は始めは必らず死の通知を、それに續いては蘇生を報ずる電文を、素早く續け樣に出すのである。全空想は一つの後報に依て結末を告げる。『總ては母親に向けて作された冗談に過ぎなかつたのだ。』と。空想の註釋は容易い。吾々は彼の相反感情併存（アムビヷレンツ）を見るのであつて、母親の愛してゐる人物を殺し度いのだけれども、實際は、彼には此の意圖を遂行出來ない事が此の空想から明瞭に割り出される。

その後間もなく、彼は私に次のやうな强迫行爲を物語つた。彼が便所へ行つて腰を下ろしたとすると、彼は壁の一方の側にある一つのボタンに手で三度觸れなくてはならない。が又、直ぐに他の側の壁にあるボタンにも同じやうに三度觸れなくてはならない。當初、私には此の行爲は理解出來ないやうに思はれたが、數日後、他の事柄に關して彼が物語つた空想に依つてその說明がついた。彼は神と云ふものを、天國の廣間の巨大な玉座に腰掛けてゐる老人だと云ふ風に想像して居る。老人の左右の壁上に、ボタン、或は發信器が取り付けてあつて、神が一方のボタンを押すと一人の人が死ぬ、他の側のボタンを押すと、子供が一人生れる。此の白日夢と强迫行爲を聯關させるだけで、是以上の註釋は無用であると私は思ふ。三と云ふ數字は、恐らく彼の兄弟姉妹の數で說明がつくであらう。

それから間も無く、母親と親交のある家族の一友人で、患者の遊仲間の父親に當る人が病氣になつた。患者は私の處へ治療に來て居つて、電話の鳴るのを聽き、次のやうに空想した。――知らせが來て、お母さんは病人の家へ行かなくてはならない。お母さんは出掛けて行き、病室へ這入り、病床へ近付いて、病人へ話掛けやうとする。所が返辭が無いので氣が付くと、病人は死んでゐる。お母さんは大層驚く。此の瞬間に、死んだ人の小さな息子が這入つて來る。お母さんは其の子を呼むで言ふ。「此處へいらつしやい。御覽、あんたのお父さんは亡くなられたのです。」と。

少年が寢台へ近付いて父親へ話掛ける。すると、父親は生きて、返辭をする。少年は患者の母親へ向つて言ふ。「何だと仰有るのです。お父さんは生きてゐますよ。」其處で又お母さんが話掛けると、返辭が無くて父親は死んでゐる。所で、少年が又這入つて來て話掛けると、父親は甦へるのである。

右の空想が若しこれほどにまで成程と思へなかつたり明瞭でも無かつたり、强迫行爲と空想の註釋がピツタリ符合しないやうならば、私はこれほど細かくこのお話をしなかつたであらう。御覽の通り、母親に對する關係では父親は死むで居り、息子との關係に於ける限りは、父親は生きて居るのである。若し是れ等の空想に於いて同一人への相反感情併存（アムビワレンツ）——殺したいとの願望と、其の反對に生存させておきたい。或は甦らせ度いとの願望——が、全く別々の二つの行爲に分裂してそれ等が互に打消し合ふのだとするならば、此の空想に依つて、如何に少年の心に二重の心組みがあるかと云ふことが明かになるのである。現に死んだり生きたりさせられてゐる人間は、一方に於いては單なる一人の男となつてをり、他方に於いては父親となつてゐるのだ。この二樣の心的態度は明かに、この男兒の發達の二つの段階に相當してゐるのだ。母親への愛情の競爭者としての父親に對する死の願望は、（以來抑壓されて居るが、母親への積極的對象愛の伴つてゐる）正常なエディポス段階から發してゐる。此處では彼の男性的攻擊慾が父親に向けられて居る。彼が妨害されぬ爲には、父親をなきものにしなくてはならぬ。併しながら今一つの心持、卽ち父親を生かしておきたい願望は、一方、純粹に父親を崇拜し、愛着する早期の心持——エディポス的憎惡の擡頭のためにも亂されない心持——に由來して居ると共に、他方正常なエディポス固着から發した母親との同一化に由來してゐる。この同一化がその患者の場合には最も大きな役割を演じてゐるのだ。父親から脅やかされる去勢の不安からして、少年は母親への愛を放棄し、女性的な心持へと追ひ込まれる。以來、彼は父親を同性愛の對象として支持するやうに努めなくてはならぬことになる。

更に進むで、少年が如何にして此の死の願望から却つて毎夜死を恐れるやうになつたかの過程を説明したり、此の死の恐怖からして潜在期に於ける複雑な神經症へと入り込む端緒を見出したりするのは如何にも誘惑的なことであるが、御存知の通りそれは此の場合、私のすべきことではない。私が此の少年の分析を此處に引用したのは、兒童分析が成人分析と違つたものでないとの私の考へを、皆さんに裏書して戴き度い爲であつた。

吾々は、彼の多少の男性的攻擊慾と、母親への對象愛とを、抑壓から(そして彼の現在女性的マゾヒスト型の性格や、母親との同一化による定着から)解放すべきである。此の場合、問題の葛籐は内的の葛籐である。

また最初、彼を抑壓の働きへと狩り立てたものが外界に於ける現實の父親に對する恐怖であつたにしても、尚、此の抑壓の働きを支へてゐるものは現在では内的の力である。父親は内化して、超自我が其の權力の代表者となつてゐる。そして超自我に對する不安は少年には去勢恐怖として感じられる。分析が抑壓されたエディポス傾向を意識化して進む一歩一歩に、去勢恐怖が出て來てその障害をする。唯、此の超自我を順次に經歴的に分析して崩壞して行く事に依つて、私の救治操作が進捗するのである。で、皆さんの見られるやうに、この場合分析者としての私の仕事も心組みも、此の操作のこの部分(超自我を崩さうとの仕事)に關する限りでは、純粋に分析的なやり方である。此處では教育的なやり方は這入つて居らぬ。

も一つ是れとは反對の例があるからお聽き願ひ度い。此の方は六歳の女兒の患者の分析であるが、これについては私は既に他の場所で、只今のとは別の目的から少しばかり發表した事がある。此處でも相變らず、エディポス・コムプレクスが問題になつて居り、殺害と云ふ事が或る役割を演じてゐる。分析して見た所では、少女は夙く情熱的に父親に戀して居て、よく有るやうに、弟妹の誕生に依つて失戀したのであつた。その失戀の痛手は極度に强かつた。少女はまだ到達してゐない性器段階を放棄して肛門段階のサディスムスへと完全に退行した。少女の敵意は生れたばか

りの同胞へ向けられた。少女は今では殆ど愛情を向けなくなつた父親を、少くとも取込みに依つて自分の内に保持しようと試みた。所が、男として自分を感じようとの彼女の苦心も、兄との競争で失敗した。少女は兄が此の事柄については、肉體的により優れて具つてゐるのに氣が付いたのである。其の結果として、母親へ劇しい敵意を向ける事になつた。少女から父親を奪つたが爲の母親への憎惡。少女を男性に生むでくれなかつたが爲の憎惡。そして最後に、少女は自分でその妹を產みたかつたのに母親が妹を產むだが爲の憎惡を向けた。所が、その時――少女が略四歲の時――いさゝか決定的な事が起つた。少女は此の調子でやつて行くと、生れて以來よく愛してくれた母親との好もしい關係を此の憎惡のために盡く失つてしまふだらうと云ふ事を、薄々感付いたのである。そして母親への愛と、生命より大切な母親からの愛とを救ふ爲に、少女は非常な努力を以て「良い子」にならうと試みた。少女は突然憎惡と、それと共に肛門的な、サディスティシな行爲や空想を內容とする性生活等一切から、キツパリ袂別して、それ等を彼女の人柄とは別個のもの、全く無關係なもの、何か「惡魔的」なものとしてそれ等に對抗したのである。殘されたものと云へば、そう多くはない。卽ち少女は拘束されてゐて、感情生活は思ふまゝに成らず、其の智性とエネルギイとは「惡魔」を强制的に抑壓して置く事に費されるのである。外界に對しては、甚だしく興味減退し、母親への半端な情愛だけが殘されてあつて、これが又少しの重荷にも耐へられぬ程の微弱さであつた。それ所ではない。エネルギイが莫大なことに消費される時には、「惡魔」からの分離は持續出來ないのである。惡魔は時々彼女を少時征服した。その時には彼女は是と云ふ動機もないのに、昔よく狐憑病と呼んだものゝやうな具合に、床の上に身を投げたり、叫んだりするやうな狀態になつた。或はまた、彼女は床に寢返りして、愉快にサディスティシな空想に耽るのである、兩親の家を屋根裏から穴倉まで步き廻り、手當り次第に家具や物を打ち碎いて、窓から投げ出したり、會ふ人には、出遭ひ頭に、頭を毆つたりする有樣を空想するのであつた。此の樣に、惡魔に征服された後には、又必らず不安や後悔が生

するのであつた。

所が、分離された惡德は更に、別の、尚危險な方法で彼女に迫つて來た。「惡魔」は糞便や汚物を好む。そして少女は次第に物事を淸潔にする事に特別な不安を感じ始めた。人の頭を打つ事は惡魔の好む仕事であつた。彼女は或る期間、朝になると、姉妹の寢臺へ忍んで行つて、皆が未だ生きてゐるかどうかを窺つた。惡魔は人間の總ての規定を倦く事なく踏みつけて樂むだ。所で、少女は夜になると、地震が恐ろしくなつた。それは、愛する神が地上の人間を罰するのに平常も用ひられる、最も效力ある方法は地震である事を、誰かに聽かされたからである。其處で彼女の毎日は分身した惡德の行爲に對する、代償、後悔、贖罪行爲で滿たされた。母親の愛を保持する爲に、おとなしくならう、善良にならうとの彼女の健氣な試みは慘めにも失敗したと云へやう。此の試みから生じて來たものは强迫神經症以外の何物でもなかつた。

併しながら、私が此の小兒神經症に皆さんの興味を喚起するのは、病氣の見事な出來具合だとか、此の幼兒期に對しては特別輪廓の明瞭な徵候の故ではない。私が是の小兒神經症を皆さんにお話したわけは、治療の操作の最中に私が或る特別な事情に出會つたゝめであつた。

先刻御話した十一歲の少年の場合には、皆さんも記憶してゐられるやうに、抑壓の原動力は父親からの去勢の恐怖であつた。私が分析中抵抗として感じたものも亦、當然此の去勢恐怖であつた。が、今度の場合は少しく違ふ。抑壓――と云ふよりは寧ろ少女の人格分裂――は、母の愛情を喪失しさうな不安のために生じたのである。吾々の想像に依ると、全生涯を通じて障害として働く程の不安だから、餘程强烈なものであつたに相違ない。然るに、分析中に於て此の不安は、抵抗としては殆ど取るに足りぬやうに受け取れた。私の少女患者は、相變らず私が同情ある態度で對して行つたので、それに動かされて、彼女の惡德の半面を其の儘、忠實に私の前に展開し始めた。それは別に不思議

な事ではあるまいと、皆さんに仰せられるであらう。それは勿論、成人の患者でも自分の徴候を後めたい氣持で全く隱蔽し、批難される心配のない安全な分析の雰圍氣に於いて始めて徴候を打ちまけたり、此の時になつて始めて眞相を傳へるものであることは私も承知してゐる。が、それは大抵は徴候の說明と云ふことだけに限られてゐる。同情ある態度を示されたり期待せられた批難が來なくても、決して徴候を變更する迄には到らないものだ。所が此處では正にその變更が起つたのである。私が同情ある態度を示してやり、私の側から批難をしない上に、更に兩親の家に於いて嚴格な規律を緩めたゝめに、分析の最中突然、不安が其の裏面に秘むだ願望に變じ、反動構成はその防衞されてゐる衝動へ、警戒は其の裏の殺意へと轉變する事になつた。併し此のやうな轉變のために兩親の愛情を喪失することの不安が劇しく爆發しさうなものだが、それが殆ど影を見せなかつた。此の方面の抵抗は他の何れの側から來るものよりも微弱であつた。それは宛かも少女が次のやうに言つてゐるやうであつた。――「先生はそれを惡いと思つてゐられないのですか、それならあたしだつてそんなに惡いとは思つてゐません。」と。そして此の自責が低減するに從つて、且つ分析の進むと共に、嘗て非常な努力を以て拒むで來た凡ゆる衝動を、漸次に再び體得した。卽ち父親に對する近親姦的な愛情、男性化の願望、同胞に向けた死の願望、彼女自身の小兒性慾の認知等であつて、唯一つ眞正面からの抵抗にあつて少期間挫折したものは、それ等の中で最惡性のものと自ら思へた、母親の死の直接的願望の認知であつた。

併しながら、吾々が普通、正常な超自我について見て來たものは、此のやうな態度ではなかつたのである。成人の神經症患者の場合には、超自我は常識では理解し難いもので、外部からの感化に對しては如何に頑强に反抗するものであるか、又吾々が分析に依つて幼兒時代からの經歷的に突崩し、超自我の命令や禁止が實は幼兒期に愛して居つた、重要な人物との同一化に外ならぬことを悟らしめるまでは、如何に患者の自責を低減せしめ得ないかを我々は學ぶの

である。

皆さん！吾々は此處で、成人分析と兒童分析との間の最も重要な、原則的な差違に直面したのだと私は考へる。成人分析の場合には、超自我は外界からの影響から既に獨立してしまつてゐるのである。此處で分析家の爲す事は、神經症的葛藤に參與してゐる（自我エス、超自我に屬する）凡ゆる衝動を意識化することにより同じ水準に迄高める以外にはない。意識の此の新な水準により、葛藤は別な形をとることになり、異る結末へと導かれる。兒童分析にあつては併しながら、相手の超自我は未だ確固たる獨立性を獲得して居らず、未だ明かに後見人、兩親、教師などのため仕事をしてゐるのであり、その自責とても之等の愛する人々との關係によつて動搖したり、自分自身の意見で變動したりするのだと云ふことを、吾々は計算の中に入れてゐなくてはならぬ。此の場合に於ても、エスや自我の既に抑壓された部分を無意識から解放する事を問題とする限りは、成人分析に於けると同樣、吾々は純粹に分析的に仕事をしてゐるのである。併しながら、幼兒の超自我に對する仕事は二重のものである。――超自我が既に獨立性を獲得してゐる限りは、內部から之を經歷的に突崩して行く分析的の仕事と、他方、教師の態度を變へさせて新たな印象を與へたり、外界から幼兒に課された要求を改變したりする外部からの教育的感化仕事である。

此處で吾々は再び、私の少女の患者へと立歸らう。その少女が若しまだ六歲位の小兒で無かつたとしたなら、その子の小兒神經症は恐らく他の多くの場合に於けるが如く、自然治癒に放置されたであらう。さうなれば、神經症の後繼として必らず峻嚴な超自我が生じ、それが自我に對して頑强な要求を提出し、後年になつて分析しようと思つてもなか／＼容易に克服し難い抵抗を示したことであらう。併しながら、私の考へによると、此の峻嚴な超自我は小兒神經症の入口にあるのでなく、出口に位置するものである。

私は以上述べて來た事柄を裏書する爲に、ウルフ博士 Dr. M. W. Wulff が丁度時を同くして國際雜誌 Internationale

Zeitschrift für Psychoanalyse, Band XIII Heft 3.（1927）に掲載した報告を、こゝに引用するものである。氏は其處に、一歳半の少女の恐怖症性の不安發作に就いて、報告してゐる。その子供の兩親は明かに、此の子に對して清潔にせよとの要求を餘りに早く押付けた。少女は此の要求に從ひ得ず、病的になり、何處か遠くに送られてしまひはせぬかと恐怖を持ち始めた。黄昏時、何か變つた物音がすると、例へば誰かが戸を叩いたりすると、恐怖は發作へと昂進した。少女は自分が善い兒かと繰り返して尋ねたり、どうか他處へなぞやつてしまはないでくれと、頼むだりするのであつた。當惑した兩親はウルフ博士に相談した。

此の早期の病的現象の最も興味ある點は、この少女の不安（それをウルフ博士はやはり愛情喪失に對する不安と記述してゐる）が、成人の神經症患者の良心の不安と寸分違はぬ點であると、私は思つてゐる。併しながら、此の場合に於て、良心、卽ち超自我が此の樣に早期に發達してゐると吾々は信ずべきであらうか？

ウルフ博士は、少女が清潔の要求には何等かの理由で未だ明かに耐へ得ない事を兩親に說明し、此の點に就いての教育は未だ少しく延期するやうにと注告した。兩親はよく諒解して、注告に從ひ、少女に向つて、譬へ粗相をしても叱責しないと云ひ聽かせたり、粗相をする度に優しく勞つてやるやうにしたのである。ウルフ博士の書いてゐるところでは、效果は覿面であつた。數日後、少女は落ち着き、恐怖を忘れた。

斯かる治療は勿論非常に稀であつて、極く幼少の兒童にのみ可能である。私は此の療法のみを可能的として推薦するものの如く、皆樣に考へて戴き度くない。併しウルフ博士は此處で療法上の實驗を試みたのである。不安の基礎となつてゐる葛藤に就いて結論を與へ得る唯一の試驗である。若し小兒が實際超自我の峻嚴な要求のために惱むでゐたものとすれば、兩親の保證も症候には些の影響をだに與へ得なかつたであらう。併しながら若し小兒の不安の原因が現實外界に存在する兩親——空想中の兩親の面影でなく——の不興に對する實際の恐怖であつたならば、病氣が治癒

したと云ふことは容易に首肯出來る。正に、ウルフ博士は其の原因を根絶した。
この他、幼兒の心理反應の多數は、同樣に此の早期の超自我の感受性に依つてのみ説明し得る。フェレンチィ博士の薦めに依つて、私は或る女教師がアメリカの近代的な學校の一つであるウォルデン・スクールに就いて書いたスケッチ文を讀むだ事がある。此の精神分析の素養ある女教師は、嚴格な環境にあつて神經症的になつた子供等が、未だ幼稚園の學齡期にあつてこの學校に入學し、恐ろしく自由な空氣の中に這入つて暫くそこに馴染んでゐる内に、やがて彼女がその神經症候(と云ふのは大部分は自瀆廢止に對する反動であるが)を喪失して行く有樣を描いてゐる。さう云ふ效果は成人の患者の場合には不可能である。それは吾々の知つてゐる通りである。成人患者は自身の目下の環境が自由になればなる程、衝動に對する不安は增加する。また不安に伴うて患者の神經症的防衛反應や症候等も愈々昂進する。もう超自我が出來てしまつては、超自我に依つて課せられる自責は、彼の環境の力では何とも仕方がないのである。之に反して幼兒は、彼の自責が低減し始めると共に、調子に乘つて更に最も自由な外界が許さうとする以上に自由を貪らうとするものである。從つて、此の點に於ても亦、外部からの感化は缺くべからざるものである。
さて最後に、今一つ無邪氣な例を引用する。少し以前の事、私は五歲の少年が母親と話すのを偶然聽いた事がある。少年は生きた馬を望むでゐたやうであつた。母親は惡氣なく此の少年の望みを打ち消した。すると、少年はそれに對して悄氣もせぜに答へた。「いゝよ。ぢやあ此の次の誕生日に買つてもらふから。」母親はその時にもやらないと明言した。「ぢやあ、降誕祭。降誕祭には何でももらへるんだから。」「いゝえ、降誕祭だつていけません」と母親は少年の望みを打ち消さうと試みた。少年は少時考へ込むだ。やがて彼は昂然として云つた。「それだつて構ひませんからね。僕は自分で買つてやるんだ。自分にならゝ僕は許してやれるよ。」
皆さん！　皆さんも御覽の通り、此の內的許可と外部から强制された禁止との間に、旣に葛藤が生じ、此の葛藤が

やがてありとあらゆるいろいろな出口を求めて勃發する。例へば、反抗と反社會性へ、神經症へと。幸ひにして健康へと向ふ場合も澤山あるが……。

さて、幼兒分析家の教育的心組みについて、倘一言申し上げる。吾々が幼兒神經症の治療に際して鬪はねばならない力が、幼兒の內部からばかりでなく、又一部は外部からも來ると知つたならば、吾々兒童分析者は幼兒の內的な心持を正しく把握することが出來ると云ふのは勿論、またその外的境遇が如何に大切であるかを理解してゐると主張すべきが當然である。併しながら、此の課題に關しては、幼兒分析家は、理論上及び實踐上の教育學的知識を必要とする。この知識あつてこそ、兒童分析者は、幼兒の現在蒙つてゐる教育上の影響を見通し、批判し、分析の期間中、――若しそれが必要だと分つた場合には――幼兒を教師の手から引取つて、分析家自ら處致する事が可能となるのである。(完)

戀愛に於ける救助願望の研究（三）

大槻憲二

一、恩返しとしての救助願望

筆者はかの有名な映畫劇『ヴァリエテ』を、やうやく近頃になつて見る機會を持つた。七月十四日蠶糸會館講堂に於いて、日本大學醫科學友會演劇部の催した或る集りに於いてゞある。主人公に扮したエミール・ヤニングスの出世作で、無聲映畫であるから、相當以前のものである。

一體『ヴァリエテ』"Variété" とはどう云ふ意味か。これはフランス語であるが、主人公の商賣であるところの、種々な出藝をとりまぜて變化あらしめ、面白く樂ませる『寄席』と云ふ意味であらうが、併しそこには人情と運命との種々雜多であり變化に富むことをも暗示してゐるのかも知れない。捨てられたる妻子が最後に主人公放免のための手紙を刑務所長に提出して、主人公が出獄の契機となつたところを見ると、人情の雜多であり變轉常なきに拘らず、夫婦親子の恩愛は恒常不變であることを對蹠的に强調した教訓劇とも見られないではない。併し教訓劇的要素はもしありとしてもほんの附加的で、その心理描寫の現實性と迫力とに於いて、立派な高級文藝作品としての品格と價値と

を備へてゐる。殊に只今の我々にまで興味のあるのは、その救助文學としての一面である。主人公ボス Boss ——一體これは固有名詞か、普通名詞か、普通名詞としては『監督』、『親方』、『支配人』と云つたやうな意味を持つてゐるが、この場合固有名詞として用ゐられてゐるのであらう。他に固有名詞が與へられてゐないから……。併しこの普通名詞を固有名詞として使用してゐるところに特種の意味を認めなければならないことは、丁度、女主人公ベルタ・マリー Bertha-Marie の場合と或る意味で似てゐる。

ボスはハムブルグ港町の寄席藝人として、輕業師として、一座の興業主として、一時は華々しく暮してゐたが、輕業演技中高所から墜落して大怪我をして以來、暫く休業してゐたが、或る時入港した汽船ベルタ・マリー號から上陸した藝人の小娘があつた。船中に實母を失ひ、全く孤兒となつて世話仕手がない。それを船員がボスのところへ連れて來て事情を話して頼んで行く。踊りや輕業も出來ると云ふので、ボスはまた元の仕事を始める氣になる。そこでこの小娘の名を人々は船の名に從つてベルタ・マリーと云ふのであるが、船と娘との同名は兩者の同一を意味してゐる。この娘が船と同一であるとすれば（屢々女性がさうであるとされる如く）、娘を窮地から、水中から救ふこと（生み出すこと）と同じである。丁度、白鳥の騎士ローエングリンが白鳥の曳く舟の中に眠つてゐて、そこから眼覺めて出て來たことは、水の中から生れて來たことの象徴的表現であるのと同巧である。（前にも一寸斷つておいたから繰返すまでもなからうが、現實に於いて常にかうだと云ふわけではない。人類の無意識空想が典型的に出て來る文學に於いては、常にこれが判然たる形で出るのだと云ふ意味に承知されたい。）日本の神社の祭に於いても船渡御なる儀式は常に出產の象徴となつてゐるのと同巧である。一體、何のためにベルタ・マリーが船から來た娘とする必要があつたのか。から考へて見ると作者の無意識の働きは、我々のやうに解するより外に途はない。

ベルタ・マリー Bertha-Marie ——この名をも少し研究して見なければならない。ベルタとは、古高ドイツ語のペル

ヒタ Percha から由來してゐて、現代ではドイツでもフランスでも人名として用ゐられてゐる。意味としては『輝かしい』である。ペルヒタと云ふのは、チウトン民族の民話中の大地母神の名であつて、ドイツ語の bergen（匿す）と同根語であると云ふ。大地母神として『匿す』は『孕む』の義であつて、丁度わが國語に於いて『袋』が物品の容具ばかりでなく、人間の容具としての（母）及び太陽の氣を受けて草木を生むものとしての『大地』の意味を有するのと丁度似てゐる。(一)

而も、ベルゲンには魂の死と云ふ意味があるのだから、愈々母神にしてまた死神なる大地の義に就いてのフロイドの説の正しさが首肯せられる。ペルヒタは大地の母神、豐饒の女神であつて、而も紡ぎや婦人の仕事一般に關係があると云ふのであるから、これはギリシヤ神話のモイラ女神と何等かの關係がある。(二) これを要するに、ベルタは女神の意味であるから、これとマリアと並置したベルタ・マリーと云ふ名はキリスト教的母神と、異教的母神との名を重ねた念の入つた『母』の義であることが分る。

註（一）雜誌『藝術殿』、大正七年十二月號所載拙稿『リヤ王と缺皿、餘論』參照。

（二）フロイド精神分析學全集第六卷『分析藝術論』二二二頁以下『筐擇みの動機』參照。

その他 bertha と同根語である英語のバース berth には『生む』“bear,”『出産』“birth”などの意味がある。また船中に於ける船員の室と云ふ意味もある。これは船が母である以上、船員は子であり、その子の宿る室は子宮を意味してゐる。

或る理解なき讀者は、私が誠に餘計な、衒學的な詮鑿をするやうに思はれるかも知れないが、我々外國人が外國人の無意識を研究する場合には、民族的無意識のよく遺され表はされてゐる言葉の傳統的意義を探るより外はない。

これを要するに、ベルタ・マリーはボスにとつて母である。彼は、母を水中から救ひ上げたのである。そこに戀愛

の生ずることは必然である。* 併しその戀愛はなほ無意識的であつた。ベルタ・マリーはボスをたゞ親方（父）として慕つてゐる。ボスはまた女弟子（娘）として可愛がつてゐる。子供の世話の仕方が下手だと云つてはボスはマリーを毆りつける。マリーは親方に叱られるのは一番つらいと云つては、親方に抱きついて可愛がつて貰はうとする。その無邪氣（？）な抱きつきの中に、その邪慳さうな叱咤の中に、既に單なる親方、女弟子の關係以上の感情の仄見えてゐることは、ヤニングスとリア・ドプティとの妙技に於いて完全に表現せられてゐた。私はその救助空想に於いて、この『ヴァリエテ』と殆ど同じやうな立場（シチユエーション）を取扱つた拙作一幕物『養父』が同夕に同時に上演されたのを見たのであつたが、その父娘抱擁の類似の一場面の描寫に於いて何と俳優の技術に相違のあることかと、私かに痛嘆したのであつた。（一方は世界的名優、一方は學生の素人藝、比較するのが抑々無理であるとは承知しつゝも……。）

註　こゝでも一つ考へておきたいことは、ボスに於いて母性としての救助願望があつたらしいことである。一體、ヤニングスと云ふ俳優は母性型の男をうまく演ずる人であるが……。ボスに於いてベルタ・マリーは娘であると共に息子でもあつた。靴下のつくろひなどしてやる時のボスの容子を見よ。女型の救助願望と男型のそれとの比較に就いては後節を參照ありたし。

やがてボスは糟糠の妻とまだ幼い子供とを棄てゝ女弟子と共に驅落ちをするが、やがて旅から旅を渡る內ベルタ・マリーは別の若い曲藝師アルティネリと戀に陷ることになる。ボスは怒つて相手の若い男を殺害し、直ちに警察に自首して出る。爾來十年の間、ボスは默々として刑に服してゐたが、妻子の放免依賴狀に依りて特に出獄を許されることになつたと云ふところで終りになつてゐる。

この作中で、恐らく最も憎まれ役はベルタ・マリーであらうが、我々は彼女を姦婦として憎むことが出來るであらうか。少女として彼女が親方ボスに父コムプレクスを轉嫁して、少女的（お半長兵衞門的）戀慕を寄せたことは善惡批判の前に、自然であることを承認しなければならない。それが漸次、年齡と共に少女心理を卒業して一人前の女となる

につれて母性的心理を有つやうになり、若き男を云はゞ子として愛するやうになる心理の變化もまた、善悪批判の前に自然でなければならない。而も他方にボスの少女に對する父親的愛情はそのまゝに存續してゐる。私は何人も憎み得ず、皆人を憐れに思ふてこの人生のヴァリエテを映畫の進展と共に泌々と味はゝねばならなかつた。

併しボスがアルティネリ殺害の契機はどうであらう。彼は妻子を捨てた罪の人だ。その罪の人に他人の罪を責める權利があるかと問ふことも當然出來る筈である。而も、觀客は彼の殺人動機に就いてそのやうな冷やかな批判を向けることの出來なかつたのは(私ばかりでなく多くの觀客が慥にさうであつたらしい)、原作者の手腕であらう。原作者はこゝに賭博を持ち出した。ボスは賭博に連勝した。戀に强いばかりでなく勝負運にも惠まれてゐると云ふので、彼に負けた人々は反感を持ち、これに對して卑怯な復讐をしようとする。マリーとアルティネリとの媾曳を瞥見した男(ボスに賭博で負けた一人)が、三人の立場を賭博場の白大理石の卓子の上に漫畫として落書きをする。マリーとアルティネリとが喋々喃々してゐる傍にボスが巨大な惡魔的な角を生やしてそれを睨んでゐる圖である。(西洋に於いても角が妬嫉の徵象となつてゐることを知つて私は興味を覺えた。)これを見てボスは激怒してその卓子をたゝき毀し、それでもその夕の演技は、怒りを抑へに抑へてともかくも無事に終了し、その夜遲く若い二人の歸るのを待ち受けて男に決鬪を申出て、これを殺す。作者は觀客の反感を主人公に寄せさせないやうに十分の注意と技巧とを拂つてゐる。觀客の公憤は卑怯なる賭博者に專ら向けられ、その同情は怒りを抑へて冷靜に職務を遂行した主人公に寄せられる。これ等は救助願望には關係はないが、文藝作者の讀者心理操縱の技法の研究として、興味がないでもない。

二、恩與へとしての救助願望

なほ私はまた近頃、泉鏡花原作、溝口健二監督、入江たか子主演の映畫劇『瀧の白糸』を見た。これは救助が戀愛

成立の契機となつた話ではないが、即ちフロイドの云ふ意味での救助空想の場合でないが、母性型の女の救助慾の悲劇として、こゝに並せ研究することに興味があると思つた。

瀧の白糸は北陸一帶を巡業する見世物師の中でも一際優れた水藝の太夫であつた。或る年の初夏、高岡から石動まで、白糸は乘合馬車に乘つたが、その馬車が他の乘物と無理に競爭しようとして車輪をこわした。白糸は一定の時間までに目的地まで行かねばならなかつたのに、車が動かなくては困つたと云つた。すると、馭者をしてゐた青年村越欣彌は白糸を車から下りさせ、彼女を横抱えに抱えて馬に鞭つて時間までに目的地に届けてやり、あまりに急いで走つたゝめに失神してゐた白糸の顔に水を吹かけて正氣に戻つたのを見届けて、馭者欣彌はそのまゝまた急いで車のところへ引返して行つた。この出來事は二人の間に温い心の繫りを作り、白糸にとつてはその時欣彌が置忘れて行つた法律の書物は唯一のなつかしい思ひ出となつた。

その後また白糸が金澤に巡業した節に、月明の一夜二人は卯辰橋畔でフト再會し、白糸は欣彌に學資を給して東都に遊學せしめる約束をすると共に、彼等の戀は成立つた。爾來、白糸には欣彌を立派に仕上げる（一人前に育て上げる）事が唯一の樂みとなり、數々の苦勞とも戰つてゐたが、一座の南京出刄打の女房お銀が親の病氣に金がなくて歸國が出來ないと云ふと（實は色男と驅落するのを欺かれたとは知らずに）欣彌に送るために工面した金も出してやると云ふ風であつた。また一座の若者新藏と出刄打の看板娘撫子との儚い戀を見ては、それを遂げさせてやるために座主からの依托金を無謀に出してやると云ふ風であつた。そのために座主の南京の恨みを買つたことも惱であつた。秋が來てもう水藝の時節でもないと云ふので、愈々白糸も困り、高利貸岩淵に血涙を呑んで身を任せ、やうやく得た金を深夜途中で待伏せしてゐた南京に奪はれ、これは南京と岩淵とが馴れ合つてした仕事に違ひないと睨み、南京が脅迫のために持つて來た出刄をつかんで岩淵の家に引返し、岩淵を殺してそこに有合せた金を掴んで東京なる欣彌の下

に出奔した。が、欣彌は既に學業を終へ、金澤の裁判所に檢事代理となつて勤務することになつたので、白糸は警察の網の目をくゞつて再び金澤に引返さうとして遂に捕はれて、獄裡の人となつた。欣彌は獄窓を訪ふて白糸を慰め、自分は御身を審く力はないから檢事の職を辭職しようと思ふと云ふ。白糸は、欣彌は卑怯である、妾は御身に審かれたいのだと云つて諾かぬので、欣彌はやむなく、一檢事として峻嚴な法文通りの論告をする。白糸は潔く欣彌の審きを聞いてその場に服毒して昏倒する。欣彌は恩人にして愛人なる人を冷やかに審いた自責の唸に堪え得ず、彼また自分をかの思ひ出深き卯辰橋畔に殺して罪を謝し、永遠の惱みを絕つ……と云ふ、誠に悲しくも美しい物語である。

原作の優秀もさることながら入江たか子（白糸）、岡田時彥（欣彌）兩優の熱演と妙技とに自分は近來にない感動を覺えて、映畫館内は明るくなり、觀客は立上つても自分は暫く腰を上げることが出來なかつたほどである。

この悲劇の最大動因は白糸の母性型の救助慾にある。彼は母として三人の子供を救ひ上げ（出產し）た。第一は欣彌であり、第二はお銀であり、第三は新藏である。彼女はせめて欣彌一人を生み育てるに滿足してをれば、かくまで大きな悲劇にならなかつたらう。併し、肉體的母性型の女が、自分の肉體の衰弱を顧みずに澤山の子を生んで、自分自分の生命を縮めることがあるやうに、白糸もまた精神的にあまりに澤山の子を生み過ぎて、その運命と生活を破綻させて了つた。

考へて見れば座主の南京とても可哀さうである。女房お銀が色男を拵えて出奔した時に、よしんばさうとは知らなかつたとは云へ、金を出してやつたのは白糸である。その存在が一座の死活に關する撫子を逃げさせたばかりか、僣かしかなくなつてゐる一座の全財產を惜しげもなく撫子新藏に渡して了つたのも白糸である。南京が白糸の身賓の金を橫奪した動機には、この金の返却の要求と、數々の恨みへの報復との意味がなかつたとは云へない。白糸はあまりに母性的慾求の强過ぎる女であつた。現實の狀勢を揣ることなしに、その慾望を滿たせることにはやり過ぎた。そこ

にこの悲劇の最も深い源因がある。併し、我々はこの無謀なる慾望に人生の詩を認めないであらうか。人間の美徳の源因を發見しないであらうか。

フロイドは『恩返し』としての救助願望を戀愛に認識したが、恩與へとしての救助願望に就いては、論及してゐない。男の救助願望は恩返へしとしての調を帶び、女のそれは恩與へとしての動機に出でるやうである。右の私の論考は、その點に於いて多少の新しい示唆を斯學界の人々に供するかも知れないと思ふ。

三、救助願望の逆用

私は右に一つの新しい型の救助空想を論じた。で、私は次にまた別の型の救助空想を論ずるであらう。浪花節として相當有名なお話『よ組の銀次』に於いて、その空想が表れてをる。

よ組と云ふのは江戸の消防夫の組で、日本銀次と云ふのがそのよ組の組頭であるらしい。その銀次が或る夜、本所津輕侯の部屋頭金太郎の屋敷で一杯呑んでほろ醉ひ加減で兩國橋の袂まで來ると、橋の上から兩手を合せて水中に飛込まうとしてゐる四十前後の女がある。銀次は抱きとめて事情を訊いて見ると『妾はしがない鐵五郎といふ者の女房お勝と申します。夫婦の間に子供が三人、夫鐵五郎が去年の半頃から中氣となつて、身體の自由がきかず、借金とりが山のやう、一層苦勞するよりも死んだ方がましと女心の淺ましさ、今の心になりました』と哀れな身の上話に銀次もつい貰ひ泣きし、金子六兩を惠んで我が家へ歸り、『あゝいゝ事をした、人助けをした』と喜んでゐた。それから四日目のこと、銀次の宅へ尋ねて來たのが兄弟分の行田の町五郎と鎌倉の龜吉の二人、銀次は喜び迎へて酒を出し四方山の話をしてゐる内に龜吉が、『この頃、江戸を荒してゐる河童のお勝といふものがある。懷工合のいゝ野郎と見ると身投げの狂言をやり、哀れつぽい身の上話をして金を捲き上げようとする。この間もよ組の絆纒を着た

威勢のいゝのがこの女を救ふた上、大枚の金を惠んだと云ふ噂。一體、こんなだましに引懸つたといふ馬鹿はどんな奴だらう。』と云つた。『おつと……一杯喰つたその馬鹿野郎はこの銀次さ』と、銀次はその晩から弟分の龜吉と二人で兩國橋から濱町河岸、柳橋かけて尋ね廻つてゐる中に、或る日の事、銀次は子分ののろまの宇佐吉に神田豐島町の仲間への貸をとりにやつたが中々歸つて來ない。皆が心配してゐると夜更になつて歸つて來、『可愛さうな身投女を助けて、金は全部呉れて了つた』と云ふ。『馬鹿野郎!』と親分銀次に一喝され、事情を聞いて口惜しさに直ぐに取つて返し、やうやく辨天裏で追付いたが、この甘い男と見てとつたお勝は、例の色仕掛で『貴方と千住あたりで暮しませう』と云はれて、またぐにやぐにやになつて了ひ、神田三河町の親分の家へ引返し、二十兩の金と親分の着物とを大風呂敷に包んでそつと裏口から持出す氣配。奥から見てゐた銀次、これには何か仔細があらうと、駕籠で宇佐吉の後を追ふ。

さうとは知らぬ宇佐吉は、辨天裏でお勝と落合つて相乘りの駕籠で千住方面へ走る。やがて小塚ツ原のあたりへさしかゝると怪しい男が出て宇佐吉の前に匕首を突付ける。『お前さん、こんなのは妾一人で片付けますよ』とお勝は宇佐吉を殺さうとする。そこへ横合から『ウヌ何を……』と銀次が出て來て鐵五郎お勝の二人を成敗する。……と云ふ筋である。

これは總ての人間が必ず有合せてゐる母コムプレクス、殊にその救助願望を逆用した場合で、奸婦毒婦と云はれるやうな女はみなこの手で男を籠絡するのである。若い讀者諸君よ、御用心、御用心!

四、救助願望と二重人格

お勝の場合ほど惡辣で意識的ではないまでも、大抵の女もやはり多少ともこの救助願望の逆用を戀愛の技巧として

半ば無意識的に用ふる場合がないとは云へない。例へば、江戸川亂歩氏の傑作『陰獸』の女主人公の場合が、それである。

一體この小説は探偵小説と云ふよりは變態心理小説と云ふべき作品であつて、戀愛が描かれてゐるが、戀愛文學と呼ぶ事は妥當ではない。併し女主人公小山田靜子が男主人公寒川（探偵小説作家）を誘惑するやり方には多分に救助願望の逆利用がある。彼女は自分のペン名であるところの平田一郎や大江春泥に自分自身が脅迫されてゐると云ふことを偽り告げて寒川の同情をひくことに依つて、彼の戀情を動かすのである。小山田靜子の夫、實業家小山田六郎氏變死の後、或る命日に靜子と會つた寒川は、大江春泥の恐ろしい脅迫の話をした後に、暗い庭に何か白い影が動くと云つておびえたやうに裝つて彼にしがみ付く。そこで彼は始めてその『モナ・リザの唇を盗む』のであつた。小山田靜子はもし奸婦でないとすれば（どうも奸婦とは思へない）、變態心理者である。作者はこの作品と女主人公とを勿體らしくするために、結論を曖昧にし、全體を神秘化してゐるが、實はこのやうな人間が現實にあるわけはないのである。この女ばかりでなくて全篇の各人は云はゞ、みな作者自身の影に過ぎない。試みに篇中の各人物の名を列擧して比較研究して見よう。

一、寒　　　川（作者となつてゐる人。）
二、小山田靜子（女主人公。）
三、小山田六郎（靜子の夫、實業家。作者と同じく頭髮薄し。）註
四、平　田　一　郎（自己脅迫者として假想した靜子の變名。）
五、大　江　春　泥（探偵作家としての靜子の雅名。）

註　個人的な事柄に觸れて甚だ失禮だが、學問の性質上、時に已むを得ない。作者の理解ある寛恕を切に乞ふ。

これ等五つの名前の内第二の女名を除いて何れにも『江戸川亂步』とその本名の『平井太郎』の何れか一字が這入つてをらぬものはないのである。殊に作者に緣の遠い實業家に、自分で恐らくあまり得意でないその身體的特徴を與へてゐるところにも特殊の意義がある。性を異にした場合にだけ共通の何れの字をも用ゐなかつたのは、何かの理由があるのであらうが、これは本人に訊くか、或は分析して見ると、意外に面白い結果が得られさうである。而も大江春泥（卽ち靜子）の作中には、現に江戸川氏の作として著名な『屋根裏の散步者』、『二錢銅貨』その他の作名を彷彿させる作名が平然と擧げられてゐるに徴しても、『見方に依つてはこの事件は春泥傑作集の如きものであつた』と明記してゐるに鑑みても、これ等の人物はみな作者自身の影であることを作者自身も意識して書いてゐるのであらう。殊に『一人二役』とか三役とか云ふ事が氏の作名ともなり、この作中の問題ともなつてゐるほどである……。この作の主題は作者自身の意圖に於いて何れにあるにもせよ、私自身にとつてはこの作は救助願望の逆用と、二重三重人格の文藝として興味があつた。後者の主題に關しては、何れ私はまた『二重人格の研究』の別題下に論究する機會があるであらうことを約束しておく。

なほ私はこゝで救助願望と二重人格とについて一寸附言しておきたい事がある。先頃朝日新聞の『豆戰艦子』は、某氏の婦人雜誌小說を評して、『通俗小說が、誘惑に抗して自ら處女性を守らうとする女を主人公とすること、丁度滑稽小說が愚鈍なる馬鹿正直者を主人公とするのと一般だ』と嘲笑してゐたが、通俗小說が萬人の普遍的コムプレクスに觸れなければならないものである以上、かゝる主題は誠に必然的であると思ふ。そこには豆戰艦子が全く思ひも寄らぬ大きな問題がひそんでゐる。これが誘惑に抗して處女性を守らうとする女性に對する萬人の救助願望に觸れることとは固よりであるが、かゝる主題にはまた自らそれとは別の契機が含まれてゐる。かゝる立場にある女性に對しては讀者は一方これを救助せむとの願望を起すと共に、他方に於いて誘惑者の側に同一化してその處女性を陷れることに

加虐性者的興奮を感ずるものに相違ない。文藝の作品は屢々その作者自身の二重人格的葛藤の所産であると共に、他方に於いてその讀者自身の二重人格的な興味と、矛盾の感激とを誘發するものである。その事は、やがてまた私が後節に於いて、別の材料に就いて詳論するであらう。（未完）

周防國大島沖浦村の救助傳説　（本誌第三號大槻氏救助願望論參考）

昔、この村の沖で、夜々燦然として、光りかゞやいて居たものがあるから、里人が不思議に思つて、海底にくゞつて見ると、この佛様がおはしたと言ふのである。早速引あげてこゝに祭つたのであるが、こゝの海を通る船は、この寺の沖で帆をおろして遙拜して行かないと、船が動かなくなると云ふ。尙又日見と云ふ地名も、夜々海の中から發する光が、日を見る如く明るかつたから日見と云ふやうになつたのだと傳へられる。併し日見なる地名はずゐ分古くからあつたものと見え、貞觀八年八月に比美神社從四位下を授けらると云ふ記事が三代實錄に見えてゐる。（「旅と傳說」九月號、宮本常一氏稿）

細（こまか）い葉蔭への慾望

森　茉莉

私は銀座を歩いてゐた。晝の町は白つぽい黄色の中に動いてゐた。風はなまぬるく、私の心持もなんとなく物憂かつた。××堂の喫茶部の前までくると、私はふと驚いたやうに立止つた。入口のわきのガラス戸の中に、まつ白な細な花がむらがつて映つてゐるのが眼に入つたからだ。黒い、冷たいガラスの板には、その黒いが透明なもやの中に、細い五つの花瓣のあるまつ白な花のむらがりと、所々にみえる白つぽい葉裏をみせて二つに折れた萩の幼葉のやうな弱い葉のむれとが、美しい何かの生物のやうに浮出てゐた。ガラスの窓に凍りついた雪模様のやうにあつちこつちに固り、またはなれて浮いてゐる白い花は、私の心持をひき締めて行つた。黒いガラスの中に一面に、一面に、むらがつてゐる白い、こまかい、消えるやうに弱いが何となく迫つてくる異様さを持つた花のむらがりには、どことなく或力があつて私を惹きつけ、そこにぢつと立止らせたのだ。ゆれてはゐないのにゆれ動いてゐるやうにみえる花は、少しぞつとさせるやうであつた。近寄れさうで、寄せつけぬやうであつた。それは水のやうに冷たかつた。霧雨のやうにこまかかつた。さうして海の中の生物のやうにゆるく動いてゐた。私はさうして居ながら遠い昔の樂しい記憶を、戀人を思ひ出してゐた。その私の戀人といふのは提灯の花といふ、丁度この花のやうに白い細かな花なのだ。

それは遠い昔のことであつた。私が五つ位の頃であつた。私はよく塀と、塀のきはに沿つて植つてゐた木々の行列との間を歩いた。家の塀は土塀で、昔の侍邸の塀の

やうに四角い窓があつて、上には瓦の屋根があつた。四角い窓には夏でも冬でも古びた簾が下つてゐた。素足に下駄を履いて塀と木との間の黒い、うす暗い、濕つたやうな土の上を歩いてゐると、外面に人の通る下駄音や、何かが靜に聞えてゐた。黒い土は少し柔かくてでこぼこしてゐて、塀のきはには黒い石や瓦の缺片等がまじつてゐた。少し歩いてゐると定つて提灯の花の木――それは植木屋から聞いたのか、母から聞いたのか、又は祖母からであつたか忘れてしまつたが、なんでも提灯の花といふのだと誰かが敎へてくれた。その木は黒く細く、西洋の槍や劍の先のやうな形の葉が澤山、扇のやうに集つてゐて、夏の初めになると、乳白色の可愛らしい釣鐘のやうな花が、七八つ宛集つて細い莖の先に乘つて咲いた。その提灯の木の張り出た枝が庭を歩いてゐる私の袂や顏に觸れた。私はこの木の、葉や花のこまかさが好きであつた。夕方なぞ私は木の下に立つて白い小さな花に見入つてゐた。私の頭の上にてうど短い雨のやうに、降りかゝるやうに、細い莖が下つてゐる。その莖の先に白い花がチラチラと搖れてゐる。もうあたりは薄暗くなつてゐるので葉や木の幹はよくは見えなくなつてゐた。その夕方の中にみえる澤山の花と莖との雨は、私の心を魅惑した。夕方の暗さがだんだん濃くなつて行くにつれて、白い花は一層白くなつた。私はその莖と花との雨の中に體ごと入つてしまひたいやうに思つた。私は出來るだけ木のそばに近寄つてみてゐた。母や女中等が緣側に出て來て私を見つけて『御飯ですよ』といつて私を呼んだり、表玄間に父の長靴の拍車の音がきこゑたりして、私は夢から醒めたやうにしてその木から離れた。

私の好きなものはもう一つあつた。それは蔦の葉であつた。私は、庭へ出ない時にはピアノの置いてある八疊の洋間へ行く事が多かつた。この洋室には疊が敷いてあり、綠色の模樣のある壁紙が張つてあつた。大きな窓が三つあつたが、その一つはピアノの後に閉ぢ込められたやうになつてゐて閉ざされてゐた。さうしてもう開く事も出來ないやうに西洋蔦がからみついてゐた。葉の澤山重なり合つたところは深く濃い綠色、薄い所や一枚の所は海草のやうに薄い綠色に透いてゐた。ところどころに强靱な、長い蟲のやうな莖が匍ひ、こびりついてゐて、その少し葉のある尖端が窓の中へも延びて來て、まだ行き足りなさうな一寸氣味の惡い格好をしてゐた。私は大

きなまつ黒く光つたピアノに摑まつて、覗くやうにしてはこの窓を見上げてゐた。私は大人になつてから巴里のお寺でステインドグラスの窓を見て美しいと思つた時、ふとそれよりも美しいこの窓の記憶を思ひ出したが、その時の私の思ひ出の眼に映つた蔦の窓は、神祕的に美しい窓であつた。私はこの蔦のこまかい葉を好いたが、どこか氣味惡さを同時に感じてゐた。だが、私は何故かこの窓にいつも見入り、その記憶が數知れず殘つてゐる。この蔦は父が植木屋にあつらへてこの西洋間の外側にからませたのだつた。小さな黒ずんだ葉であつた。葉脈は細く、網の目のやうになつてゐた。葉裏の裏白のやうに白つぽい、異樣なこの小さな葉の群は、もくもくと重なり盛り上つてこの洋間の外側を蔽ひ、それだけでは足りなくて、廊下のある二階と洋室との間の軒をつたひ屋根を匍つて、觀潮樓と呼ばれてゐた二階をなかばまで蔽つてゐた。莖は執念深い氣味惡さを持つてゐたが、葉は細くて美しく、硝子の中からみたその深い綠と海草の色と所々にちらちらと光るやうにみえる透明なガラス板の色との交錯は、素晴しく美しかつた。

私の心持は荒つぽく、こまかな所がない。大きな花瓣の花、海、こまかいそよぎでない大風、等が、いつも私に自分を連想させる。そこで私は却つて細なものを求める。私は小さな時からこまかなものが好きであつた。こまかいたくさんの葉が微かな風にゆれて、さやさやと鳴つてゐるのを見る時なぞ、私の心は或る憧れに向つてゐる。乾いた空氣に雨を求め、冷たい心が溫かさを慕ふやうに、私の心はこまかさを吸ひ込まうとするやうに思はれる。この私のこまかさへの慾望は五つの頃にもう萠芽を吹いてゐたのだ。

××堂のガラス戸の中に偶然、昔の戀人であるこのまつ白な花のむれを見出し、しばらくそこに佇んでゐた私は、少し心を動かされ、頭の中に昔の庭の白い花や、黑い綠色の蔦の葉の記憶を描きながら、又歩き出した。やがて××屋へ入つて行つた私はそこの棚の上にさつきのと同じ花があるのを見付けた。鉢の土に挿してある木札をみると、(金龍邊)とかいてある。支那の花なのかと思ひながら、私はその花をもう一度見直したが、この鉢植は小さく脊が低く花も少なくて、憧れの心を私に起させる力を持つてゐなかつた。歸る途で私は二三日内に必ず

もう一度あの花を見に來やうと考へたのだつたが、その次に私が××堂の前を通つた時にはそれ以來一週間以上も經つたのであらうか、もう白い美しい細い花は、ところどころ茶色を帶び、しほれ、數も少なくなつて、見る影もなくなつてゐた。

私のこまかさへのこの慾望。植物の花や葉にまで或感動を覺えるほどの、その慾望は遂には花や葉や雨を離れ成長し、人間に向つて注がれるやうになつて行く必然性をもつてゐた。この私の提灯の花への慾望は、一先づ最初に父に向つて轉化をした。意識してゐたのではなかつたが、それは表面の意識に上らなかつたといふだけの事だつたのだらう。父の膝に抱かれてゐる時、



幼兒マリさんと鷗外博士

(平福百穗氏筆・本間久雄氏藏)

私は葉巻の煙の中に包まれながら無意識の内に提灯の花の細さを思ひ浮べ、感じてゐたのだ。父の膝をおぼえてから、私の提灯の花の下に佇む事はだんだんになくなつて行つたのだ。私の三つの時に始まる父と暮した十四年間の年月といふものはちやうど、私にとつてはあの白い、提灯の花の雨の中で生きてゐたのと同じ事だつたのだ。父と私との生活は十四年で終つてしまつたのではなかつた。十四年の同じ家に生活してゐた期間がすぎると、それから十年に亙る、父に對する私の懷疑の生活が始まつた。さうして三四年前になつて父の性格と私に對する心持との關係が私の頭の中で明らかになり、晴れわたつた光の中に隅々までもそれが見えるやうになつ

たのだ。しかしその細い花のやうな、霧雨のやうなそよぎの中に包まれて暮した期間は、十四年の間であつたのだ。父と私との生活、それは十四年に亘つた。あらゆる思ひ出はその中に含まれてゐた。父と暮し始めてから十五年目の私の結婚は、父と私とを別々の家に離し、次の年の私の渡歐は、父と私とを地球の裏側と表側とに引離し、その船出から三月目の父の死は、父と私とを無と有との境に永久に別れさせた。形の距離は心の距離だ。その間に或期間、疑ひの雲さへかかつた。私が父と別の家に住む事に定まると同時に、私の上に注いでゐた愛情にぴたりと蓋をしてしまつた。私の上に瀧のやうに放射してゐた愛情を、水道のねぢをひねるやうに、ふいに止めてしまつた。その瞬間にこの疑ひの雲はかかつたのだ。消えかかる美しい文字のやうな、夕暗の逼る鏡の中に消えて行く美しい顔のやうなその思ひ出は、遂に薄れて行かなければならなかつた。結婚して間もなく私は夫に言つた。『私はパパとの生活を金のきれいな箱に入れて鍵をかけて心の中に持つてゐたいわ』と。黄金の箱に入れて置きたいやうな、私にとつて貴い、美しい思ひ出は、薄れて行つた。高い、灰色の香氣のある、汚れのないその思ひ出は薄絹に包まれ、遠くへ行き、かすかな薄藍色の影のやうになつた。霧のやうになつたその記憶はかすみ、ぼうつとしてゐて、唯、時々私の頭の中にうすい影を描くだけになつた。その影はうすくなつたが、私には忘れる事の出來ない美しい影なのだ。

私は暗い、狹い階段を上つてゐた。私はうれしさで一杯になつて上つて行つたのだ。私の眼の前に暗い中に、父の長靴の拍車が光り、鳴つてゐた。それは私の六つの時だつた。母につれられて陸軍省に父を訪ねて行つた時の事なのだ。その暗い階段と光る拍車の音とを思ひ浮べる時、ほのかなうれしさがはつきりと感じられるのだ。

私は父のそばに座つて、その讀んでゐる本を覗いてみてゐた。所々蟲の甞つたあとのやうに字のぬけてゐる黒い横文字の行列は異樣な模樣のやうにみえた。頁の端を父の白い親指がそつと押えてゐた。父の手は黄色をおびた乳白色であつた。切りこみすぎないまつ白な爪をつけたうす黄色い父の親指を私は忘れる事が出來ない。

父の膝の上に抱かれる事は私には果しない嬉しさであつた。父は平常言つてゐた。『香等の匂ひをつけたのも

いやだ。悪い匂ひは勿論わるい。清潔で無臭なのがいゝ』と。葉巻の匂ひと無臭に近いほのかな體臭とが私の心持を柔げるやうに思はれた。父の微笑の中に私は、無意識の底でゆれる白い花を感じてゐた。私が首に手をかけて抱きつくと、父はフンフンと笑つて輕く私の脊中をたゝくのであつた。夕方の薄闇の中に深々とした大きな、葉むれを翼の如く擴げた樫の木の下に立ち、その葉蔭に押つゝまれたやうな安心を、私は感じてゐた。この大きな樫の木は安らかな心持を與へて呉れるだけではなかつた。葉はこまかく、葉蔭には匂ひのいゝ花をさへつけてサラサラとゆれ動き、そのそよぎの中に私の小さな體を包み、搖籃のやうにゆすぶるのであつた。私は柔かな愛撫の中にゐる安けさを感じさうして限りなく幸福であつた。

　私は泣くとよく父のそばへ馳けて行つた。父は半分に裁つてある半紙を一枚取り出し、それを二つに折つて私の眼を押へた。さうしてからそれを明るい方へ透かしてみせて言つた。『おまり、ほら、大きなお團子、大きなお團子が二つ。』私の悲しみは急ちどこかへ行つてしまつてゐた。さうしてほのかなうれしさがどこからともなく湧いて來た。

　夏の夕方、隅の方は黒い庭の葉むれが岐阜提灯の光にぼんやりとみえてゐる時、父は低い聲で歌つてゐた。『イソルデよ、わがこひゞとよ。』それはワグネルのトリスタンとイソルデの中の一節であつたと思ふ。又こんな詩を口吟んでゐる事もあつた。『昔ツウレに王ありき』父の聲は今も私の耳の底にある。その節にも歌ふ聲にも或る味があつた。この歌を父の聲の通りに歌つてみる時、父の歐羅巴への憧れが、切ない悲しみとなつて私の胸に湧くのだ。たうたうもう一度歐羅巴の空氣を吸はずに父は死んだ。

　父との生活の思ひ出を、年月の雲を距てゝ想ひ起してみる時、それは泉の底の物音のやうに、鈍くはあるが、ありありと、私の眼の前に浮んで來る。さうしてその細な、微風のやうな愛撫の思ひ出は私に、暗い中にゆれてゐた白い提灯の花を、はつきりと想ひ出させる。それは一つのものゝやうに似通つてゐた。それは全く同じものゝやうに見えた。父の影と、提灯の花の影、それは私の心の鏡の面に象（かたち）を映す時、見分けのつかぬほどよく似通ひ、同じやうなそよぎとなつて、波の立つ川の面にゆれ

る月の光のやうにちらちらと揺れるのだ。先づ父に移つて行つた。だが讀者も認めるであらう通り、私の言つた、慾望の花から人間への轉化といふ言葉は完全に私の意味を表はさないやうだ。父と私との愛の生活。汚れのないその思ひ出。それは美しかつた。しかし細い葉蔭の、白いゆれる花の美しさ、優しさは、自然を離れ一人の人間との生活に轉化して、その美しさ妖しさは深さを增すものなのかも知れない。又私は人間として當然その轉化を待つてゐないとはいへない。だが、短い私の一生の終る日までそんな運命が私の所へ來るかどうか？　それを知る事は出來ない。それを識る事は、誰にも出來はしないのだ。

それは特別な人間でなくてはならない。世間から見て特別な人間でなくても私から見て、特殊の人間でなければならないのだ。まるで寂として人間のゐない、狹い小さな私の生活の輪の中に、その特殊な人間の現れるといふ事は、それは一つの奇蹟でしかないのだ。さうしてその奇蹟は、決して現れる事のない奇蹟なのだ。現れる事のない奇蹟、それを待つ事は愚であらう。恐らくその憧れは達せられないのであらう。私は死の床で、それの無かつた事を知るのかも知れない。又若し假にそれが得られたとしても、それが夜の光の中に妖しく光つたメーテルリンクの靑い鳥のやうに、晝の光の下ではたゞの白い鳥に變らないと、誰にいへるのだ。

幸福はやつて來ない。たつた一つの小さな幸福さへ、それは仲々やつては來ないのだ。生涯の間に一度も得られぬ人さへも多いそんな幸福が、再び私の上にめぐつて來るやうな事が、そんな事が有る筈はない。それは無い事だ。無い事だ。私はそれを感じてゐる。心の、體の、神經の、どこかで私は感じてゐるのだ。

（八、五、二八、記）

挿圖にした百穗氏の繪は、明治四十二年二月六日夜に、鷗外博士邸に歌會があつた時の場景で、マリさんは當時七歲であつた。歌人の仲間入りして何か連りに默つて描いてゐるところを百穗氏がスケチしたものである。何か書いては父博士に見せると『作歌に余念のない博士は一寸見てはホヽと笑ふ。マリちやんも嫣然とする。畫も描く、畫をかくと僕に見せてくれる。その可愛らしさは喩へようがなかつた。』と百穗氏は、當時國民新聞に書いてゐる。（記者）

時評

時言數題

大槻憲二

一、所謂不良外人問題

『ふるアメリカに袖は濡らさじ』と歌つて毛唐に身を委ねることを潔しとしなかつた女郎さへ明治初年頃にはあつたのに、近頃の女學生は外人の誘惑に對してあまり脆いのは、今なほ外國人に對する沒批判的な、不見識な崇拜觀念が强いからだと云ふやうな、國粹主義的な考へ方が、只今の教育者仲間の大體の（この問題に對する）見方であるやうだ。併し只今の女學生又は一般に若い女たちが外國人に興味を持ち、處女性を惜氣もなく提供する傾向のあるのが事實であるとしても、それを以て直ちに彼女等が外國人を崇拜してゐるからであるとするのは、いさゝか輕卒の斷定であるやうだ。現に歐米先進國の國民ならばともかく、まさか現今の日本の女性たちがフィリッピン人あたりまで崇拜してゐるとは、一寸考へられないではないか。さうしてそのフィリッピン人との間の問題が、近頃ではまた甚だしく再燃してゐるやうである。

　では、一體日本人は外國人が性的に好きかと云ふに、必ずしもさうではない。かの梅村蓉子の演じたところの『唐人お吉』の映畫に於いても、お吉がハリスからの申込みを聞いただけでもけがらはしいと云つて鹽などで清めた場面を人々はなほよく記憶してゐるであらう。日本人は（否、一體に何處の國民でも）異國人をそんなに好きなわけではないのである。而も他方に於いて、どうも所謂不良外人問題に於いては、惡いのは外國人ばかりではなく、日本の若い女性たちに於いても相當の責任があるやうである。日本の女性の方から、持掛ける場合が相當にあるやうである。その意味に於いて私は、フレデリク・グライルと云ふドイツの若い畫家が『私は日本娘の誘惑と如何に戰つてゐるか』との題下に『婦人公論』本年四月號に書いてゐる記事を、相當興味を持つて見、且

つ相當眞相を傳へてゐると信じてゐるのである。それに依ると、日本の娘たちが、隨分あつかましい遣方で、外國人に初穗を提供せんとするやうである。勿論全部的には信ぜられないが、或る程度までは信ぜられるのである。かういふ事實に對しては、我々はこれを憤慨したり悲觀したりする前に、この事實をも少し科學的に（只今の場合、心理學的に）調べて見ることが必要である。

一體、處女性なるものは人類の生活の歷史に於いて永い間一つのタブーであつたのだ。それは神聖なものであると共に、畏怖すべきものであつたのだ。處女のまゝで嫁することは、最も恥づべきことで、この結婚資格を與へる役目は君主、僧侶、父兄、又は外國人となつてをつた。この習慣は世界的であつて、日本にもこの習俗の存してゐたことは、又現に或る地方に存してゐることは、その方面の人々のよく知るところである。某々日本の名士が外國へ行つて初夜を提供せられて弱つたと云ふ逸話は有名なものとなつてゐる。

かう云ふ古代的な心理が今なほ現代人の心理に生き殘つてゐる事は、他のあらゆる方面に於いて實證せられる如く、確實なことであるらしい。フロイドの『處女性のタブー』（邦譯全集第九卷「分析戀愛論」六〇頁參照）を讀んで見ると、かう云ふ心理が現代人にもなほ生きてゐることが詩人の作に於いて指摘せられてゐる。ドイツの劇詩人アンツェングルーバーの喜劇に『毒見』と云ふのがあつて、それの主人公は單純な百姓の若者で、彼は自分の嫁になる女とは處女のまゝで結婚しては生命に拘ると云つて逡巡してゐる。一まづ他に嫁がせ出戾りにしてから安心して結婚してゐる。シュニッツレルの『ライゼンボク男爵の運命』と題する作もやはり同樣な主題を扱つてゐる。が、この方は女が自分の處女性を忌避する方で、一まづあまり好きでない男に『毒見』をさせておいてから、今度は、本當に好きな男と結婚するといふわけである。

私は、この古代的心理は現代の日本女性に於いても意外に澤山殘つてゐると、認めてゐるのである。これが外國人を相手とするばかりでなく、年長近親者などに對して屢々見られる。もう婚約の相手も定まつて結婚の日取を待つばかりと云ふ女が、忽に妙な失敗をする事の多いのは、かゝる古代的心理遺產のためであらうと思ふ。社會制度と習俗とは旣に變つて人々は處女性を一つの財產

と見なしてゐるのに、なほ古代心理遺産の方では、これをタブーと見なし、一度これを放棄してからでないと安心して結婚する氣にならぬと云ふわけになるらしいのである。かう考へると國辱だの、無貞操だのと憤慨も出來なくなるが、また別の問題が起きて來る。世の教育家たちに、かう云ふ方面からの再吟味をこの問題に就いて願ひたいのである。

二、放火少年問題

小學校放火犯人は十六歳の少年であつた。かゝる少年は精神薄弱兒童で、智能は遲れてゐるが、原始感情は割合に旺盛で、それを統御出來ないために原始感情をそのまゝに強く出すのだと、或る心理學者は說明を與へてゐた。成程、常識的に考へてもそれには相違なからうが、何故に放火的衝動は原始感情であるのかに就いてもう少し說明を加へてもらひたかつた。フロイドは、この火の神話に就いて再三研究を發表してゐるが、この度の少年の場合に於いて我々はまた、何故に彼が特に小學校を選んで放火したかに就いて、換言すれば原始感情の勃發が何故に特に小學校を對象として選んだかに就いて、研究をして見る必要はないか。その少年が小學校に對して如何なるコムプレクスを持つてゐるのかを分析して見たい願望と必要とを我々は感ずる。少年は自分の盜癖のために小學校長たる父が失職したことに對して學校にうらみがあると云つてゐるさうである。併しそれが學校の建物に何の關係があらう。父があまりに嚴格で、少年に過大の抑壓と禁制とを加へ、それが發して盜癖となり、盜癖は父の失職を齎し、失職は少年の放火となつたとすれば放火の遠因は父にあると云ふ事になる。舊い、非心理學的教育の改刪さるべき秋ではないか。

三、登山心理に就いて

都新聞七月廿四日、『讀者欄』に、『碧舟』と自稱する人が『征服とは何』と題して、かう云つてゐる。『……登山季節になると「何々山を征服した」とか「處女峰を征服した」とかいふ言葉が盛んに見える。その征服と云ふ文字が氣に入らない。……山は我々の敵ではない。否、寧ろ最も愛すべき敬すべき對象である。之に對して征服などゝ云ふ字は當らない。僕は常に山を愛し、山を敬し、山を慕ひ、あの慈父の如きふところに抱かれ

たいからである。

誠に御尤なお説であるが、この碧舟居士こそ、却つて最も征服したがつてゐる人であるかも知れない。『處女峰を征服』したなどゝ云ふのは、まだなまやさしいのである。昔はもつと露骨で『踏破』と云ふ言葉をさへ用ゐてゐた。碧舟居士以て如何となす。登山者の心理に於いてエディポス・コムプレクスの存することは今更喋々するまでもなく、私がこれまで口の酸くなるほど云つて來た事だ。碧舟氏も『山のふところに抱かれ』るためには是非とも征服したり踏破したりするより外はあるまい。氏はこれ等の言葉があまりにも氏自身の感情の急所に觸れるが故に忌避(抑壓)して御座るのである。たゞこの場合、碧舟氏が山を處女に喩へずに、『慈父』にたとへてゐるところに興味がある。『母のふところ』、『山ふところ』と云ふ言葉は用ふるが、『慈父のふところ』と云ふ言葉は珍しい。併しこの珍らしさは、筆者の雅號を見ると不思議でなくなる。筆者は自ら『碧舟』と號してゐる。そこに氏自身の女性的性格が露示してゐる。舟の名をとる人は必ず女性的な一面の強い人であると私は確信してゐる。勝海舟が江戸城を明渡したのも、不思議ではなくなつて來る。

四、知識階級者への警告

現下社會が混亂に陷り、人々その歸趨を知らず、宛も水に溺れむとするものゝ藁をも摑むが如く、何か希望あるらしき思想にすがつて右往左迷することは、神經過敏にして無力なる近代知識人として巳むを得ざる態度ではあらうが、それにしても終始その思想に殉ずるの勇に乏しく、忽ち右に左に寢返りを打ち、一度捕へられゝばたゞ免れむことをこれ偏に希ふが如き態度を示すことは、如何にも悲慘、如何にも輕薄。無力もとより巳むを得ないが、それなら始めから己の實力を揣つて柄にないことをしなければよいではないか。その空想的にして實踐力に乏しく、現實試驗の能力を缺如せること彼等の如きはかつて人類の思想史上に見受けられなかつた醜態ではなからうか。誤つてさへ改むるに憚れとは云はぬが、自己の思想は命を以て築き死を以て守れ。徒らに浮薄なるジャアナリズムに煽てられて、柄にもなき、信念もなき事を口にする(とより解釋出來ぬ)如き、輕薄なる態度をとるは、畢竟するにその人格の根柢に幼兒性の除かれな

いためであらうと思ふ。社會思想が、結局、幼兒性に根柢をおく場合多きことは、余が來月本誌上に細論するであらうが、今日はたゞ豫めこの點につき、世の所謂知識階級者の自省を求めるに止めておく。

五、東北帝大の『業報』を讀む

東北帝大醫學部精神病學教室業報としての「精神分析學論叢」第二卷第一、第二合併號（六月二十五日發行）には——

吉澤平作氏…交互性性格神經症と症狀神經症

同　氏…强迫神經症に見られたる魔術的身振について

同　氏…所謂神經衰弱症の精神分析

早坂長一郎氏…神經症的不安の精神分析的研究

山村道雄氏…赤面恐怖症に就いて

などの原著としての諸研究の外に、フロイドの飜譯（共に早坂氏稿）が載せられてゐる。何れも堅實な研究で、興味深く讀んだが、その讀後感を一二記しておかう。

古澤氏の第一論文は、性格神經症と症狀神經症とが交互に來る場合を研究したものであつて、ライヒと同樣の結論に到達したと云つてゐる。併し『神經症的性格はその內容に於いてのみならず、その種類に於いても、症狀と同樣に妥協に依つて構築されてゐる。換言すれば、それは同時の、又は種々の發達段階に屬してゐる幼兒期の本能要求とその防禦とより成立してゐる』と云ふライヒの言葉には本能要求と防禦との間の妥協が强調されてあるので、氏の解せられたやうに『性格神經症的反應基底が、後來起り來る神經症的軋轢及び症候的神經症の根底をなす』と云ふ點は、强調されてゐないのではないか。むしろそれはライヒの說（と氏の信ぜられるもの）を俟つまでもなく、精神神經症の原因を過去の精神生活の定着や外傷に索める斯學として自明の事ではないであらうか。たゞこゝで新に問題になるのはその交互性と云ふことである。併しこゝに對立せしめられた二つの概念が少し不明瞭である。現にこの二概念を表現するに氏は五、六對の用語を用ゐてゐる。これは學的論文に於いては可及的避くべきことであらうと思ふ。

古澤氏の研究せられた患者に就いての報告を讀んで、性格精神症から症狀神經症に轉變する契機が、判然力說してないやうに思はれたが、多分上位自我の强いこの患

者に於いて父の命令の附加のために抑壓が過重となつた事がその契機であつたと云ふのであつたらうか。なほこの患者に於いて防禦と云ふ機制は如何に働いたのであらうか。それも我々には知りたいことの一つである。

なほこの患者の性格上のさま〴〵な特徴——例へば、冬に夏の衣服を着、夏に冬の衣服を着たり、一事を一時に續けて出來なかつたり、馬鹿に時間を嚴守したり……に對する分析解釋はなか〳〵興味がある結論を示してゐるが、氏が結論に達せられるに到つた過程をも併せ呈示せられたならば、我々のみならず、斯學に反對する人々をも納得せしめるであらうと思ふが、過程を除くと、とかくこぢつけのやうに思はれる憾みがある。

ドイツ文は誠に美事な出來で敬服したが、日本文の方が却つて劣つてゐるやうに思つた。現に表題の『交互性性格神經症と症狀神經症』と云ふのは、ドイツ文の表題と同じ意味には一寸とりにくいやうである。

×

古澤氏の第二論文は、表題の如き內容のもので、氏の取扱つた患者は、幼少時から手淫癖があつた。十七歳の時、手淫後に小便に混濁のある事に氣付き、恐怖を感じ、手淫をしないと紙に書いて神に誓つてその行爲を廢止した。その後自己の身體にバクテリヤが侵入してそれが腦や鼻に行き重患になるのではないかと云ふ恐怖觀念が起つた。その後、口にバクテリヤが來ると云ふ恐怖觀念を打消すために「タカリ」と云ふ言葉を用ゐて見た。「タカリ」とは或る地方語で、「氣狂」とか「憑きもの」とか云ふ意味ださうで、患者は幼少時から何か惡い事をするとこの言葉で父親に叱られて來たものである。やがてその言葉の代りに、その言葉を吐く時の口つきをして口唇を一寸動かせばよいやうになつて來た。バクテリヤが口唇に襲來したと思ふと、少しコソバイやうな感じがする。その時、例の口唇運動をすると、それが一掃されると云ふわけである。この「タカリ」と云ふ言葉は叱責し批難する父の代償であると共に、父に對する批難をも意味してゐるのだと分析者は解釋する。即ち患者の自我は退行して、鬪病に咒文と魔術とを用ゐてゐる一場合であつて、これはフェレンチーが現實感發達の四段階として擧げてゐるもの丶第二段階（魔術的幻覺性萬能感階梯）に相當するものであると云ふ。これは患者のリビドー發達史上に於いて口唇に定着を來してゐるためであると云

つてゐるが、口唇定着の證據がも少し擧げてあると一層この論述は興味と價値とを增したであらうと思ふ。

×

早坂氏の「神經症的不安」の研究は、これが第三報であつて、從前の「業報」に於いて既に二つの報告が與へられてゐる。氏がこの特殊の問題を專攻的に深く研究して行かれる眞劍な態度に敬意を表する。氏は不安が身體的起源を有せず、心理的起源のものであることを明かにし、更にその心理的起源が何事に由來してゐるかを深く研究せむと試みてゐる。さうして去勢恐怖に基くか否かを深く突止めようと試みたが、その恐怖のコムプレクスは存在することは確實であるにしても、それが果して窮極の原因であるか否かに就いては、まだ斷言することが出來るほど確實な證據を擧げるに至つてゐないから、なほ他日の經驗を俟つことにしたいと云ふにある。私もこの問題に就いては只今のところ全く氏と同じ考へを持つてゐる。なほ今後の氏の研究に期待する。如何にも科學者らしい、愼重な、實證的な頭腦の所有者であることを賴母しく思つた。

たゞ、氏が取扱はれた不安症患者に於いて、『その性格のドン・ファン型が彼の母コムプレクスとの間に何等かの關聯がないものであらうか』と云つて疑問にしてゐられるのは如何なものであらうか。この兩者の關係に就いては、フロイドがその『戀愛生活の心理』の中で、相當說いてゐるし、私自身も多少の觀察の結果、疑ふ餘地がないやうに思ふ。

×

早坂氏が不安症を專攻的に研究してゐるやうに、山村道雄氏は赤面恐怖を研究してゐる。さきにフェルドマン說を研究せられたが、今度のは更に大規模な、組織的論究を公にせられた。まづ精神分析發生以前の、精神病諸學者の諸說を一通り歷史的に顧望し、次に精神分析學者としてはフロイドを始め、フリイドユング、フェレンチー、ステーケル、その他七人の諸說を紹介し、次に氏が自ら取扱つた患者に就いて細かい調査を報告してゐる。結論として氏は『赤面恐怖症は單なる轉換性「ヒステリー」現象としてのみは見ることが出來ず、著明なる强迫神經症的色彩をも具備してゐるものと考ふべきであつて、余は赤面恐怖症は轉換性ヒステリー症狀と强迫性症狀との中間に位する症狀と考へる』と云つてゐる。幷し

赤面恐怖症には精神軋轢としての妥協の機制が完全に起つてゐない證據に、不安が伴うてゐると云ふのであるから、こゝでも一つ恐怖症と不安症と強迫症との關係を、この患者の赤面癖を主題とし細かく論究せられたならばその論は一層親切になつたのではなかつたらうか。次回の業報に於いて、それへの『考按』が與へられるならば讀者は一層喜びとするであらう。

以上三家の眞劍な研究論文を拜見して、我々は非常に得るところ多かつたことを深く感謝すると共に、丸井教室諸賢の熱誠なる努力に對して滿腔の敬意を表するものである。妄言多謝！

六、名古屋醫大の夜驚症研究

『名古屋醫事新誌』第七卷第七號（昭和八年五月五日發行）には、名古屋醫科大學神經精神病學敎室（主任杉田直樹敎授）の醫學士堀要氏が『夜驚症の精神的發生機制に就いて』研究してゐる。

氏はまづ本症が『正常の睡眠から突然中斷せられて苦悶性内容を持つた一種の意識溷濁發作を起す疾病』であると定義し、次に東西古今の文獻に現れた夜驚症の說明を紹介し、進んで氏が近頃取扱つた患者に就いての診療過程を報告して最後に結論を與へてゐる。

患者は十一歲の少年で、夜中に眼醒めて暑いと云つて泣出し、傍に寢てゐる弟に黑いものが見えると云つて恐怖し、そんなことが每夜續いた。堀氏はこの患者を分析研究して見て、彼がその母親の傍に寢たいと強い願望を持つたる點に病因を發見し、『この少年に、年齡への自覺を訴へていぢらしい獨立心を起させる事が最も當を得た』方法と認めて、そのやうに處置したと云ふ。併し年齡への自覺に訴へると云ふ事は暗示法であつて分析法ではない。が、小兒に對して分析法を用ふることは最も注意をしなければならない。暗示法はまだしも無難だ。直接意識に訴へてそのコムプレクスを說明するなどゝ云ふことは絕對に避けねばならない。恐らく本誌本號に揭げられてゐるアンナ・フロイド女史（伊東氏譯）やメラニエ・クライン女史（下山善高氏稿）の小兒分析法は、その點に就いて多大の示唆を與へてゐることであらうと思ふ。また本誌前號に高水氏の紹介した『或る夢遊病男兒の分析と治療』（グラーバー博士著）もこの患者の場合には大いに參考になる

であらうと思はれる。なほフロイドの『トーテムとタブー』第四節第三節にも、「夜驚症」への言及が發見せられる。

堀氏が分析者として特殊の天分を具へてゐられることを私は確信する。今後愈々研究を進めて斯學のために萬丈の氣を吐かれむことを切に期待する。

七、動物恐怖症の原因

高島平三郎氏は兒童に於ける恐怖症がトーテミズムに因せずして、「第一印象」に基くと本號卷頭に於いて論じてゐられる。換言すれば、この恐怖症が個人の經驗に基き、種族の經驗に基くものに非ずと云ふ事である。併しこれは少しく樂觀的觀察ではないだらうか。何かの動物に極幼時に觸れてそれを恐怖するか愛好するかと云ふことの分岐は何に依つて決定せられるのであらうか。また個人の生後の經驗に基くもので、始めには恐れた事で後には恐れなくなつたと云ふ事もあり得る。本當の病的恐怖はそんなあつさりしたものではない。フロイドの云ふトーテム恐怖を單に「エロチスムスに基くエディプス・コムプレクス」と云ふ風に解するのも、如何かと思はれる。種族的經驗に基く集合無意識としてのトーテミズムと個人の外傷的經驗に基く單獨無意識との兩方面から、個々の場合について緻密な研究をして見るのが、正當なる方法であらうと私は信ずる。妄言多謝！ 動物恐怖症に就いてはまた、他日稿を改めて評論したいと思ふ。

古い雜誌を見てゐると、現在國文學の博士である五十嵐氏の『兒童の研究』（金尾文淵堂）と云ふ本の廣告が出てゐる。同氏にはまた獨逸文學に關する小著述もある。同氏は他人が多方面に活動することを好まれぬ人であるさうだが、御自分は相當多方面であつたことは皮肉な事だ。人間は生活に追はれて已むなく多方面の仕事をする事もあらうし、またその人の天分が必然的に多方面に働くことを要求する場合もある。例へば坪内博士のやうに……。フロイドの如きも若い内には無暗に何にでも興味を持つと人から批難がましく云はれたが、後年にはまた何でもかでも精神分析一點張りだと云はれたさうだ。併し何れもフロイド自身には必然の活動であつたに相違ない。今日でも彼はやはり多方面だ。我々は他人の才能の特質に對して理解を持つことが必要だと思ふ。五十嵐博士の『兒童の研究』（明治四十年以前版）はひよつとするとこの方面の我國最初の文獻であるかも知れない。

資料

クライン女史の兒童分析法

下山善高

ハンガリーの人にして、フェレンチー博士の高弟として、その優秀な、獨創的な兒童分析才能の故に大名を斯學界に走せてゐる、メラニエ・クライン Melanie Klein 女史の近著『兒童の精神分析』„Psychoanalyse des Kindes“ を是非研究して見たいと思つてゐたが、最近英譯がストレイチ氏の手に依つて完成したのを機會にグラヴー博士がその批評を『國際精神分析學雜誌』(第十四卷第一部) 上に掲げたから、それに大體準據しつゝ、同書をわが學界に紹介して見ようと思ふ。何れ詳くはまた、機會を改めてなされねばならない。

グラヴー博士 Dr. Ed. Glover は嘗て、精神病學の診斷並びに處置は、兒童分析の將來と密接に交渉するところがあると、大膽に豫言したことがあつたが、かうして女史の大著が公刊せられた今日、氏の豫言と批評とは我々にまで愈々興味ある問題となつて來るわけである。グラヴー氏に依れば、この書は二つの點に於いて、精神分析の將來のために重要なる意義を帶びてゐる。この書は兒童を直接的に觀察して幾多の獨自的な臨床的材料を呈示してゐるのみならず、また將來に於ける分析理論及び分析技術のために多大な影響を與へるであらう如き若干の結論を示してゐる。女史の見解は分析者仲間に、様々な程度の不贊成を喚起するであらうが(女史も勿論、その覺悟であらうが)、併しこの書物の出現のために種々な議論が出て、從つて分析傾向にも幾多の分岐と相違とが――これまでは標準理論の難かしい個所を深く詮鑿せずに解釋してゐたゝめに曖昧になつてゐた分岐と相違とが――表面に出て來るであらうことは、この書を一讀したゞけで感ぜられることである。さうして、この事たるや、精神分析學に對して少からぬ貢獻である。

クライン女史の幾多の貢獻をこゝで全て紹介し盡すことは出來ないが、併し苟も批評をする以上は多少とも重大な諸點を輪廓だけでも擧げておくことは固より必要である。幸にしてそれだけならば大した難事ではない。こ

の書の内容の大部分は時を異にして與へられた二つの講演を敷衍したものである。そのために說述に重複してゐる點はある。それにまたそれ等の講演以前に同じ題目に就いて女史が物した章も一、二(殊に第八、第九章)附加せられてゐる。これ等の章が女史の著述の眼目となつてゐる。第八章にはエディポス葛藤と超自我の構成の早期段階とに就いて論じてあるが、この章に就いては私は、フロイド自身の古典的論文の或るものと比肩し得べきほどの、高級にして價値ある斯學文獻であると云ふに躊躇しない。

これ等の章に現れてゐるところに他の諸章にも散見してゐるところを補足して、女史の說の一つを一言に盡して見ると、かうなる。――生後半年頃に小兒の口唇の淋しさ(乳離れ)がある、そこへ口唇的サディズムが加はるので、エディポス衝動が强くなつて來る。と、同時に超自我も發達して來る。乳離れの直接の結果として父のペニスを『含ま』う(自分の身内に取込まう incorporate)との願望が生じて來る。そこでこの衝動は母の肉體とその內容とを、さまざまな原始的な方途で破壞しようとする方に向けられる。女史の場合には、母の身體を破壞しようとの衝動は、男兒の去勢不安と同樣な危險な立場に、即ち女兒自身の肉體を破壞することの危險の立場に、身を置くことになる。然るに他方、不安は攻擊慾に由來するとなつてゐる。『取込み』の心理過程が兒童に起るや否や、その取込まれたる對象は、兒童の有機體中の破壞衝動に對する防禦の資となる。小兒は自分の破壞的衝動に依つて滅ぼされることを恐れ、その衝動を外的對象に投出し、かくて口唇加虐的方法に依つてその對象を滅さう(喰盡さう)とする。虐待を加へようとする程の對象だからその對象は『惡い』にきまつてゐる。で、その『惡い』對象が取込まれると、これが峻嚴な超自我としての働きを示すやうになる。このやうに始めは口唇的攻擊を以て防禦して來たことが、今度は尿道並びに肛門加虐的方面にも擴充されることになる。これ等總ての防禦のための攻擊がまづ最初に母の胸に向けられ、やがては母の他の(胸に相當する)部分に向けられるやうになる。これ等の最初の防禦は、早期の肛門加虐的時代の衰微するまで、弱ることなく持續してゐる。乳離れに依る口唇の淋しさに依つて幼兒は自分を袖にして兩親だけが互に性的快樂を肆にするのだと(勿論、幼兒らしい口唇的な感

覺として）知るのである。かくして呼醒まされたる口唇的羨望のために幼兒は、母の身體内に侵入することを願望するやうになり、また同時に物事を知りたがるやうになるのもそのためである。これ等の空想上の攻撃は、口唇に含んだる（取込んだる）父のペニスに特にさし向けられる。例へば男兒が母の身體を恐れるのはそこに父のペニスが含まれてゐるためである。卽ち、恐怖はペニスから身體に轉位せられる傾きがある。子供にとつて最も恐ろしいのは、母が父のペニスを持つてゐるのが、兩親の聯合軍として子供に考へられる場合である。

男兒に於いては、エディポス的葛藤は、母の體内に父のペニスのある事の憎惡、並びに母と性器に依つて結合したいとの慾望に依つて生ずる。女兒はその不安のために、母（肉體）から父（ペニス）へと轉向して行く。双方に於いて憎惡の衝動はエディポス的關係を產み、また超自我を構成せしめる。幼兒の最初の同一化は超自我と呼ばるべきだと云ふことは、明かに論ぜられてゐる。この超自我なるものが不安と攻擊慾とを克服するに與つて力があるが、併し勿論不安それ自身には、性帶域的興味が別方面に擴充して行くに就いて部分的に責任がある。小兒が取込んだ對象（本質的には器關としての對象である）は、非常に峻嚴であるので、そのために激しい不安を生ずる。實際、早期の肛門加虐時代に於いては、小兒は「その超自我を逐出さう」と試みてゐる。さうして超自我のみならずそのエスをも逐出さうとしてゐる。この時代の終るまでに、我々は精神症としての一切の定着を持つやうになる。取込みとその反對の投出とは相互的でこれ等の時期の間には自我の對象を扱ふことは、丁度超自我が自我を扱ひ、自我が超自我とエスとを取扱ふのと同様にである。このために對象に就いての空想の危險と現實の危險との間の混亂が生ずる。「現實的」の對象はこの不安の感を生ぜしめるに就いて多少は與つてゐるが、併し概してあまり大したことはない。兒童は本來對象を憎惡してゐるので、その上に超自我とエスとを憎惡してゐるので、愈々憎惡が强くなる。

これ等早期の不安と防禦とに變化の生ずるのは、リビドーのためである。リビドーの現實對象に對する關係に依つてゞある。最早期に母の胸から離れて父のペニスに向ふことも不安に原因するリビドーの歩みであるが、併し始めにはこの歩みはうまく行かない。女兒に於いては

これがエディポス・コムプレクスの生ずる遠因となる。男兒に於いては、もしこれが後に母への第三次的愛着に依つて克服されない限りは、父への深き同性愛的定着の因となる。リビドー發達上の時代（段階）と我々の呼ぶものは、リビドーが破壞本能と鬪爭して獲得し得た位置を、歴々と示してゐるのだ。それのみならず、外界にサディズムをさし向けて見た手應へに依つて、現實對象と密接な聯結を持つやうになる。これ等の素因は（丁度、破壞的な超自我を逐出したのと同じ過程に依つて）「よき」對象をもつと首尾よく取込む方法を立てるやうになる。このやうな新たな取込みのために、今度は、最早期の不安恐怖症が（投出的な、妄想に類する恐怖症が）變形せしめられる。後年の肛門時代に於いては（この時分には超自我は逐出されずに保留せられるから）、不安は罪惡感となり、强迫的な特徴が現れて來る。一旦逐出した對象をまた取込むと云ふことがこの時代の主要特徴であつて、また創造的に全能だと云ふ信念を持つてゐると云ふ特質もある。この信念は、破壞的（逐出すことの）全能の信念を打破するために必要である。かゝる强迫的徵候は、早期の自慰狀態への防禦である。これ等の病理的な防禦法以外に、もつと常態的な方法がある。それは遊戯をしたり、好奇心（知識慾）を働かせたり、することで、これに依つて外界に對する恐怖が弱められるのである。今や超自我と現實對象とを近接せしめ、現實に合つた自我理想組織を構成しようとの試みがなされる。超自我及びリビドーの發達は、潜在期の開始と共に停止する。一般的に云ふと、男女兒の超自我構成上の相違は、攻擊慾及びリビドーの發達の歴史に於ける相違と關係してゐる。女兒のエディポス期は、母の體內にあると信ぜられてゐる父のペニスを口唇に於いて慾望する時に始まる。そこで彼女はその全能感に依つて、父のペニスを自ら取込んだと信ずるやうになる。このやうに取込み傾向が强められるので、女兒は一層强い超自我を持つやうになる。この取込まれたる「惡き」ペニスの扱方が異なるために、女には型の相違が見られるやうになる。女兒の超自我はまた、逐出されたものに加虐的な全能があるとの考への爲にも影響されてゐる。また現實のペニスを持たないために、女兒はその肉體の內部に關して一層の不安定感を持つ。一般的に云ふと、女兒の超自我は男兒のそれよりも一層擴大的である。それは女兒の本能が受働

的な性質を持つてゐるからである。男兒の第一期の全能感は、父のペニスを取込んだためと云ふよりは、現實にペニスを持つてゐることに一層關係がある。取込みは女兒の方が男兒よりも餘計にする。女兒の方がより多く對象を必要とする。さうして超自我はより高いまゝになつてゐる。男兒は本來、母體中の父のペニスに關係して、そのペニスを破壞しようとする方に力を集注する。如何なる場合にも母の身體を攻擊する段階は女兒の場合ほど永く續かない。ペニスは虐待力に於いて全能なものであると信じて、そのために母に對して男性器的慾望を持つやうになる。このペニス憎惡が實際に父のペニスに轉位せられるやうにとなると、典型的な去勢不安が生じて來るのだ。

以上の論述は甚だ不十分ではあるが、併し精神分析の二三の根本思想に動搖を與へる程のものであることは明かだ。卽ち、(一)エディポス・コムプレクスの開始時期。(二)超自我の始源時期。(三)取込み、投出、及び防禦的攻擊の第一期抑壓に對する關係、並びに攻擊慾とリビドー的衝動とが、將に發達の時期に對して如何なる相互關係を持つかと云ふことなど。以上は主要なものであるがなほその他に二三の臨床上の問題も生ずる。例へば、精神症及び神經症の發展順序、又は男女の心的機構の心理學的相違などである。なほ、技法上の極めて實際的な二三の問題も生ずる。例へば、成人の患者に對しても極めて早期の深い解釋をなすことが好ましいと云ふが如き・・・。最後に、もつと抽象的ではあるが、併しそれでもやはり重要であるところの、問題が生ずる。卽ち、心的「防禦」に關する現存の超心理學的見解を訂正すべきかどうかと云ふ問題が生ずる。

×

エディポス問題に就いての限りでは、クライン女史の觀察が不正確であると云ふ理由はない。女史は非常に早期にこのコムプレクスが始まると主張するが、女史のみならず他の分析者とても、生後六ケ月乃至十八ケ月にして判然とエディポス反應を示すものがあると主張する人々がある。また三歲乃至三歲半の小兒にして既に潜在期に入るものもある。併し勿論なほかく批評する餘地は存してゐる、卽ち、女史とても實際に早期幼兒を分析觀察したのはあまり數多くはないのであるから、さうして三四歲にもなればもうその心理の型に於いて成人のやうに

なつてゐるのであるから、これだけで女史が一般的斷定を下すことは早計であるかも知れない。少くとも女史は退行を定着だと誤認してゐるかも知れないのである。併しさりとて統計をとつて見たりしたところで、女史の觀察の內の正しいものゝ重要さを減少させることは出來ない。そこでフロイドは最近に、かゝる混亂を避けようとして、性器前期に於ける幼兒對兩親關係をエディポスと呼ぶことは差支へがないと云つたが、併しそれではクライン女史は滿足しないのであらう。女史は（母體內の）父のペニスに關する空想は乳離れの直後に來ると述べてゐる。從つて生後一年のエディポス關係が眞の性器的エディポス關係であると述べてゐる。性器帶域は生れた時から既に多少の機能を示してゐるのであるから、第一期の空想に於いて性器帶域が心的代表となることは、理論上では問題になる餘地がない。この事柄は仔細に調査すべき價値は明かにあるが、併し只今のところでは、エディポス關係の深さをこれまで甚だ輕く見てゐたと云つておくのが安全であらう。併しその代りにリビドー發達の段階に對する名稱がこれまでと違つて來なければならないことにもならう。女史の說を正しいと假定すれば、所謂口唇時代は更らに小分けして、早期の口唇吸收時代と後期の嚙付きの時代とに二分しなければならない。後期の口唇時代に性器に嚙付きこれを取込まうとの要素を排除出來ないとすれば、早期の口唇時代からもそれを排除出來ないわけであらう。この點に於いて女史はアブラハムの考へ方（アムビヴレント以前の早期口唇時代があるとの考へ方）にあまり從ひ過ぎてゐるかも知れない。既に生後最初の六ケ月（吸收時代）に於いて兒童が口唇その他諸形式のサディズムを處理するために多くの轉位作用（例へば尿道性器的興味の强調）を用ゐなかつたと考へるべき何等の理由もない。それのみならず、最早期諸段階に於いて他の性帶域や排泄帶域からの影響が攻擊的衝動に參加してゐないとは云へないのである。種々の型の早發性痴呆を分析した經驗に依ると、口唇の重要さは相對的で、もつと細かく小分けすることが出來るとグラヴー氏は云つてゐる。

×

次に診療上の問題に就いて一言しておく。幼兒が心理的に危險を感ずる場合と云ふのは、例へば、母が居なくなること、去勢不安、超自我に愛想をつかされることな

であるとこれまでされて來たが、併し女史の臨床的觀察の結果はこれと一致しないと云つてゐる。これは注意すべきである。女史の信ずるところでは、最初期の恐怖症は本質的に妄想に類した型をとり、强迫的な症狀を伴ふものであると。これは臨床家にして始めて斷言し得ることだが、併し臨床家は幼兒神經症その他の症候に就いて十分に知悉してゐなくてはならない。グラヴー博士は自分の經驗が、女史のこの見解と全然一致すると云つてゐる。それのみならず、幼兒の「精神症的」不安とヒステリー的恐怖との中間に位すべきものとして、强迫的恐怖(超自我の恐怖としての)を想定すると、精神症と神經症との分類が非常に簡單になる、とグラヴー氏は云ふ。女史の今一つの見解とも全然一致するとグ氏は云ふ。卽ち、リビドー發達の諸段階に於いてこれを適當に延びさせることに依つて早期の不安狀態が遞減すると云ふのである。勿論、これは獨創的な發見ではない。またこれと聯關して居ると見解――サディズム(寧ろ破壞衝動、支配本能)は心的葛藤の根元であるとの見解――も新らしい考へ方ではない。フロイドは勿論、ジョーンズもアーブラハムも、アムビヴレンツと云ふ根本思想を最も廣い意味で用ゐてゐる。併しクライン女史は幼兒の最早期に於いてこのアムビヴレンツが如何に廣く行亙つてゐるかを、直觀的に把握したその功績は慥である。また女史は自分の觀察が既定の理論と撞着するやうに思へることがあれば、仔細に檢覈したり、新たな假說を樹てたりすることに勇敢であつた。成程、サディズムの說は分析者仲間に廣く受容されてゐたやうに見えたが、併しいざ實際適用の段取となると、やはり舊いリビドーに因る病源觀が勢力を失つてゐなかつた。併しさう云つてもリビドーそのものがとかく病氣になり易い性質のものであることを無視してはならない。精神分析に於いては、他の大抵の學問とても實はさうだが、常に何か新らしい標語に引摺られ易い。時としてはそれは「ナルチスムス」であつたり、時としては「不安」であつたり、時としては、「精神病的抵抗」であつたりする。で、「サディズム」と云ふ語も多少ともさう云つた不自然な價値を持つやうになる可能性がある。

これは技法上の問題に關係を持つことは明かだ。多少の不安や乳離れ的心元なさは却つて有用な機能を果し、發達を促し現實により密接に適應するやうになるが、あ

まり不安が大きいと殆ど越え難い程な防禦の提防（例へば早發性痴呆的な反應の如き）を造るやうになると云ふことを女史は明かにしてゐる。女史は極端な不安患者の實際分析に於いてはそのサディスティックな空想を直接的に分析解釋してやる。この方法は勿論、成人分析に强い抵抗の起きる場合（所謂早期陰性轉嫁）には常に用ゐられて來たが、併しその規定の如きものは明白には述べられてゐなかつた。女史は自分の方法が成人分析に於いて一層廣く用ゐられることを望んでゐるやうである。それを試驗し得るのは、勿論、精神症患者の場合である。この問題に關しては隨分意見の相違を見るであらうが、要點を早く試驗して見ればそれだけ一般技法のためにはよい事になる。要するにこの問題はたゞ實驗的觀察だけに信憑すべきでなく、リビドー衝動の重要さを愼重に再吟味してからにしなければならない。もしリビドー衝動が重要なのは主として原始サディズムの不安に對する確保の源泉としてゞあるとするならば、「深きサディズム」と云ふ考へ方が勝つことになる。併し深き不安を最も都合のいゝ點から解釋しようとしても、それは必ずしも常に成立史的に見て深くはないのだから、「深きサディズム」的見方もその點で多少變更されねばならない。

兒童分析の專門家は今一つの技法上の問題に一層興味を牽かれることであらう。卽ち、兒童分析はクライン女史の指示した方向をとつて進むべきか、或は、子供は自我も理想我も共に薄弱なのだから、轉嫁を利用する療法を混用する必要はないかどうか。クライン女史は、兒童分析に於いても成人分析に於けると同じ原則に從はねばならないとし、その理由を相當多く擧げてある。併し女史はこの問題を深く追究しないで、たゞその觀察したことをそのまゝ放り出してゐるだけである。併し結果は何れ何とか片がつくことで、只今實驗中のことをかれこれ論議する必要もない。併しこゝで一寸注意しておく必要のある點をあげるならば、治療上の種々の結果を比較したゞけで、唯一の妥當な標準が得られるかどうかと云ふことである。幼兒的退行の甚だしい患者でも、これに環境的影響を注意深く加へて行くと、著しい進渉を示す場合も慥に存在するのだ。（本誌所載アンナ・フロイドの論參照）併しさう云ふ兒童の社會的及び個人的反應を仔細に調べ、また同時に、潜在してゐる恐怖を調べて見るならば、愈々クライン女史の研究の結果を勇氣づけることに

なるだらうと思はれる。別に、結論を急ぐ必要はないのだ。

女史の兒童分析法に就いてはもつと大きくふかく研究して見なければならない。右の論は私の理解も不十分でよく徹底しなかつたかも知れないが、あまり長くなるからこれだけにしておく。（完）

兒童心理の種々相

高水力太郎

一、出産時の記憶

我々の出産時の經驗が心的外傷となつてその後の恐怖の原型となると云ふのがオットー・ランクの出産外傷説であるが、我々の出産時の記憶は、なか〳〵普通の方法では呼醒まされるものではない。それは夢か妄想となつて無意識裡に想起せられる事が、時としてあるであらう。併し勿論それは形をとつた事實としてゞはなく一つの感情としてゞあらう。詩人はそれを屢々比較的明瞭な形で表現することが出來る。吉江喬松氏の『散文詩集』中に收められてゐる『母屍體のにほひ』と題する詩篇の如きがその一例であらう。

『彼の嗅覺にはいつも母親の屍體のにほひが潜在してゐた。彼はそれを危險が身に迫つて來る時にも感じた。地震の最中、屋根瓦のがら〳〵落ちるなかをかけ拔ける時にも強く感じた。けれどそれをまた新婚の夜の新妻の身體にも感じた。南國の野の眞晝時、……地氣の立ちのぼるなかにそのにほひの漂ふのを覺えた。』

『むせるほどではないが、一種の酸味を帶んだ、迫つて來るやうな、またその中に引込まずにはおかないやうなにほひ。……』

であると云ふ。これはもし私の分析解釋にして誤たないならば、實は出産時の無意識的記憶である。胎內生活の樂い記憶の名殘と出産（失樂園）の恐怖と、その時の血なまぐさい空氣とが定着的の記憶となつてをり、『母屍體のにほひ』（並びにその不安恐怖）や、或は恐らく作者自身の子女の出産時のにほひ（並びにその不安恐怖）

が、フロイドの所謂『隱蔽記憶』となつてその上に結び付いてゐるであらう。結び付き錯綜してこれ等が一つとなつてゐるが故に、一度大きな恐怖（地震）、大きな歡喜（新婚）、その他とにかく意識生活が比較的鈍つて、無意識生活がその隙に乘じて擡頭する時（南國の野でウトウトしてゐる時や、寺院の廣間で靜坐してゐる時の如き）などに現れて來るのである。詩人自身の表現を引用すれば、『歡喜の抱擁にも危險の極致にも、靜止の至境にも現れ』るのである。

詩人はまたその『にほひは無數の小さな手だ。いやむしろ無限無數の小人かも知れぬ』と云つてゐる。これはこの『にほひ』が小兒、手の上に乘るほどの小人（自分自身ならびに子女）の出產と無意識に於いて結びつき、錯綜し、復合してゐることを證明してゐる。とにかく詩人は、この『にほひに接するごとに、靜寂な緊張を、最もすなほに充實した自然さを覺えた、彼の刻々の生活はむしろそのにほひを求めてゐるやうである。そして、それのみが彼の求め得た、何より確な、消し難い唯一の體驗のやうである』と斷じてゐる。

意識はせずとも人間の深い心に過去の記憶の如何に強くこびりついてゐるかは恐ろしいほどである。と同時にこの『にほひ』が詩人にとつて『刻々の生活』の欣求であり、また『何より確かな唯一の體驗』であるとしてゐるところに注意をせねばならぬと考へられる。別言すれば詩人の生と死と愛と、實在と願望と空想とがこゝに於いて一つになつてゐることが面白い。大槻氏は先號の本誌のモリス論中で詩人の愛卽死の思想を問題にしてゐたが、こゝにも一つの類似の思想が發見せられる。

二、爪嚙みの心理

童話作家水谷まさる氏には爪を嚙む癖がある。精神分析はこれを、口唇性感の名殘と解釋する。卽ち、我々が幼時に自分の指をしやぶつた自慰的快感の遺物と見るのである。童話作家にさう云ふ癖のあることは甚だ似つかはしい。それに就いては自分でも氣付いてゐるので、嘗てかう書いてゐた。アンヂェロ・パトリと云ふ人の意見を紹介しつゝ……。

『なぜ子供たちは爪を嚙むか。わたしはかう思ふのである。私達の祖先が石や木に依る生活を續け、石斧で指先を誤つて打つた時も、その指先を口にくはへたものだと

思ふ。さう云ふ習慣だけが長い間に殘つて來て、肉體的に指を傷めないでも、精神的に何か苦痛に遭遇しても、やはり指を口へ持つて行くに違ひない。』

『だから子供等が爪を嚙むのはきつと身體が樂で然も心が活動してゐるといふやうな時に限るのである』と。

これは生物學的な解釋で、總て物的なものを以て心的なものを解釋しようとする時に起きる無理がやはりそこに見える。爪を嚙み指をくはへるのは肉體的苦痛の慰撫に起源すると斷じておきながら『きつと身體が樂で心が活動してゐると云ふやうな時に限』つて爪を嚙むと云ふのは論理の辻褄が合はないではないか。

『身體が樂で心が活動してゐる』時とは、即ち無意識の擡頭してゐる時である。その時、卽ち人間の嬰兒性が現れて來る。從つて嬰兒時代の記憶たる指しやぶりが動作にまで出て來るのである。併し指しやぶりの代償として爪を嚙むのである。代償と云ふのが語弊があるならば、指しやぶりの後期の發展としてゞある。が、やはり口唇段階の性感の名殘りの發露であることに變りはない。幼兒は始めには大人しく母親の乳房や自分の拳をしやぶつてゐるが、やがて乳離れ前頃になると時々乳房を嚙むやうになる。これ口唇加虐性（サデイズム）の現れで、クライン女史の兒童分析論に詳しいことであらと思ふ。

三、性に對する少女の疑問

次は或る婦人の手記の一節である。別に附加を要せぬからそのまゝ轉載する。

『多分私が十歲頃の思ひ出である。今ではあんな古めかしいポスターの下つてゐる、そしてそれに適はしい藥屋などは私の故鄕の町にも見付ける事が出來ない。「汗知らず」の宣傳ポスターである。全體が水色の調子で色彩られてゐて、浮世繪風の美人が、豐かな肉體を殆ど肌脫ぎにうちわを片手にスダレを後にして往來の人に張り切つた笑を投げかけてゐた。何時の間にか私はこの美人に甚だしい關心を抱くやうになつた。家からあまり遠くなかつたので私はよくその店の前を通る、意圖して通るわけではなかつたが、近處まで行くとフト美人を思ひ出すのである。胸がうづくやうな變な期待と緊張と何とも云へぬあこがれが小さな心を占領して了つて他の事は忘れてしまはんばかりである。一寸說明し切れないが、怖いやうな、氣遣ひなやうな、嬉しいやうな、見たいやうな、

見度くないやうな」と云つた具合に美人を見る前には必ず異樣な感情を經驗するが、たう〳〵その藥屋の前まで行つてポスターを一目見ると俄然、羞恥と、何か禁斷されたものを見た後のなやましい氣もちが重つて來てひどく動搖を感じた。そして自分はその美人を冒瀆した、つまり見る事によつて汚したらしい、と思つて惱むのであつた。どうもその感情を今思ひ出すと出產に關係があるらしく、きまつて赤ん坊を聯想してゐた。赤ん坊の生れる處の繪ではないか?」と頭から早呑込みをしてゐたらしい、その後私の一家は故國を去る事になり廿年あまりたつた、永いことこの思ひ出は埋れてゐて、時々思ひ出す事があつても妙な事を考へたものだ位にしか取り上げなかつたが、最近になりそれとつながりのある事柄を思ひ出したので面白く思つた。

私には姉妹が多く、物心ついてから母の出產を四度知つてゐた。家の中が騷がしいと思ふと晝ならば私達は外に遊びに出され、歸つて來ると赤ちやんが生れてゐたり、夜だと、朝になつて赤ん坊の生れた事を知つたのである。數へて見ると私が十歲位の秋に末の妹が生れてゐる。その前後の思ひ出である事は斷言出來る。赤ちやんはどうしてどこから生れる?と云ふ疑が可なり强く起きたであらう事は考へるに難くない。が、それを人にきく事をせず强く抑壓して了つて一人で空想してゐるうちに、「汗知らず」のポスターの美人と私の母とが肯てゐた爲めに、そしてポスターの美人が肌脫ぎをして、つまり肌を露出してゐた事に、何か自分の氣もちを刺戟されて、さうした感情を抱いたのではなかつたかと思ふ。深く分析して見ればこの外に私自身の幼兒的な種々なコムプレクスが發見出來るかも知れない。未だに井川洗厓氏の描く一寸浮世繪風な美しい女を見ると、遠い昔ポスターの美人に對した時のやうな氣分を、感じる事がある。』云々と。

四、幼兒期經驗と記憶術

去る六月十九日の時事新報に『世界一の記憶者』と題して數千の數字も瞬く間に覺えると云ふ、島根縣出身の石原誠六(二八)と云ふ靑年の話が出てゐた。東北帝大の法文學部の心理學教室に於いて研究中の大學院學生薄田學士が千葉博士の指導の下に石原君を被驗者としてその異常記憶を調査して來たが、この程これを完成し、近く

全世界の學界に發表する事になつたとあつた、從來世界一と公認されてゐた異常記憶者はドイツのミュラー博士に依つて發表されたリュッケルと云ふドイツ人で、二百個の數字を二十分三十秒で記憶し再記した。然るに石原君は二百個の數字を九分三十秒で記憶し再記した。一例をとれば「七四二七六九一一三八」を「ナシフナムクイイミヤ」として記憶し、その基礎表象として頭に自分の故郷の景色を思ひ出してゐるので、その基礎表象を四百持つてゐると云ふ。

記憶の基礎としての四百の表象と云ふのは、どんなのであらうか。さうしてその表象と記憶との結合關係はどんなであらうか。薄田學士の研究は七月頃完成した筈であるが、差支へなければ當研究所にも一部御寄贈願ひたいものである。私として興味の深いのは、その基礎表象と云ふのが故郷の景色に關係してゐると云ふ點である。幼兒期記憶が如何に人々の心に強い力を持つてゐるかは我々も既に知つてゐるが、それがこの特殊の人間に於いてどんな事情になつてゐるかを知ることに我々は深甚な興味を持つ。普通心理學の立場からばかりでなく、同大學の精神病學教室の分析學者たちもこの被驗者を分析的に研究して見られては如何？

『森よし子さん』

田内長太郎

『森よし子さん』とは畏友北村正喜氏が出版した書物の表題である。この書物は三巻からなつてゐて、森よし子といふ八歳の孤子の少女の手紙と手記とを主として輯めたものである。はなはだ珍重すべき書物であると思ふが高知市といふ邊鄙で出版せられた上、別に廣告せられたわけでもないから、それは全然世間に知られてゐないと言つていい。私はここに簡單でも、これを紹介しなければならぬ義務を強く感ずる。

本書に輯められたよし子さんの手紙や手記は、大正十二年二月中頃から始まり、同年九月初めで終つてゐる。過半、著者の北村氏にあてたものである、といふよりも、多くは北村氏から出した手紙への返事である。當時すでに四十歳の北村氏と、十歳にも足らぬその少女との間に、どうしてかういふ文通が開けたかといふことは、直接本書について讀んで頂かう。ここではその手紙の一つから拔粋だけをする。これによ

つて一人の幼い子供の營んだ、倫理、宗敎、哲學、藝術を基調とした立派な精神生活が、如何に見事に表現せられてゐるかを、讀者に幾分なり看取してもらへばいいのである。

（前略）〇

ヨシコノダイジナ〱兄チヤンガイナクナリマシテヨシコハドンナニサビシクナリマシタカ。カナシイオモヒデイツモ兄チヤンノコトガワスレラレマセン。人ハナゼシンダリナンカシマスカ、ドウシテモアタシニハワカラナカツタ。死ヌトイフコトガワカラナカツタ。死ンダナラナニナルカ、ドコヘイクカワカラナカツタ。ケレドオヂサマオハナシクダサイマシタワネ。人ハドウシテモ死ヌモノダトネ。マタ死ンデーアチラデミンナトイツシヨニクラシテヰマスワネ。イキテヰルトキノヤウニクルシイメニモアハズマタカナシイコトモナクホントニラクデスワネ。ケレドヨシコハオモヒマス。人ハナゼ生レダリ死ンダリシマセウ。ウマレテイロ〱カナシイコトニデアフヨリハ生レテコナイノガドレホドヨイカシレマセン。（中略）

ヨシコハイキテヰルトイフコトガ、コンナニマイニチオナジコトバカリクリカヘシテヰルコトヲカンガヘマスト、ホントニフシギデナリマセン。ドウシテデアラウ、ナントイフモノデシヨウカネ。オヂサマヨシコハオモヒマス。コレハミンナガイロ〱ナナガイユメヲミテヰルノデハアリマスマイカ。ミンナソレ〲チガツタユメヲ、オモシロイユメヲミテヰル人モアリ、マタカナシイユメヲミテヰル人モアリマスワネ。ヨシコハイマカナシイユメヲマタウレシイユメヲミテヰマスワネ。オヂサマ生キテミンナガクラシテヰルコトヲユメヲミテヰルトイツタラドウデシヨウカ。コノイロ〱ナユメガサメタトキガアノナニノクルシイコトモシラナイ死デハアリマスマイカネ。ヨシコハイロ〱カンガヘテヰマストフシギデナリマセン。（中略）

ヨシコハ、コンナコトヲカンガヘテヰルトワカラナクナツテ、ジブントイフモノガワカラナクナリマスモノ。オヂサマハソンナニオモヒニナリハシマセンカネ。オヂサマホントウノオウチテハドチラデゴザイ

マセウネ。ナガイ〳〵ユメヲミテヰルトコロガオウチデセウカ。クルシミノナイ死ガホントウノオウチデゴザイマセウカ。オハナシクダサイネ。ヨシコハワカラナイモノ。コンナコトヲキクヨシコヲオヂサマハオハライニナツテハ。イヤデスヨ。（下略）

○

右は第三巻の『よし子さんの帖』の中に出てゐるものである。勿論、著者の添削は一字一句も加はつてゐない。これがわづか八歳の子供の筆になつたものかと思ふと、驚くよりもむしろ恐しい感がする。

『森よし子さん』三巻（四六判、通算三百十二頁）には、さうした類の手紙や手記が滿載せられ、その所所に、これまた神品とも稱すべき童謠が織込まれてある。

結局、この天才兒はどうなつたか。右の例文の中に兄の死が語られてあるが、――ちなみに、この小學四年生で病死した靜男といふ孤子の少年も、決して尋常の子ではなく、勝れた文章や童謠を作つたり、殊にその死の直前に、それまで養育せられた伯父伯母や妹のよし子さんにあてて、行届いた書置きを書いてゐる。それらもみな本書に摘錄せられてある――その兄の死後、よし子さんは、何かの事情のために轉轉と居を變へる伯父一家に伴はれて、高知縣の郡部を彼方此方、それから隣國の愛媛縣へ移つて行く、その間北村氏との文通は、杜絶えたり、また復活したりしてゐる。さうして彼女達が大阪に居を定めてゐた時、あの關東大震災が起きた。その恐しい話を伯父から聞かされ、新聞でその慘狀を寫眞を見、またその避難者達を目擊したよし子さんは、當時東京に住んでゐた北村氏の緣者の安否をひどく氣づかひ、災害地の樣をいろいろ想像しては恐怖にをののき、その地の氣の毒な罹災者達にあらん限りの同情を寄せ、そしてさうした不慮の大天災に對して、幼い子供のそれとはとても思はれないやうな感想を書き綴つて、前後二通の手紙を書いたのである。

しかし、第二回目の手紙は、「イマトシコネエサンガオツカヒニイツテトイツテキマシタカライツテキマス。カヘツテオシマヒヲカイテダシマスカラ。』といふところで、切れてゐる。しかも、そのおしまひを彼女は遂に書くことができなかつたのだ、お使ひに出た途中で、自動車に轢かれ病院で死んでしまつたか

らである。その臨終のけなげにおちついた様を傳へて、從姉のとし子さんが、「ほんとによし子さんはえらいと私はおもひました。おいしやさま方も　大へんかんしんしておいでました。云云」といふ手紙を寄越してゐる。

筆者は本書の一讀を世の兒童敎育、兒童心理または兒童藝術の研究家諸氏におすすめしてはばからない。自費出版物で實費でお頒ちすることにしてゐる。お望みの方は、高知市江ノ口七十一番屋敷北村正寅氏に御照會下さい。値段は三卷全部正確か金七十錢のはずである。

〔死に臨んで慫慂としてゐたところと、彼女の文中に『クルシミノナイ死がホントウノオウチ』と云ふ思想の見えてゐるところを察すると、彼女の不慮の死も實は無意識的の願望充足としての擬似行爲ではなかつたかと思はれる。（編輯者附記）〕

病む兒の心

大槻岐美

二週間ほど私が入院してゐるうち、その女の兒は大して私に馴染みもしなかつたが、さりとてよそ〳〵しい處もなく、名前を呼べば、瘦せた細い首を回して大きい瞳でぢつと返答がはりに私の顏を見返すのであつた。遠い親類に當るとか云ふ若い女が付そつてゐたが、大ていその人は他の看護婦達と屋上に遊びに行つたりして可なり永い間その兒の側に姿を見せないことがあつた。「淋しい？」と私は手を伸してキャラメルなど持たせながら聞くと、淚を一杯ためて「淋しくない。」と決まつて答へる。その度に私は六才にしてはませた感情を持つた兒の心の奧底にある、淋しいと素直に云はない一種のヒガミを傷ましく哀れに思つた。「自分をうとんじてベッドの傍に付いてゐて吳れない人のために淋しがるものか」といふ瘦我慢からぢつと一人で耐えてゐる子供らしくない哀れさがいぢらしくなつた。無口で、何時間でも默つて橫になつてゐた。けれ共、時には耐え切れないのだらう。何でもないのに大聲を上げて泣き出す事があつた。その聲は大人である私達病人の胸を深くえぐるものがあつた。

その兒が病院生活を初めてから、半年も經つてゐたので、あまり裕福でない親達は入院費の支拂ひにも隨分辛

いやうであつた。時々實直さうに縞の着物などを着た父親が、半日位來てはその兒を膝に乘せたり、繪本を讀んで聞かせたりして歸つて行くが、その歸る時が大變なのである。十日間の孤獨の淋しさを半日で取りもどさうとでも云ふ樣に、父親の身體から離れない。そして子供にしては出來る丈けのわがまゝをし盡し度い氣もちに驅られるらしく、凡そ小さい頭で考へつく丈けの注文を出して父親を苦しめ通すのである。お菓子がほしい、家へ歸る。卵がほしい。繪本がほしい。抱いてお屋根の上に上つて頂戴。自分を抱いたら腰かけてはいけない。父ちやんは家へ歸つてはいけない。もう今度からは病院に來てはいけない。……等々。父親の困る事ばかり云つて泣くのである。泣きつかれてねむつてしまふのを見て、父親は暗い顏をして歸つて行く。

私はその兒の付きそひの女の人とよく話をするやうになつた。彼女は不親切ではなかつたが、若い身空に病院生活の半ケ年は一寸やり切れないのであらう。君ちやん(その兒の名)の事など、かなり委しく話してきかせて呉れた。その話の中には强く氣持を惹かれる事があつた、勿論、その人はそんなことを知らずに聞かせて呉れたのではあつたが……。

君ちやんが膿脳で手術をしなければならぬと醫者に云はれたのに父親は可哀想だとがんばつて手おくれにしてしまつた。そして神頼みをして拜んでゐるうちにかう云ふ神樣のお告げを夢見たと云ふのである。「君子は手術させても入院させても死ぬに違ひないから、たゞ安樂にして家に置いてやれ」と。無論、家庭は貧困であつた。父親にとつては、子供を亡くす事は辛いのには違ひないが、この上經濟的に行詰り、他の子供を犧牲にして、病兒の苦しみを永く見せられてゐるのも切ない事情であつたのであらう。「いつそ死んで呉れたら、當人も傍の者も樂になる……」と、エゴイスティックな愛情から無意識にもせよ神樣のお告げなる夢を創り出した……、それも無理ではないなアと私は話を聞きながら考へたのであつた。結果は君ちやんの親類や、母親の反對で、この病院に入り手術を受けて半年目である。母親に對しては父親によりもサディスティッシュでない。むしろ無關心のやうに母親にはわがまゝを云はないのである。母親が見舞に來ても大して感動を受けないらしく、歸る時もおとなしく歸すのであつた。手術後あまりの苦しさにベッド

の上で身もだえしながら、父親にばかり呼びかけたさうである。父親は見兼ねて君ちやんの手を握つてやつたりすると怒り出す。

「あたいの手にさわつちやいけないよう。父ちやんはあつちへ行つてゝよう。」そして父親の姿が見えなくなると、又泣き叫ぶ。「父ちやん此處へゐて……。腰かけてちやいやよう、立つてちやいやよう。」父親は身の置き所なく子供の哀れさに男泣きにないたさうだ。

「此の兒は父親を愛してゐるのだ」と私はさう思つた。六つの兒にも——病兒であつたゝめでもあらうが——こんなに錯雜した愛情の戀態があるのかと、私は永く忘れる事は出來ない。

學童の心理を觀察して

井原錄郎

私は東京市内の某小學校の訓導でありますが、子供の言語行動を注意深く觀察して居りますと、なか／＼面白いことがあります。教室運動場等にて思はずふき出して了ふことが幾度あるかしれません。

例へば、——

1、一、二、三年の兒童を集めて講演をしたことがありました。講演中大變騷がしいので、演者が『騷ぐと止めますよ』と言ふと、一年生の一人が遠慮なく、『止めてもいゝよ』と言つた。なるほど止められたら困るだらうと思ふのは教師の見惚です。講演の最後に演者が兒童に向つて『今日のお話は皆さんが騷いだので隨分骨が折れましたよ』と言ふと、突拍子もない大聲で『骨が折れたら死んぢやふよ』と言つて滿場の人々を哄笑させました。子供は存外に皮肉なものです。

2、お話をしてはいけないと言ふとやりたがりしてもいゝと言ふと案外しないものです。子供にとつては禁制を犯すことがエディポス的快樂であります。一日、騷がしかつた時叱つて靜肅にさして、其の後直ぐ話してもいゝと言ふと遠慮して話さないので再度話してもいゝと言ふと今度は當場の話題に窮した面持で

誰言ふとなしに『むにや〳〵』と言ひ始め、次第に全級に擴がり、遂にそれが念佛に變り、果は合掌再拜して南無妙法蓮華經を誦へるやうになつた。この機智的な聯想上の變化と進展とは、誠に興味ある心理過程だと思ひます。

3、發育遲い一人の子が股の下からのぞいて見て、さも驚いたやうな顏付で、『股の下からのぞいて見たら人が倒になつてゐるので僕驚いちやつた』と告げた。此の子は未だ股の下からのぞいたことがなかつたのかしら。

4、先生が散髮して綺麗になつて學校へ行つたら兒童が『やあ先生がきれいになつた』と机の蓋をたゝいて喜んだ。子供は大人を冷評かすことを好むものです。自分より優れたものを、ひき下げることの快樂でせう。

5、これは二年の女兒ですが、遊び時間に大勢寄つて來て洋服にぶら下るので、『洋服がきれるからおよしなさい』と言ふと『洋服なんてきれたつていゝわよ。前の先生のも破つちやつたから先生のも破つて上げるわ』と殊更に引張つた。女らしいサディスティッシュな愛情の表現です。

6、暑くなつてから毎日お風呂をたてる家で子供に『お風呂が出來たからお入り』と言つたが、どうしても入らない。そこでよく訊いてみると、『僕は先生に一日置きに入ると言つたから、毎日入ると先生に嘘をつくことになるから入らないんだ』と告げた。學校で入浴度數を調べた當時は、其の家では一日置に風呂を立ててゐた。子供は案外正直である。併し時には這入りたくない時に口實としてこの正直を利用することもないとは云へない。

7、修身で『始末をよくせよ』を教へた時『先生は本當に君達がお家で始末よくしてゐるかどうか覗に行きますよ』と言つたところが、一人の神經質な子が歸宅後、母に向つて『先生がくるからこんなきたない家に居ないで門のある立派な家に越してよ』と云つてどうしてもきかなかつた。子供はいぢらしいもので、滅多に冗談は云へない。

以上のやうに兒童の心理は考へれば考へる程面白いものであると同時に、教育者や父兄はよく此の兒童心理を熟知してゐなければなりません。私共教育者は出來るだけ

澤山の資料を集めて絶えず研究して兒童に卽した教育をして行きたいと存じます。つきましては甚だ恐縮で御座いますが、何か資料となるやうなものでもありましたなら、大小となく其の都度本誌に御寄せ下さいますやう願ひます。

ニイルの教育法

長崎文治

今私に課せられた論題は、ニイルの教育を紹介することであるが、これは旣に霜田靜志氏によつて、充分になされ、その著書の飜譯も出版されてゐる。卽ち『問題の子供』、『問題の親』、『問題の教師』の三著は、極めて行屆いた譯書であり、譯者自身の懇切な論文の附錄に依つてニイルの敎育の全貌を窺ふ事が出來るから敢て非才を以て蛇足を加へる要はない。唯、私はニイルの教育法に精神分析學が何れ程影響を與へてゐるかをうかゞつてみやうと思ふ。

ニイルの教育は、兒童の心理の深い理解から出來た徹底的の自由と、そして彼自身の性格的と云つてもよいほどな愛とが一丸となつて子供の心琴に響いていつて、中なる眞實の精神を曳き出す事である。彼は何事によらず、子供が自發的になる迄は教師や親が强制すべきではないと考へてゐる。强制すれば或は服從させ得るかも知れない。併し强制だけでは精神の隱れたる無意識を左右する事は出來ない。それ故、强制して服從させたと安心してゐる程、子供の無意識的反抗は强められるのである。抑壓された感情は必ずそのはけ口を何れかの方面に求める。然るにその抑壓を加へることが兒童に對する從來の教養の役目であつた。規則とか、道德とかいふものの强制がこれまで何れ程兒童を束縛し、歪めてしまつたか。その爲めに子供が卑怯になつたり、犯罪者になつたりする。他の官學的な學校で教育せられた怠墮な子供が、ニイルのサンマーヒルの學園で勤勉になつた例が多くある。興味のない事に强ひられた子供は、表面的には勤勉であつても進步がない。ニイルの學校では勉强しやうとする氣持の出るまで氣隨氣儘に遊ばせておく、併し一旦

自身の要求から勉强し始めた子供は、前の怠惰時を埋めつくして、優に他の學校の同等の子供より以上の眞劍さと、洞察力を持つて來る。彼は眞に怠墮な子供は存在しないから、何時か必ず何等かの要求を持ち始めると信じてゐる。それ故彼の學校の子供は皆伸び〳〵してゐるのである。

子供の盜みは、大人の所謂盜みとは性質が異つて罪の無い場合が多い。これを教師たる者が誤つて觀察したならば取返しのつかぬ程惡い結果を子供の心理に齎らす。知識慾の爲めに盜みをする子供に同情を持つと共に、この子供の求めてゐるものを明らかにしてやることによつて盜癖が止む。ニイルの取扱つた例は、七歳の男兒ビリーについてゞある。職員の一人が或る日時計を盜まれたが、その時計は寮母によつてビリーが玩具にしてゐたと告げられた。普通の先生ならば直ぐにビリーを呼びつけて裁判官の如く問ひ質すであらう。併しニイルは寮母の言葉からビリーの心理を了解したのである。『其の時計なら、ビリーさんが玩具にしてゐましたよ。それで私がどこからその時計を持つて來たのつて聞きますと、ビリーさんはお家のお庭の中の深い深い穴の中から見つけて來たんだと云つてゐましたよ』。このビリーの言葉の中からニイルの得たものは、ビリーが出産について疑問を抱いてゐるといふことであつた。事實、ビリーを呼んで試みた次の問答で分る。

『ビリー、お前はアンダーソン先生の時計を知らないか』、と私はきいた。

ビリーは無邪氣な眼をパッチリ明けて私を見た。

『いゝえ知りません。』そして、つけ加へた。『どんな時計？』

私は半分間ばかりビリーをぢつと見つめて居た。そして言つた。

『ビリー、お前は赤ちやんが何處から生れて來るのか知つてゐるか。』

ビリーは不思議さうな顏をして私を見た。そして云つた。

『えゝ知つてゐます、空から來るのです。』

『ちがふよ』、と私は笑つた。お前はお前のお母さんのお腹の中で大きくなつたんだ。そしてすつかり大きくなつた時生れて來たのだ。』

私が斯う言ひ終るとビリーは默つて自分の室へ行つて

鞄をあけて壞れた時計を出して來た。そしてすぐそれを私に手渡した。

間もなくビリーの盗癖は癒つた。彼は眞實を求めん爲め盗みをしたからである。ニイルはこれについて次の通り説明してゐる。ビリーが家のお庭の深い穴といふ事を語つた時に、彼は全く無意識的に自分が生れ出た所の深い穴について考へてゐたのである。それからもう一つ、私はこの子供の父親が幾匹かの犬を飼つてゐたことを知つてゐる。ビリーは犬の子が何處から生れたかを知つてゐたであらう。然るに、母親は臆病にも此の眞理を知らせる事を抑壓して了つた。そこで子供は此の眞理を知らうとする意志は、遂に別な形で滿足を得ようとする意志として現れたのである。卽ち彼が時計を盗み出した事はそれは彼にとつては母親を盗み出す代りの仕事だつたのである。彼は實に眞理を求めん爲めに時計を盗み、時計を打ち壞したのである。と、ニイルのこの見方は明らかに精神分析學的の立場から出發して、巧みに成功してゐるのである。この外、家庭で不潔で困つてゐた子供がニイルの學校へ來てから非常にきれい好きになつた例がある。その原因は母親が何時迄もこの子供の世話を焼いて赤坊扱ひにしたことにあつたと分つた。またニイルは子供の虚言が、滿されない願望とか、空想から來てゐることを證據を擧げて說いてゐる。

精神分析學は、此の外にもつと複雜な問題や、性格形成に就いて幼兒期の取扱ひや幼兒期のコムプレクスに原因してゐることを明らかにして、甚だ、教育に對する訂正を示唆してゐる。これを知る事によつて、教育效果の上に甚大な影響を及ぼすかを想像せられるがよい。行詰まつた教育を打開する道は、恐らく精神分析學の領域から發見出來るのであらう。我々は實際教育家が精神分析の知識を以つて教育活動に臨むことを要求して止まぬものである。勿論、現代我國に精神分析學を採入れた教育を施すことは尙早である、種々困難に遭遇する事は當然である。そこで我々は精神分析學を更に正しく研究すると共に、日本の現實に卽して打ち建てることに努力してゐるのである。精神分析學を單なる皮相觀からして排斥し、その說明のためにのみ寓話視するのは既に過去のことである。精神分析學は最近益々進歩を著くし、次第に生活の諸方面に應用されて來つゝある。殊に教育上では精神分析學は愈々無視することの出來ないものとなつて

ゐる。ニイルは彼の教育法に對する種々なる批判にはたゞ無言なる實證を以て應へ、實際の教育に於いて着々効果を擧げてゐるのは、非常なる力强さを感ぜしめると共に我國の教育界への示唆ともなるのである。

泥ん子遊びの心理

木多良

僕にとつては一番舊いと思はれる記憶は三歳の時の事である。晝間らしいが人通の少い路上、風呂敷位の大きさのデコボコしたトタン板の上で、一つ位年上の男の子と二人で泥をこねてゐた。こねて何を拵えてゐたか分らない。すると相手の男の子が、僕の直ぐ傍で何か見付けたらしい。目と顎とで『そら其處に』と云つて見せたが手の方でこねてゐる。僕も見たが同樣手の方に夢中である。どうしても見付からない。それより目前の鼻の下の太い見事な青い二本棒に見惚れてゐた。啜りもしなければ舐めもしない。たいしたものであつた。泥んこと靑洟とが私の記憶の最も舊いものである。あの泥んこ遊び！想ひ出にこれを持たない人は、子供時代の樂しさを知らない人ぢやないだらうか？

雨上りの翌日位、子供は軟さの一番いい工合を知つてゐる。下駄や車で良くこね廻された路傍の泥。殊に砂利氣の無い露路や庭の泥が一番いい。兩掌でころ／＼まるめる、ひんやりしたこそばゆさがちり／＼泌み亙る。さう、耳の傍へ持つて行くと、ちつちやい／＼吸付いちや直ぐ離れなければならない忙しい音である。夢中になつてくる其顔付の眞劍さ！

ほらお團子だと差出す。どうも押され氣味で少し平べつたくなつてゐる。が、其の表面には子供の掌の神經が這つて居る。だが御母さんの作つて呉れる御團子は白し餡ころはあまい。どろんこでは駄目だ。つまらなくなつて、ぐつと握りつぶす。面白い、どろん子は逃げられなくて困つてゐる。掌をくすぐつて逃出さうとする。さつきは可愛がつてやつたんだけど、今度は違ふ。いぢめる番である。互に握合せる樣にしたり、祈る時の樣に指

と指とを組む。ぐつと力を入れるとどつかへ逃げる。そつちへ力を入れると、こつちへ逃げる。息苦しい鬼ごつこである。氣の短い兒はいきなり喉でも締める樣に、ぎゆつと力を入れる。苦しまぎれのどろん子は、指の間から頭を出す。やあ顏を出したと益々力を入れる。やれやれと云ふ樣に拔け出して來る。でも泥ん子は可愛いい。そんなにいぢめられても指の股の薄い所をくすぐつて、仕返しするだけである。

兩手で揉んでやる。ぐにやりとする、御餅だ〳〵つて云ひ乍らたゝく。葉つぱのやうに擴がる。子供と泥ん子！二人の仲は御母さん達が一番良く知つてゐるであらう。洗濯に惱まされてゐるから……。

『いやねえもうこんなに汚して、今朝着更へさして上げた許りじやありませんか、さあ御手を洗つて、御飯よ』と歸つて來ると叱られる。

何遍聞いた御叱言であらうか。運が惡いときには泥んこ遊びに夢中の時に引立てられる事がある。御母さんは他處の子を叱る譯にはゆかない。奇妙に仲間が居てやつてゐる。『ほんとにし樣がない泥ん子ごつこ許りして、さあお歸んなさい。』仲間は一寸可哀さうなと云ふ樣な顏して見送る。だが、やめはしない。引立てられた子はてれくささうに、くつついてる泥をこそげ落す。可愛いい掌の溫さで乾きかけた泥、妙に突張つて一寸握らうとしても、こそばゆい。兩掌を擦ると、さら〳〵としてぷんとかすかな臭！

もう何年か嗅がないなつかしい香である。

漱石の日記、明治四十四年七月三日の所にかうある。

相變らずの雨にてくさ〳〵する。踏むもの觸るゝもの悉くじめ〳〵して心地惡し。二時頃寺田がくる。第五の出身者が五六人精養軒で飯を食ふから出ないかと云ふ。雨では恐れるがと思つたが思切つて出る事にした。江戸川終點へ出る間の道の惡さ加減はまことに言語に絶してゐる。仕舞に腹が立つ。然し土を鑑賞する事が出來たら此位美的な土はあるまい。ファインで粘氣があつて柔で申し分がない。』

土の鑑賞と云へば同じく六月五日の日記に――

『暑さ昨日と同じ。北側の椽に出て籐椅子に寢てノイエ・ルンドシヤウを見る。地面が濕つて滑かで實に好い氣持で、英國などでは千金を出してもこんな色と肌色（この色は合の誤らしく、全集にも色の右側に原文の儘の意味の原と云ふルビが振つて有る）の地面は手に入らない。』

とある。一年間の切りつめた、ストイックな倫敦生活、

其はあの文學論の序にある欝憤をたゝきつけざるを得なかつた『狼郡に伍する一匹のむく犬』の様なあはれな生活であつた。』それにつけても母國の我家の庭の土はまるで懐しい女の肌の様である。あの倫敦では千金出しても手に入らない。

然し之は初夏の快い土への想ひであるが、七月三日のは大達である。傘片手に難かしい顔をして、足下を氣にし乍ら歩を拾つてゐるが、ふと、此位美しい土は有るまい、ファインで粘氣が有つて柔かで申分がないと考へ出す。何故に申分がないのか？ 夏目さんは、鑑賞が出來たらと仰有るが、かう云つてゐるのは十分に鑑賞能力のあることを告白してゐる。名主の末つ兒の金ちやん、掌がむづ〳〵しやしなかつたかと思ふ。先生はえらくなつた御弟子達の招宴に引張り出されるので好い着物を着てたから言語同斷と腹を立てたが、底にひそむ幼兒的本能は十分これを鑑賞してゐたやうだ。子供にとつて雨の日は合羽とグム靴さへありや、樂しいものである。あの學校の往復、少しでも水がたまつてゐると『やあ池だ、海だ』と、口々に云ひ合ひ乍らぴちや〳〵入る。中には一人でだまつて、吸ひ寄せられた様にすうつとやつて來て、渉つて行く兒も有る。

子供達にとつて大きな、むしろ最大と云度いな魅力のある、御母さん達の云ふ『バツチィ』なこの遊びの心理的起源は何であらうか。精神分析的に研究すれば勿論弄糞の名殘に外ならないであらう。（完）

小川未明氏兒童文學創作の心境

田内長太郎

當代での童話作家小川未明氏が、小説の方面でも、これまで幾多の勝れた作品をものしてゐることは、誰も知るところである。しかも、その長短合せて數百篇にもぼる氏の小説の殆ど全部が、少年を主人公に描いたものであるといふに至つては、まさに氏は、ロシアのソログーブル以上の世界的に特異な作家であると言はねばなるまい。それでは氏のその少年を主人公に描いた小説と、

現在專念してゐる童話とは、どう區別せられてゐるか。未明氏にあつては、單に、「小說の方は大人に讀ませるもの、童話は子供に讀ませるもの」といふだけではなく、「小說の主人公である少年は、自分の子供を描く」といふのである。童話の中の少年少女は、自分自身を描き、小川氏を訪うてその心境を尋ねた記者の質問はこの邊から始まる。

「なるほど。しかし、貴方の小說に出て來る少年は、大抵みな、頭がでつかちで、顏色が惡く、手足が不格好に發育して、ひよろりとした子供のやうですが、――では貴方の子供時代はああいふ風にひよひよかつたのですか。お見うけしたところ、只今ではずいぶん頑丈な體格をなされてゐますが――」

「いや、僕は子供時代でも、身體は丈夫だつた。だが、僕の感じ――僕の神經、感覺、觀念等をそのまま書きあらはすと、どうしても、ああいふ風の少年にならざるを得なかつたのだ。つまり、そこに僕の藝術上の主義があつたわけだ。」

「と、言ひますと――」

「當時は――僕が文壇的の活動を始めた明治年代の終り頃――自然主義が全盛だつた。何もかも、ありのままに描かねばならんといふ、寫實主義、客觀主義だ。僕の好きな歐洲第十九世紀のロマンティシズムとは、全然相容れないものだ。それがため僕は藝術上でも、實生活でも、孤立無援、ひどく苦しい戰ひをした。明治四十五年のころ讀賣新聞に揭載した『魯鈍な猫』といふ小說を讀めば當時の僕の苦鬪の一端がわかる。それはさうと、今も言つたやうに、そのありのままを描くといふ自然主義に抗して、僕は飽くまでも、自分の感じ――自分の神經、感覺、觀念等を通して、物を描いた。例へば、神經の疲れきつた時には、黃色い砂原を、また、呼吸づまるやうに苦しい時には、一寸さきも見えぬやうな闇を描くといふ具合だ。そこで僕が少年を描いたのは、年齡上から、其處にある距離ができて、自分の少年時代を回想するのに、ちやうど好適した時期にあつたからだとも言へるだらうが、それは、いはば外的の楔機で、實際はまづ、少年時代に味はつた自然と人間との有機的關係、自然と人間との融合――人間の愛憎を超越したその融合が、僕に懷しく思ひかへされたからである。子供のころの目に映つた、紅い夕燒だとか、靑葉を吹きわたる風だとか、

空をとぶ蜻蛉だとかが、懐しく思ひ出されたのだ。と言つて、自然はさうして人間と親しく融合ばかりはしてくれない、時には人間に對して、恐しい暴威をふるふ。なかんづく僕の郷里では雪がそれだ（記者註、氏の郷里は越後の高田である）。冬の恐怖、雪の恐怖、それに人人は震ひをののく。子供には、人間の社會そのものは、まだわからぬが、自然のその力は、はつきりわかる。自分を小さくして、その大きな力にぶつつかる。反抗だ。それを僕は少年によつて描いた。」

その反抗こそ、とりもなほさず、當時の自然主義に對する未明氏の態度なのだ、と記者は考へる。自然との融合を懐しむのが、ロマンティシズムであることは言はずもがな――

「また、なるほど子供には人間の社會そのものはわからぬとは言へ、」と未明氏は語をついで、「しかし、人間の無理解に對する深い淋しさや、悲しみは子供にもある。物のわからぬ親達から、彼等の氣持次第で、子供が慘酷に取扱はれるのだ――このことを思ふと、僕はたまらない！　また無理解な教師から無暗に叱りつけられる、意地の悪い年長者から理不盡にいぢめられる――かういふ目に遭ふ子供は、勿論、憤激もする――この憤激は、大人が現代の社會に對して抱くそれとそつくり同じだ、――だが、いくら憤激したところで、どうにもならないので、結局、彼は孤獨におちいり、誰からも離れて、『遠い響』を聽かうとする、さうしてぼんやりしてゐると、ます／＼人から白痴扱ひにされるのだ、遂に彼は、この世の何處かに、自分の氣持を理解してくれるやうな、まだ見ぬ母か姉かがゐさうな氣がされて來て、それを、あくがれ、もとめるやうになる。かういふ少年を僕は處女作『漂浪兒』に書いた。それから更に、『みぞれ』といふ短篇では、現實からの理由のない迫害から、平和で安樂な死の世界へのがれる少年を描いたこともある――」

未明氏の談は、かくして、精神分析に好題目を與へてくれたが、その分析は――單にその談話から試みるのも危險ゆゑ――他日にゆづることにして、記者はここで話題を轉じた。

×

「お作の中には、犬や猫のやうな動物を可愛がる少年が出て來ますね、例へば、『惑星』の中では犬、先刻お話の『魯鈍な猫』では猫、――もつとも、この主人公は少

年ではありませんが。あれはどういふ意味でお書きになつたのですか。犬をよく小説に出す作家に、この間亡くなつたイギリスのゴールズワージーがありますが、これの多くは、その犬の生活が人間生活を象徴してゐるやうです。また、ウォルポールの『ジェレミー』といふ小説の中では、犬が主人公の少年の優越慾を代表する役目をつとめてゐるさうですが、貴方のはどうですか。」

「勿論、『魯鈍な猫』の猫は、人間生活を象徴してゐる」しかし、そんなことよりも、ここに周圍から不當の迫害を蒙つてゐる少年がある、犬や猫は、その弱い少年をすら、賴りきつて生きてゐるのだ、それをあはれみ、保護してやらずにゐられないぢやないか。そしてこの氣持はその少年が長じて、自分の妻子に對して抱くそれと相通じる。」

×

「夢については？ 夢を書いたお作が何かありましたね？」記者の質問はまた一轉する。

「ある。『薔薇と巫女』といふのだ。その中に、夢知らせといつたものを信ずるやうになつたことを書いた。この作品は、發表當時——明治四十四年のころ——新しいロマンティシズムの香氣がある、といふ評判をとつた。のちに英譯されて、アメリカで出版せられたものだ。

最後に未明氏は、氏の作風を一括して、次のやうに語つた。

「燒けつくやうな炎天の下に、バタン杏がただれ腐つてゐる、そいつへ蟻がむらがりたかる、その蟻をふみ殺す、と、そこへどつと大雷難が襲つて來る、——かういつたのが僕の作品の傾向だ。」

大體右のやうな談話をうけたまはつて、小川氏のもとを辭去した記者は、その歸途、肝腎な質問を一つ忘れてゐたことに氣がついた。それは「幼兒性感」に對する氏の感想をきき洩したことであつた。だが、そのあとから、——小川未明氏に幼兒性感の感想をたたく？ 何となくお門ちがひ——文字通り——に感じられて、これはきかない方が却つてよかつた、と、『精神分析』の記者にもあらず思ひかへしたのである。

（昭和八年七月九日訪問）

（一〇二頁末から）

代（乳房を吸ふだけで、まだ噛付くことを知らなかつた時代）のこと——『少年の春』——をなつかしく懷ふと云ふのが、本篇の骨子であるらしい。（完）

『少年行』の分析

大槻憲二

一、少年行とハムレット

中村星湖氏の出世作『少年行』は明治四十年五月號の『早稻田文學』(懸賞作物披露の卷)に發表せられた小說である。舞臺は甲州富士裾野の某村を中心とし、時に東京、王子にまでも及んでゐる。主人公は少年時代の作者自身をモデルとするらしい武少年とその學友宮川牧夫との二人。作者は二少年の友情と競爭との經緯に人生と運命との悲喜の調を托して描かうとしたのであらうが、我々には銳敏な感覺と勝れた才能とを抱いて、遂に發狂した宮川少年の心理も、大きな興味の對象となる。

一言にして云ふと、宮川牧夫はハムレットである。總ての點でハムレットに似てゐる。作者自身は全く意識してはゐないところであらうが…。ハムレットと同樣、こ

彼の惱みの原因もやはり母にあつた。その母がも少し彼等に不貞の相を示さなかつたならば、牧夫もハムレットも精神上の現實逃避者とならないで濟んだであらう。別な考へ方をすれば、彼等がも少し母コムプレクスの持主でなかつたら、彼等は生涯常態の人として、その勝れた才能を生かすことが出來たであらうに。併し母コムプレクスを持たぬ人の子が何處にあらう。子供の心を知らずして無神經に振舞ふ母にこそ、世の發狂者の責任の大部分があると云ふ結論は、かくて不可避のものとなつて來るであらう。

牧夫は既に九歲にしてその父を失ふた。その父の死の精神的原因をなしたものは、その母が書生との間の行爲であつた。九歲や十歲にして、人生のこの暗面を知つた彼牧夫の精神が大きな外傷を受けたことは云ふまでもない。かくて彼は常に孤獨を愛し、物思ひに沈む氣質の少年となつた。

牧夫にとつてクロディアスに相當するものは書生、今は疏水事業家となつてゐる繼父である。彼は今では牧夫に對して實母よりも寧ろよき親となつてゐる。牧夫がこの父に對してどう云ふ感情を持つてゐたかは、作者は細

かく描いてはゐないが、意識的には『父を殺した敵』と思ひつゝ、無意識的には相當の同一化を覺えてゐたのではなかつたらうか。牧夫は少年の常として同性愛的傾向を多分に持つてゐることは、武に對する態度に於いても覗はれる。尤も武ほどにそれは甚だしくはないが……。武と牧夫との同性愛的關係は、武が積極的であつて、その戀愛特質は男性的である。牧夫のリビドーは一度母親に於いて坐礁してゐるので、それに懲りてリビドーを殆ど全部的に自我に引揚げ、甚だしくナルチスティッシュとなつてゐる。それ故に二少年の交情關係に於いて、家庭生活に於いて幸福であつた武のリビドーが外部へ放射的――分析的に云へば轉嫁的――であるに對し、牧夫のは内部へ閉鎖的――分析的に云へば、ナルチスティッシュ――である。

話が岐道へそれたが、牧夫の繼父への感情は意識面の敵意に拘らず、無意識面では同感であつたのではなかつたらうか。それは一面彼が同性愛的傾向の少年であつた上に、繼父が彼の將に爲さんと欲して爲し得なかつたことをなした人であつたからである。丁度、クロディアスがハムレットのなさんとして爲し得なかつたところをなしたが故に、ハムレットにとつてクロディウスは憎むべく美むべき（愛すべき）人間であつた（とアーネスト・ジョーンズが論じてゐる）と同樣に……。

而も、牧夫は先天的にすぐれた、感じの鋭い少年であつた上に、母のふしだらへの反動として一層己れの超自我を峻嚴に高尙に構へてゐる人間であるからして、そこに於いて彼自身の心內の葛藤は愈々甚しからざるを得なかつたであらう。その上に、も一つの惱みの原因はその義妹にあつた。彼の「父の敵の娘」である娘への感情は恐らく彼を甚だ强くなやましたのではなかつたであらうか。兩親（實母と繼父）は彼がその娘（雪子）と結婚することを希望してゐる。彼はその精神的發育の遲れてゐる少女に意識面の不滿と道德上の反撥とを感じつゝも、そこに近親者的の誘惑を覺えて來始めて來たらしい形跡も見られないではない。

その上、彼は年齡の長ずると共に、現實をあるがまゝに見る眼は養はれて來て、『……淸濁併せ呑むと云ふ次第でもあらうか、恥も外聞もない渠等の行爲は、寧ろ人間の本性に從つてゐる立派の行爲かも知れぬ――斯うなると僕の母なぞの大酒を食つて、昔は情夫が山程あつた

なんどと惡垂れたり惚氣たりするも强ち非難す可きでないかも知れぬ。とも角も大きな眼で見ると此邊の人間は皆愛す可き者だ、獸性とか何とかけなせばけなすだらうが、僕は野趣ある人物として、多大の興味を以つて見得るやうになつた。』と、なか〳〵自然主義的なさとり振りを見せてはゐるが、併しハムレットも丁度これと同じやうなさばけ振りを見せてはゐる。併し彼等が意識面でさばけ來れば來るほど、無意識面の超自我はいよ〳〵澁い顏をして彼等自身を批難するのであらう。ハムレットはかくて、先王の亡靈を幻視し、牧夫は遂に『追跡妄想症患者』とならざるを得なくなつた。（本誌第二號『相談欄』〔母の亂行に弟は厭世悲觀〕を參照ありたし。）

『素因は先天的にあるかも知れぬが』と、王子精神病院の醫師は診斷して聞かせた。『兎も角も神經衰弱から來た發狂である、現症狀は誇大妄想プラス被害妄想で、それが妙に交錯して發作するらしい。』

熱海の溫泉宿で何某の法學博士と國際法の事で大議論したが、博士なんて者はみな大馬鹿だと非常に憤慨したり、露西亞との戰爭に負けたら乃公が出なくては終結がつくまいと氣焰を吐いたりするところに、その誇大妄想的症狀は見えてゐるが、その原因としての彼のナルチスムスに就いては、私が既に論じておいたとほりである。僕を國事狂だと云つて刺客が二三人踊けて歩いて困るから、警察の力で保護して貰ひたいと云つたりするところに見られる追跡妄想、被害妄想には、彼の同性愛的傾向と、（父殺しの犯人を殺し得ざる罪に對する）自己懲罰願望の空想的充足とが見えるであらう。

二、宮川の繪畫創作心理

なほ、右に聯關して附言しておきたいことは、宮川牧夫が描いたと云はれる二三の繪畫に就いてゞある。その一つは縣會議事堂の展覽會に一等に當選した『二人の嘆き』と題する大幅の日本畫。主題は曾我兄弟の幼時を描き、題名は當時流行した唱歌の一節に（鳥だに父母あるものを、二人が嘆きもことわりや）とあるのから來たらしい。この畫の創作の動機は、牧夫に於いてはやはり自分の父もある男（叔父と義父との相違こそあれ）に殺されたと云ふ點で、曾我兄弟に同一化したところにあることは勿論である。彼は父の復讐をせねばならぬ責めを感じてゐた。而も彼は實母よりも義父に好意を持つ彼自身

を發見したのである。なほその上、愛すべくして愛し得ざる實母に冷遇せられる義妹――『父を殺した敵の子』として憎むべくして憎み得ざる義妹――を寧ろ可憐にさへ思ふ自分ではないか。

も一つの繪畫『渚の捨小舟』は、義妹雪子への彼の感情を語るものであらうと私は察する。牧夫は武にこの畫を送ると共に『渚の捨小舟の寫生』であると説明して來た。併し、武はこれを『捨小舟の寫生とは云つて來たもの丶、寧ろ舟の傍に立つて夕雲を見る乙女が主のやうであつた』と解釋してゐる。この解釋はたしかに正しいと私も思ふ。分析的に云へば、變裝と轉位と象徴とがあるわけだ。本當は乙女が主人公でありながら、題名を『捨小舟』として、觀者の注意をそらせたところに轉位がある。も一つの變裝は、本來これは理想（觀念）畫でありながら、『寫生』と斷つて來たところにある。彼が觀念派の畫人であることは『二人の嘆き』の主題に就いても旣に察せられた。これが觀念畫であるとすると、何の觀念がそこに見られるか。それは捨小舟にこの乙女の象徴としての意味がある事を知れは容易に判ぜられる。舟は常に女性の象徴となるが、この場合の舟は捨てられたる小舟である。それは丁度、一人淋しく『夕雲を見』てゐる乙女の觀念と合致する。さうして牧夫にとつて捨てられたる淋しい乙女とは義妹雪子の事に外ならなかつたであらう。何となれば、彼自身の告白するやうに『此子も亦憐む可き者だ！　四五歳の時腦膜炎とやらを病んで、容貌こそ人並以上であれ、言葉こそ發する事は出來るもの丶、精神の發達が非常に後れてゐる。今年十六か七になる、然し心はまだ十二三だ。僕ば浚分曉の母と此子との間に立つて、何位頭を痛めるか知らぬ、泣いた事もある。』ほどだからである。宮川牧夫がこの義妹に對して、甚だしく『救助願望』を動かしたことは察するに難くない。牧夫はこのやうにして彼自身の心内の幾多の矛盾と葛藤とに堪え得なかつたのだ。この葛藤を力強く料理すべく、あまりに若かつた。またあまりに幼少時の心的外傷が甚だし過ぎた。かくて彼は狂つたのである。

三、奈良原の口唇的攻撃愛

も一つ云つておきたいことは、奈良原武が兒童分析的見地からすると、口唇段階に定着ある少年であるらしいことだ。彼は幼年時代にその學友と喧嘩すると、相手の

足に嚙付いて血を出させた子供であつた。その攻擊慾にはロ唇時代の特質を多分に保有してゐる。從つてその「取込み」と「同一化」とには、喰人本能的傾向が强い。相手を喰はうとする形に於いてその愛と憎とを同時にアムビヴレント的に示す。彼が學友宮川への關心は常に「喰はう」とする形で現れてゐる。宮川もまた常に武から漸次に「喰はれ」ることを感じてゐた。彼の發狂の一因としては、慥にこの感じが多分に働いてゐることは否定出來ぬと思ふ。武は村の貧農の子であつたのに對し、宮川は町の有福な家の子であつた。宮川は一年早く中學へ入學したが、武は後れて入學して同級となつて了つた。さうして遂に宮川を凌いで首席となつて了つた。宮川は自分の優越感が段々と崩れて來ると共に、武の無形の攻勢に壓迫を感じて來た。彼はその壓迫に抗するために愈々努力を重ね無理な勉强をした。彼等は『貧乏に育つてあれだけの人物となつたガアフィールド』と『富裕の子と生れながら驕らず怠らずに彼の如き人格をなしたグラッドストン』とを兩々かつぎ出して議論をした。と云ふことは、つまり武と宮川との相互の間接射擊に外ならない。既に半ば「喰はれ」かゝつてゐる宮川としては、ガアフィールドとグラッドストンの實際の優劣とは離れて、このやうな形で議論を吹掛けられることそれ自身が既に壓迫であり不快であつたのだ、そこで彼は翌日、武との同宿を無斷でやめて、一人で出て行つて了つた。武は『男らしくない』と云つてゐるが、これはあまり事實の表面をのみ見すぎてゐる。(表面だけを見ておく方が武にとつては愉快だから……。裏面を觀破したならば、武は自責を感じて不愉快だから……。自己を非難し、自己の喰人本能を拒否しなければならないから……。これまた分析學で云ふ抑壓現象である。)

『……君怒つちやァ不可ぜ、奈良原(武)のやうの奴を首席に戴いて有難がつては居られないつて、宮川が云つてゐたとの或る友人の言葉に、武は『ハヽハヽ、然う僻まれちや困る、何も戴いて貰はなくても宜いが……』と云ふが、この武の笑聲には何と勝利感の露はなことであらう。

兩人はまた、將來の方針に就いても論爭(暗鬪)をする。武は云ふ——

『……其君の(美術の)腕で、法律なぞへ走るのは、ま、宛然寶玉を溝泥へ投げるやうなものぢやないですか……法律

は君、餘程意志の强固な、頭腦の明晳の人ぢやないと不可ないつて云ふが——つまりその、常識に富んだ、へゝ平凡の人間のやる仕事ではあるまいか、ねえ君。』

武の宮川に對する愛憎二元（アムビヴレンツ）はこの一句にほど明瞭に現はれてゐるところは他になからう。武がやらうと云ふ法律に、勿論宮川も恐らく實際向きもしないのに、走らうとするには、そこに武への競爭心が加はつてゐることは確らしい。併し、自分がやらうと云ふ法律は『餘程意志の强固な、頭腦の明晳な……』と云つたのでは、俺は『意志强固で、頭腦明晳』だが、お前はさうでないと云ふのと同じ效果を與へることは確だ。で、これは失言と思つてか、急に『常識に富んだ』と云ひかけて見たが、これも『お前は非常識だ』と云ふやうに聞える。で、愈々慌てゝ『へゝ平凡の人間のやる仕事……』と胡麻化したのである。併しもう間に會はない。神經質な宮川は相手の惡意を感じていきり立つた。

『意志、頭腦……僕だつて！』と眉を昂げ、下唇を噛むことは、自然である。

作者が人間のこのアムゼヴレンツを十分に意識してこの小説の全篇を作りこの場面を描いたのだとすると、著しいことに思へるが、或はたゞ『踏花同惜少年春』と云ふ感傷的效果を目指してゐて、偶然に事實的材料にひきづられて、人間心理の鋭い現實性が露見したのであつたかも知れない。

最後に、王子精神病院に宮川を見舞つた奈良原武が、『墓場の石なら縋つても泣かう』と述懷してゐる心には、愈々相手の骨まで「喰つて」了つた自分の罪障感に對する自責の感がないと云へるであらうか。醫師の扱方が氣に入らぬと云つて『貴郎方は精神病者の取扱ひを知つてゐるかと云ひ度かつた』のは、自分に向けるべき非難の鋒先を、他に轉嫁してゐるのだと、果して云ひ得ないだらうか。

『文明の口——會社や汽車の煙突——が吐く煤煙裡、——二百萬の人口が、生きんがため、食はんがためと、餓鬼となつて戰ひ合ひ奪ひ合ひつゝある大日本帝國の首都東京の都北——王子精神病院に……』などゝ云ふ文句の内に見られる、とかく『口』や『食』に卽して人生を考へる作者と主人公の性格傾向に、やはりその口唇加虐的定着が判然と覩取せられるやうである。さうしてさう云ふ虐待本能のまだ十分に眼醒めなかつた時（九六頁末へ）

講座

攻擊慾と性本能

長崎文治

私は前號に於いて、我々の無意識の思想は、多くは意識から抑壓されたものだと論じたが、然らば、如何なる思想や意向が抑壓を受けるかといふ事が次に問題となる。これに對しては比較的簡單に、而も正確さを損することなしに、答へることが出來る。卽ち、抑壓される事項は、多くの場合、吾々に不快な事柄とか性的な事項で吾々の知る範圍に於ては、特に後者の方が最も多く抑壓を受ける。併しこれは驚くには當らぬことである。何となれば、若し抑壓作用の存在が否定出來ぬとすれば、不快な事柄とか、性的衝動とかゞこの抑壓を受ける事は當然だからである。現に今日の文明をほんの表面的に考へてみたゞけでも、この文明の條件が、その樣な衝動の統制と禁制とを不斷に要求しつゝあることは、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがある。たつた一日の中に於てさへ、如何に多く吾々は、生活上の些細な失策とか、屈辱とか、苦腦等から生ずる苛立たしさの氣持を無理に抑へつけなければならないことであらう。併し人生にはかゝる苛立たしい事柄の外に、可成り前からの、殆んど永久的と云つてもよい程の不快さの原因がある。現に人間といふものは、お互に提掔し合つて行かなければならない者同志の間にさへ、意見とか氣質の不一致があり嫉視があり、競爭があるのに、而もその不快さを適當に吐き出すことは許されないといふ始末である。精神分析學上、殊に重要視されて居る抑壓とは、この長期に亘る方の不快さの抑制、殊に人生の初期に於ける抑制を指すのである。現代文明、否何時の文明でもが、如何に性的衝動を拒否することを要求してゐるかといふことは、この問題に就いて少しでも率直に内省したり、觀察するならば、容易に了解出來る筈であるが、性的衝動が抑壓されることゝか抑制される衝動の性質が性的であるとかいふことに關しては最も疑念と反對とを受け易く、然も精神分析學の闘

明した他の諸問題よりも嫌はれる様である。

性本能の性質及發達についてのフロイド說は、精神分析學の全理論中で非常に重要なものであるから、その詳細なる說明は後に讓ることゝする。併し精神分析はこれほど一般から反對を受けたけれ共、若し精神分析說が、それ自身に於て眞理であるならば、その反對は當然豫想される筈である。個々の患者について、彼の抑壓されてゐる意向を意識に上らせやうとすると非常に大きな抵抗を示すことは、既に述べた通りである。併し又前にも論じたやうに、個々の患者のみが抑壓の爲めに苦しめられてゐるといふわけではなく、これは全人類の特性とも見られる。それ故、人類全體に向つて、文章を以て、抑壓されてゐるものゝ正體を示してやつたとすれば、恰も實際に分析を受ける人の埋藏されてゐる思想や衝動をあばく時と同じ様に、歡迎されない事は見易い道理である。精神分析說の結論に反對せんとする傾向は殆んど普遍的であり、精神分析運動の全體に附き纏つてゐたが、このことは精神分析の結論を無條件的に否認する爲めの議論にはなつてゐなくて、それどころか、却つて實際に於ては、この結論を支持する若干の證明とさへなつてゐるのである。

最も屢々抑制される衝動は、不快な自尊心を傷ける事柄と性とに關係があるといふことは既に述べたところであるが、フロイド派とアードレル派との學說上の主な相違點の一つは、恐らくこの二つの衝動に歸せられた禁制の重要さに關してゞあると云ふことが出來やう。心理學者として極夙くからアードレル Adler は、個人の自已主張慾の拒否といふことには、フロイドよりも重きを置いてゐた。(一體彼は頑固で、特にフロイドに對して反抗的であつたが、右の事實もこの傾向と關係が無くはない)。アードレルのこのやうな態度に就いて、フロイドは彼の言葉を擧げてゐる。卽ち「一生涯、貴方の日蔭者になつてゐて、我々は嬉しがつてゐるものだとお思ひですか」(註)と。アードレルの最初の最も興味ある觀察の或るものは、器官の劣等 Inferiority of organs と補償 Compensation に依るそれへの反動作用とに關するものであつた。卽ち、これに依ると、身體に或る缺陷があれば、それに相當する機能が發達して超過補償をする傾向がある。從つて始め劣等であつたものが、却つて優れて來る様になる。此の說明は疑もなく、非常に眞實であり亦價

値もある。周知の例としては、始め吃りであつたデモステネス Demosthenes が、後には大雄辯家になつたといふ話がある。この點から出發してアードレルは、男性的拮抗 Männlicher Protest（攻撃的氣力の主張）といふ方面に自己主張説 Self-assertion を發展させ、後には彼の心理學の總てはこの中に統一されるやうになつた。精神分析學者は決して、アードレルの注目せるこの自我といふ要素の重要性を否定するものではなく、實際に於て、近年この要素に非常な注意が拂はれるやうになつては來た。併し乍ら精神分析學者がアードレル説を非難するのは次の論據に基づくのである。

（a）精神分析學が苦心の末に發見した所の無意識作用及び複雜な細々した精神諸機能を共に輕視することによつて、彼の發見した自我を不當に重視したこと。（かくて彼は、例へば吃りの如き本來の劣等さの多くが、根深い禁制の結果であり、その超過補償（癒ゆる許りでなく一層よくなること）は「抑壓されてゐたものゝ恢復」といふ性質を帶び、倫理的にも一層是認さる得べき形をとつてゐるといふ點を充分明らかにしてゐない。

（b）彼の心理學は、人生の性的方面の重要さを全く看過して居、從つて本質的に又必然的に、一面的である。彼の體系に於ては、攻撃衝動が最も重要であつて、戀愛などは問題になる餘地は少しもない。フロイドの云ふ如く、これは誠に殺風景な見方であるが、併し無數の禁慾主義者の例を見ても分る通り、性的衝動を抑へ得る限りは、殆んど何んなことでも人間は我慢するものである。フロイドの言ふ樣に「性的桎梏に重壓されてゐる人類は『性の克服』といふ好餌をさへ見せられるならば、何にでも喰ついて來るものである」。この性慾の力を氣付かなくさせることに就いては、アードレルの心理學は、精神分析學擡頭以前のアカデミー心理學と同樣に如何にもうまくやつてゐるのであるが、吾々の只今の仕事は、アードレル説や其他の心理學を批評することでは無く、精神分析學を説く事である。併しアードレル説とフロイド説との相違を簡單に示して置くことは是非とも必要であり、性の問題に始めて觸れた只今の場合に於て、アドーレル説を紹介し批評しておくのは甚だ自然であると思つたのであるけれ共、フロイドの『汎性慾説』Pan-Sexualism（フロイド説の難者が、時々用ひてゐる言葉である）とても一面的のものである點では、アードレルの自我説

と同様であると人々は云ふかも知れないが、フロイドは幾度か聲を大にして、性的衝動は重要ではあるが、人間の本能はそれだけで盡きるといふ譯ではないと云つてゐることを特に斷つて置く。又精神分析學は進歩の道程に於いて、不斷にその觀察と學說を攝めて行きつゝ、而も最初に獲得した眞理を、その爲めに犧牲にすることは無かつたと云ふことを斷つて置く。他方アードレルの個人心理學は、攻擊本能を最も一般的な且重要な要素とする傾向が益々強くなり、性慾其の他の力を愈々頑强に認めまいとしてゐる。

註『精神分析運動史』（フロイド全集中、大槻氏譯『精神分析總論』二八六頁）參照。

精神分析語彙（三）

一、汚染――二つの言葉が一つになつて混亂して出て來ること。一つの觀念の傍に別の觀念が聯想されるためである。

一、思ひ付き――自由聯想の時に浮んで來る觀念を云ふ。

一、解釋術――夢や症狀行爲などを解釋してその無意識動機を判知する術である。

一、快不快原則――不快を避け快樂を追及する無意識の働き方を云ふ。これに反し自我は現實原則に支配される。人間の生活は常に快不快原則に從はむとする無意識と現實原則に從はむとする自我との妥協となつて營まれる。人間は現實原則に堪えられなくなると、自我と云ふ大將を殺して快不快原則の軍門に降を乞ふ。それが神經病又は精神症である。

一、解剖的違反――正常ならざる個所（例へば肛門その他の肉體的個所）を性的に利用すること。

一、加虐性――サディズムの譯語。虐待又は攻擊を加へることに性的又は一般に快樂を感ずる性質。

一、覺醒後に及ぼす催眠の暗示――催眠術をかけてその間に暗示を與へておくと、被術者は覺醒後にもその暗示のまゝに無意識的に行爲することを云ふ。

一、過剩纏綿――一つの觀念に（例へば意識化されることに依り）或る程度以上のリビドーが纏綿されること。

一、カタルシス――「洗ひ流し」に同じ。

一、過度決定――一つ以上の條件に依つて決定せられること。例へば性的象徵の如きは大抵は男性器のそれであると共に女性器のそれでもあるが如きである。

一、カニバリスムス――「人間嗜食」に同じ。口唇時代的なサディスティックな取込みの心理を云ふ。

一、勘――フロイドの Feinhörigkeit の譯。美學の術語たる感情移入 Einfuehlung の如き意。分析治療者に必要な資格

の一つであるが、分析學は科學であるから、勘そのものではない。(本誌創刊號に大槻氏がこの語を用ゐたに對し、朝日新聞の豆戰艦子はその眞意を誤解してゐた。)醫學でも、醫學そのものは科學であるが、醫者の技術には勘がやはり必要である。教育者にも必要である。

一、還元法——機智(洒落)に於いては、何か本人の云ひたい事が、抑壓(遠慮)に依つて匿されてゐる。機智を説明し解剖し、機智でなくして本來の意圖と意味とを明かにすることが還元法 Reduktionsverfahren である。

一、感傷愛——フロイドの Zärtlichkeit の譯語である。幼兒の兩親(又は特に異性親)に對する感情又はそれの成人に於いて殘存してゐるものを云ふ。

一、感動——Affekt の譯語。感情の基礎。

一、外出恐怖症——アゴラフオビアの譯。臨場恐怖症とも云ふ。

一、外傷——精神的打撃により心に受ける傷。

一、外傷性神經症——外傷に依る神經症。

一、願望充足——現實に於いて實現出來ない願望を空想的に又は代償的に滿足させること。

一、吸莖——フエラチオの譯。男性器を口唇に含むこと。變態性慾の一つなれど、元は母の乳房を含むことに出づ。

一、救助——母コムプレクスの一徴候。詳しくは大槻氏の「救助願望論」(殊に本誌第二號所載分)參照の事。

一、機智——云はむと欲して云ひ得ざる(抑壓せられねばならない)事を、形を變へて同じ效果にまで表現すること。機智の快樂はその際に擠せられたるリビドーの發散なりとの説明をフロイドは與へてゐる。

一、氣味惡さ——最も親しみあるものが抑壓せられ禁制せられて、無氣味となる。

一、氣欝症——躁欝病の欝狀態

一、去勢——精神分析學にては男根を切とること。その恐怖を去勢恐怖と云ふ。この恐怖が多くの神經症の源因になるとフロイドは云ふ。

一、凶眼——その眼に睨まれゝば災難である如き恐ろしい眼。

一、强迫觀念——思はざらむと欲するも思はざるを得ざるが如き、大抵は不快なる、意識内容。

一、强迫神經症——さう云ふ不快なる觀念又は行動に强迫せらるゝ神經症。

一、恐怖症——理由なく動物、場所、性癖などを恐れること。動物恐怖症、臨場恐怖症、赤面恐怖症、接觸恐怖症、密迫恐怖症、高所恐怖症その他の類別あり。

一、局所的見地——心理を空間的に想定する考へ方。例へば、意識、前意識、無意識に區別する如き……。局所的、動的、經濟的の三見地を綜合して、フロイドは超心理學と稱す。

一、拒否——リビドーの發露又は纏綿を許さゞること。

一、禁制——心的機能の特殊な場合、必ずしも病的なものでなくともよい。常態的の場合にも禁制と名付ける。(未完)

内外彙報

アイティンゴン博士からの來翰

本年六月十日付を以て本研究所からドイツのベルリン精神分析研究所長アイティンゴン博士に書を寄せ、同博士の近影、著作目錄、傳記などの寄贈を乞ふた（„……Es wird uns sehr erfreuen, wenn Sie dem Institut Ihr neuestes Bild, die Liste Ihrer Werke und kurze Lebensgeschichte schicken wollen.“）ところ、七月二十二日、左の如き返書があつた。

Sehr geehrter Herr Ohtski;

ich danke Ihnen vielmals für Ihren Brief vom 10. Juni und die Zusendung der beiden ersten Hefte der Zeitschrift Ihres Institutes.

Es wäre mir eine grosse Genugtuung, nachdem ich Herrn Yabe persönlich kennen zu lernen Gelegenheit hatte und neulich Herr Dr. Matawari hier bei uns im Institut zu Gast war, nun anch mit Ihnen in Verbindung zu treten. Es würde mich sehr interessieren, Näheres über Ihr Institut zu wissen. Leider sind ja aus der schönen Zeitschrift, die Sie herausgeben, für uus die photographischen Bilder lesbar.

Ich freue mich, Ihnen einige Berichte unseres Institutes mit gleicher Post senden zu können; es hat auf eine sehr schöne und fruchtbare, nun über dreizehnjährige Vergangenheit zuruckzusehen. Seine Gegenwart und vor allem auch seine Zukunft ist, aus begreiflichen Gründen, recht unsicher.

Sie finden im Zehnjahresbericht uneseres Institutes auch ein Bild von mir, es ist allerdings schon etwa zehn Jahre alt, doch habe ich leider keine neuen. Das Institut ist mein wesentlichstes Werk und meine Lebensgeschichte ist, trotzdem ich vor kurzem die 50 überschritten habe, nicht sehr bewegt. In den letzten 25 Jahren war die Ardeit für die Psychoanalyse der wesentliche Inhalt meines Lebens.

Mit den besten Grüssen an Sie und die kollegen
vom Institut und Ihrer psychoanalytischen Gesellschaft.

Ihr sehr ergebener

M. Eitingon.

即ちまづ當所からの書翰と二冊の雜誌に對する謝辭を述べ、矢部氏やマタワリ（マワタリの誤、馬渡一得氏の事）氏と面接して後は、大槻氏とも近付きになる事を喜び、なほ東京研究所の詳細に就いて知りたいと願ひ、雜誌は立派であるが、殘念ながら内容を讀み得ない遺憾の意を洩らし、次にベルリン研究所の業報三冊を別便で送つたことを案内し、その業報中には自分の寫眞があるしまたその事業が自分の生涯（五十の坂を既に越した自分の半生）の歴史であり仕事であつたことを斷つてゐる。さうしてこの研究所の現在及び將來は『御察しの通りの事情のためにどうなるやら分らぬ』と云つて居るのは、多分ナチスの斷壓の事を暗示するのであらうと思つて、博士が半生を捧げた事業のために、うたゝ同情を禁じ得ざるものがある。最後に、當方研究所員諸氏一同によろしくと云つて筆を擱いてゐる。

左にベルリン研究所の事業の歴史の大要を紹介しておくであらう。

ベルリン研究所の十三年

同研究所は一九二〇年にマクス・アイティンゴン博士の自費に依つて創立せられて今日に及んで（十三年）ゐるものであつて、その創立の動機は一九一八年にフロイド博士がブダペストに於ける第五回精神分析學總會に於いて『精神分析治療の道』の題下に述べた演説の主旨に基いてゐる。その演説の中で博士はかう云つてゐる――『まづかう假定して見ませう、何等かの組織に依つて我々分析者の數を非常に殖やし、もつと大衆を處置し得るに差支へないほどになつたと……。他方にまたかう云ふことも豫想される、即ち社會の良心が眼覺めて、貧民に對して現今生命を救ふための外科手術が施されてゐると同じやうに、精神生活を救ふためにも相當の手當が施されねばならないとの考へが起きて來、また神經症は結核と同じやうに、民衆の健康を脅かすものであるから、これまた結核と同樣、民衆中の各個人の無力な配慮に一任

しておくことは出來ないと・・・。さう云ふ事になれば、病院なり感化院なりが建てられ、精神分析者がこれを受持ち、酒の中へ遁れやうとしてゐる男、絶望のあまり身を持崩しさうになつてゐる女、不良になるか神經症になるかの分岐點に立つてゐる少年少女を引受けて、これを分析することに依つて彼等に反撥力と、行動力とを恢復してやるやうになるであらう。かう云ふ處置は無料でなされることになる。國家がこのやうな任務を痛感するやうになるのは、なほ前途遼遠であらう。現在の樣子ではその期間は、まだ〱延びることであらう。恐らく始めはさう云ふ組織が民間の慈善事業として起るであらう。併し何れの日か、それが國家的事業とならなければならない。』(フロイド全集第八卷分析療法論一九六頁)

フロイドのこの理想を實現しようとしたものがベルリンの研究所である。で、フロイドは一九三〇年に出た『十周年業報』の卷頭に語を寄せてかう云つてゐる。この研究所が分析運動中に占める位置と意義とは、第一に貧しき大衆のために分析の機會を與へたこと。第二に、分析の理論を經驗ある年長分析者に依つて敎へられるやうになつたこと。第三に、神經病に關する我々の知識及び治療上の技法を今までとは違つた事情の下に應用し試驗することに依つて練磨し完成することが出來るやうになつたこと。

さう云ふ研究所は必要であるが國家の援助を期待したり、大學からの同情をあてにすることは駄目であるから、どうしても分析者の實行力と犧牲的精神に俟たなければならない。アイティンゴン博士はそれを敢へてし、自費を投じて研究所を經營して今日に至つた。で、何等かの意味で分析學に興味ある者は誰しもアイティンゴン博士のこの努力に對して滿腔の敬意を拂ふに吝でないであらうとフロイドは云つてゐる。

本文に於いては、諸家がそれ〱部門を分つて同研究所の事業を細報してゐる。卽ち、——

一、同研究の歷史及び社會的意義——エルンスト・ジムメル E. Simmel.

一、一九二〇—一九三〇年間の治療成績の統計的報告。——フェニヘル O. Fenichel.

一、敎目、その組織などの歷史的大觀——ミュラー・ブラウンシュワイグ D. Müller Braunschweig.

一、診療制度に就いて——ラムプル H. Lampl.

一、教習所に就いて

（A）その組織――ホルナイ K. Horney

（B）分析者分析――ザクス H. Sachs.

（C）理論科――アレクザンダ F. Alexander.

（D）實習科――ラドー S. Rado.

（E）教育家のための分析教授――ベルンフェルド S. Bernfeld.

（F）給費金――ベーム F. Boehm.

（G）研究所の宣傳――ハルニク J. Harnik.

一、研究所に對する諸外國の興味。

以て事業の大要を察するに足るが、なほ、内容の細々したことは他日必要に應じて紹介するとして、今日はこれだけに止めておかう。

印度精神分析學會からの來翰

當研究所から印度學會のボース博士 D. G. Bose に宛て、本誌と書翰とを寄せたのは五月十四日であつた。創刊號には印度學會の活動を『國際精神分析學雜誌』第十三卷から譯して紹介しておいた事を告げ、なほ我等と我等の國民とは同國の斯學各方面に於ける活動に就いて詳細を知らんことを欲し、また各會員の小照をも頂戴いたしたいと依賴してやつた（“. . . . We and our nation are very eager to know more precisely of your activities in various fields, and if yon would favour us with the list of your publications and pictures of your members, etc., we should be much pleased.）ところ、ボース氏からは六月二十七日付で、七月二十五日に當研究所に返書が届いた。

Dear Dr. Ohtski,

I was so glad to receive your letter and to learn that you have been managing a Psycho-analytic Institute in Tokyo. I have been receiving your Journal regularly, and I had one or two articles translated to me by a Japanese knowing friend of mine. We do not publish any Psycho-analytic jonrnal here, but there is a journal called the “Indian Journal of Psychology” which publishes contributions from the members of our group. I have asked my Secretary to send you

copies of this journal. I have been trying to get photos of the different members of our society and shall send them to you when I get them ready. I hope the bond of union between your society and ours will gain in strength by mutual correspondence and co-operation,

Wish you success for the Institute.

I remain yours sincerely

G. Bose

即ちお手紙と雜誌とは嬉しく拜見した。誌上の一二の論文は日本語を知つてゐる友人に譯して貰ひました。當方では精神分析專門雜誌は發行してゐないが『印度心理學雜誌』と云ふのがあつて、それに當會員の寄稿が載ることになつてゐます。で、書記長に依賴してそれを幾部かお送りいたします。會員の寫眞はそれ〴〵只今取揃へ中だから出來たらお送りします。貴所と當會との聯結が相互の通信と協力とに依つて益々力强くなつて行くことを希望しますと云ふ意味である。

續いて、八月二日には圖書主任のミトラ博士 Dr. S C. Mitra（ライプチヒ大學哲學博士）から書翰（七月五日付）が屆いて、當方學會長の依賴に基き、別便にて『印度心理學雜誌』の關係事項所載號全部をお送りしたと云ふ案內があつた。鶴首して待つてゐたところ、翌三日に雜誌が十九冊屆いた。全部英文の雜誌で、精神分析に關する印度獨特の好文獻が滿載されてゐて、我々を狂喜せしめた。何れ本誌上で、逐次それを邦譯紹介して行くであらう。たゞ、所々サンスクリットが挿入されてゐるのには、我々は閉口する。何人がこの方面に就いて我等を援助せられるサンスクリット學者はないか。

最近の國內事實

★東北帝國大學醫學部精神病學敎室業報『精神分析論叢』第二卷第一、二號合卷は、六月廿五日に發行された。詳細內容は時評欄を參照ありたし。

★本研究所客員古澤平作博士は世田ケ谷區東玉川町三五八七番地（電話調布七一八番）にて精神分析診療所を開始。

★『處女の夢』（『健康時代』八月號）大槻憲二稿。

★『鈴木保德君の藝術』（『獨立美術』第八號。七月二十五日、建設社發行）大槻憲二稿。

★本誌前月號内容に關しては、巻末奥付上を參照ありたし。

國内記事は、非常に氣をつけて四方に眼を配つてゐるがどうしても見落すことがある。氣の付かれた方は一々御報告下さると有難い。

相　談

泣き易い長女

【問】。一月生れの數へ年五才の娘、生れも少し早くて體も弱い加減か、少しの事でも泣き、一日中さうした狀態なのです。近所の子供が來ても、遊びもしません。どうしたらよいかと惱んでゐます。主人は勤めに出て一日不在なので、お前の育て方が惡いからだと申します。尤も直ぐ次に年兒の弟が居ますのでその子を見てやると機嫌がわるいのです。如何に躾けたらよいでせう。（若き母）

【答】。一人子でない以上こうした問題は程度の差こそあれ大抵の家庭で經驗される事と存じますが、この御子さんは殊にひどいやうです。年兒の方がゐられて、その方に御母樣の手が余計にかゝるのを見て、御母樣の愛情が、弟さんに集つてゐるとの嫉妬心に基いてゐるのであらうと私は考へます。子供は案外直觀で、母の愛情に對する評價などは殊に敏感で本當のことを感じますから、お母樣である貴女の注意が一番大切であらうと存じます。「母に愛されてゐない」と感じてゐる子供は、どうしても泣き虫でひがみが强く、大人から見ると、人を手古ずらして喜こんでゐるとさへ見えるやうですが、から云ふお子さんにとつてはやはり母親の愛情が一番必要なのですから、弟さんのお世話などは姉さんの前では少々ひかへ目にし、凡ての事に、「自分も愛されてゐる」と云ふ感情を植え付けるやうになされば自然扱ひいゝお子さんになると思ひます。今が非常に大切な時期ですから、忍耐强く努力をお續けになるやうおすゝめいたします。このまゝ置いても種々に變つてよそ目にはいゝ娘さんになる事もありますが、それはうはべ丈けで、幼少期のかうした事が、成人になつて人格的に大變な影響を及ぼし、延いては一生の運命に關しますから、出來る丈け自分を反省して御子さんに對するやう希望いたします。

編輯後記

殆ど豫告通りの、否、豫告以上に充實した『兒童心理研究號』を世に送る事が出來た。編輯の苦心もさる事ながら、酷暑の候に拘らず誠意を以て執筆して下さつた諸學者に對して我等と讀者とは深く感謝しなければならない。兒童心理もまたなか／＼重大な問題であるから、また號を改めて研究を進めて行くであらう。

×

執筆者中の新顔を御紹介いたします。

高島平三郎氏は備後福山の人、昔の下等學校を卒業しただけでその後は全くの獨學との事、實に立志傳中の人であります。學習院、長野師範、日本女子大學などに敎鞭をとり、今日では東洋大學、立正大學の敎授である。我が國に於ける兒童心理學の父祖であつて『丁度今から半世紀前からやつてゐた』と自分で言つてゐられる。現在も月刊雜誌『兒童研究』（明治三十一年十一月創刊）を塚原博士等と共に編輯してゐられる。著書としては『心理學綱要』、『兒童研究』、『兒童の精神及び身體』など、澤山にあります。

×

塚原政次氏は兵庫縣姫路の人、明治三十年に東京帝大哲學科卒業、兒童心理學專攻。國學院・農科大學內敎員養成所などに敎鞭をとり、三十四年には心理學研究のために獨米二國に官命に依り留學。以來、廣島高師敎授となり、大正十三年には文學博士の學位を得、昭和二年東京高等學校長となつて現在に至る。著書としては『敎育心理學』、『實際心理學』（二卷）、『靑年心理』、『兒童の心理及び敎育』など十數卷。

伊東豐夫氏は東京高校に於いて博士の指導を受けたこと、宛も長崎文治氏が東洋大學に於いて高島敎授の門下であるのと一般で、師弟仲よく本誌に執筆してゐられることは誠に大慶至極と申さねばならない。伊東氏の譯されたアンナ・フロイドはフロイド博士の令孃であることは云ふまでもない。

×

森茉莉さんは故森鷗外博士の第一令孃であつて、嘗てフランスに遊學し現在も續いて佛文學を研究してゐられる。『ルルウ』の飜譯（本誌第二號七八頁、寄贈著書欄參照）などあり。創作の筆も執られる。本號所載の感想文は、今は亡き父博士への父コムプレクスを判然と表現せられたものである。讀者、分析眼を以て精讀せられよ。

×

井原鋒郎氏は早稻田小學校に敎鞭をとりつゝ兒童心理に興味を有し分析學の必要を痛感せられる篤學の人である。

×

九月の研究會は月半ば過に催しますが、出席希望の方には、改めて御報告申上げます。

×

今般都合に依り、本誌は東京精神分析學研究所出版部から發行發賣いたすことになりました。右御承知おきを願上ます。次號から前月廿日前後に雜誌は市場に出ます。

研究所事業案内

一、分析部

●神經症治療（ヒステリー、强迫症、恐怖症、妄想症その他）

●性格改造（惡癖、奇習など現實生活に不適當なる性向にして無意識病根に基くもの）

●客員の診察（分析的又は醫術的）希望の方には、紹介の勞をとるべし。

二、敎育部

●當研究所主催の講演會、公開講習會、演劇その他。

●所員並に客員に對して他より依賴の講演又は講習會。

三、出版部

精神分析に關する雜誌及び圖書の出版。

四、研究會

每月一回開催その都度通知、出席希望者に對しては別に資格制限を設けず。會費は食費及び誌代共月額一圓。（但し臨時出席者に對しては誌代を別に申受く。）

五、講習會

每月一回、於研究所開催。その都度通知。會費五十錢。

前月號內容（五十錢）

——（夢の硏究、第一特輯號）——

昭和八年九月五日印刷
昭和八年九月十日發行
第五號
定價五十錢（郵稅四錢）

編輯者　大槻憲二
東京市本鄕區駒込動坂町三二七
發行者　大槻憲二
東京市牛込區改代町廿四
印刷所　理想社印刷所

定價一部　五拾錢（郵稅四錢）
半年分　參圓（送料共）
一年分　六圓（送料共）

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。

●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、**振替口座東京七八八一七番**へ御拂込み下さい。

●郵券代用の場合は一割增に願ひます。

●本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

發行所　**東京精神分析學研究所**
東京市本鄕區駒込動坂町三二七
振替口座東京七八八一七番

!!來月號豫告

社會思想と犯罪心理の研究

來月は社會思想と犯罪心理とを併せ分析的に研究する。これ等二者は必ずしも必然的關係があるとは限らないが、また時に合致することもある。目下人々の重大關心の對象、乞ふその成果を期待せよ。

ドイツ語講習會

精神分析學を徹底的に研究するためにはドイツ語を學ぶのが好ましいことであると云ふので、希望者が大分ありますから、多忙な大槻憲二氏を煩はして毎週一回宛ドイツ語講習會を催すことになりました。詳細は何れ希望者全部の都合を打合せて後に決定いたしませう。とにかく希望者は、この際序ですから、御申込みを待ちます。

研究所教育部

草光信成畫伯

寄贈作品頒布會

精神不析に關する内外の文獻は、只今では獨立の一圖書館が出來てもよいほどまでに多數に上つてをります。當研究所は全力を擧げて各國文獻の蒐集に努力してをりますが、何分にも資力に乏しきを嘆じてをりましたところ、この度、帝展の無鑑査推薦作家として特色ある畫風を讃へられてゐる草光信成氏が、その自信ある水彩畫約十數點を、その資にとて御寄贈下さいました。

草光氏の水彩畫の優秀なることは、二科會員會宮一念氏が『現今、水彩畫筆をとつて草光氏の右に出づるものはないと確信する』と云ひ、當研究所の大槻氏が『その風格の高雅に於いて雪舟を偲ばせる』と云つてゐるに徵しても分ると思ひます。點數に限りがありますから御希望の方はなるべく早く御申込みを願ひます。（御希望の方には實物を御覽に入れます。）

額緣大きさ……………一尺六寸七分――一尺四寸

價　　格……………各二十圓（送料不要）

拂　込　み……………振替口座東京七八八一七番へ

東京精神分析學研究所

精神分析文獻鈔

フロイド精神分析學全集

- （第一巻）夢の註釋　定價一圓五十錢　送料十二錢　大槻憲二譯
- （第二巻）日常生活の精神分析　定價一圓七十錢　送料十二錢　大槻憲二譯
- （第三巻）社會・宗教・文明　定價一圓八十錢　送料十二錢　長谷川誠也譯
- （第四巻）快不快原則を超えて　定價一圓五十錢　送料十二錢　對馬完治譯
- （第五巻）性慾論　禁制論　定價一圓七十錢　送料十二錢　矢部八重吉譯
- （第六巻）分析藝術論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯
- （第七巻）トーテムとタブー　矢部八重吉譯／自我とエス　對馬完治譯　定價一圓八十錢　送料十三錢
- （第八巻）分析療法論　定價一圓九十錢　送料十二錢　大槻憲二譯
- （第九巻）分析戀愛論　定價一圓八十錢　送料十二錢　大槻憲二譯
- （第十巻）精神分析總論　定價二圓　送料十二錢　大槻憲二譯

東京市日本橋區通三丁目八番地　春陽堂書店

電・日本橋・五一番
振替東京一六一七番

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和八年九月五日印刷納本 毎月一回一日發行 精神分析 第五號 定價金五十錢

I. Jahrgang, Heft 5, Sept. 1933. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom "Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Kinderpsychologie.)

Inhalt

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Tokio Psychoanalitischer Verlag,
327, Dozakacho, Hongo-ku, Tokio Japan.